
銀魂～集合！真選組！！～

梨栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂く集合！真選組！！く

【Nコード】

N6438M

【作者名】

梨栖

【あらすじ】

女だという理由で刀を持ってない須藤^{すどう} 恋歌^{れんか}はぐれていたところをひよんな所から近藤と出会い真選組副局長に任命される。一方、戦鬨種族『兎月族』の少年、御月^{みつぎ} 李麻^{りお}は真選組に惚れて、二番隊隊長に就任する。事件や上下関係に悩まされながらも（？）ありのままの自分でいれる真選組を好いていた。ギャグあり、ラブあり。少女が大人へと進んでいくストーリー！？第二部です。最終章突入！そして完結。

〜あじさつ〜

二度めまして梨栖^{りす}です。初心に帰って第二部製作にかからせて頂き
m・・・あべし!!

「何が初心に帰って、か!! やっと完結して休めると言うたらコレ
かこの詐欺師!!」

「給料払えこのバカ女!!」

恋ちゃんに李麻くんじゃないの。イカンよ作者を蹴っ飛ばしたりし
ちゃ!

とくに李麻くんに蹴られたら冗談抜きで死んじゃう!!

「それでも良いんじゃない?」

「悲しむ奴はおらねど、喜ぶ奴は山ほどいよう。」

ノオオオオオオオオオン!! これ以上心身ともにボロボロにしないで
おくれよ!

お願いやめて! 人参やるから! 憧れのあの人とキャツキャウフフさ
せてやるから!!

「キャツキャ・・・ウフフ?」

「人参・・・？ホント？？」

この作者に出来ないことはない！出来ないのは運動と勉強だけだ！

「そこまで言うなら・・・まあ第二部もやってやらん事もないが・・・」

「べ、別に作者のためじゃないから！人参のためだからね！」

本人等もやる気満々のようでよかったです。それでは、第一部からご覧になってる皆様。

もうしばらくお付き合いお願い致します。そして初めましての方々。

第一部から見ないと分かりづらいかと。下記のURLにレッツラゴ
！！！！

<http://ncode.syosetu.com/n2110j/>

申し訳ありませんが初めましての方の配慮はないかと。

「全部見んの？ウワダル」なんて方は

第二部～第九部と第三十三部～第三十七部だけで読んで頂ければ^^

では、ヨロシクお願いします！！

く日記って読みふけてると目的忘れるよねく(前書き)

只今カラオケのバリエーションを増やそうと

平原綾香さんの「ノクターン」練習中です。きつい!!

「日記って読みふけてると目的忘れるよね」

あの忌まわしい同時多発テロから早二週間ほどだろうか。

いつもどおり騒がしい屯所が戻ってきた。

縁側を紺色の髪に紫の目をした華奢きゃしゃな美少年が駆けていた。

『局長室』と札がかかれた襖を開ける。

彼の名は御月みつぎ 李麻りおここの二番隊隊長だ。

「こんどーさん！」

少年、李麻が呼んだ彼は近藤こんどう 勲いさおここ真選組を統べる男である。

「おお！李麻か！二番隊はどうなってる？」

「まあ頭数は揃ったよ。その報告に。後、病院にはちゃんと二、三人向かわせたよ。」

「ありがとうな！」

近藤は大きな手で李麻の小さな頭を撫でた。

「こんどーさん。やめてくんない？ゴリラが移る。」

という少年の愛らしい容姿からは連鎖できない発言を浴びせられながら。

と、同時に屯所の前にパトカーがついた。ドアが次々開け放たれる。

後部座席から出てきた栗色の長く真っ直ぐな髪に深緑の目を持った美女が屯所を仰ぎ見る。

彼女が真選組の紅一点、須藤^{すでう} 恋歌^{れんか}。彼女は真選組第二の副局長。

右の膝下をギプスで固め、松葉杖を突いて前へ進んだ。

「須藤恋歌、只今戻りました。養生中、ご心配の程をおかけ致しました。

ですがこの通り、治りきってはおりません。しばらくは事務仕事しか出来ぬかと・・・」

局長室に向かった恋歌は深々と頭を下げた。

「いやいや！気にせずゆっくり休んで、また元気に剣振ってるところを見せてくれよ！」

「はっ！」

また頭を下げて、局長室を後にした。

「ふくちょー！おかえりい！！」

局長室を出て真っ先にこちらに来たのは李麻だった。

「あー、ただいま。ただいま。」

飛びついてくる李麻を右手で静止した。

そーいやあの時、書きかけの書類があったな。

今更思い出して、びっこをひいて、自室へと向かう。

「どこ行くの〜?」

「自室じ・・・・・・・・でああああ!!」

突然倒れたかと思うと骨折部分を押さえて、身悶えしだした。

「そ・・・・・・・・総悟オオオオ・・・・・・・・貴様アア・・・・・・・・これは痛ツ・・・・・・・・アガガガガ。」

「いい反応ですねィ。アンタ存外Mの気質もあるんじゃないですかィ?」

「SでもMでもいいから取り合えず骨折部分突付くのヤメロ!痛いから!冗談抜きで!」

彼は沖田^{おきた} 総悟^{そうご} 一番隊隊長である。

本来登場人物はあと一人くらいいたが、今回はそれくらいに……

「作者アアア! テメツ……何次回持ち越しにしようとしてんだア!?!」

いや、アナタの紹介は次でいいや。と思ったので(めんどくさいしね)

「本音丸見えなんですけどオオオオオ!」

紹介しよう。今、怒号している彼の名は土方^{ひじかた} 十四朗^{とっしろう} 真選組副局長である。

「アレ、土方さん。まだ生きてたんですかい? せっかくケーキにタバスコを……」

「やっぱりテメーの仕業か……」

急に言葉が停まる。ようやく痛みと一旦は決別し立った恋歌と目が合っ

目が合った彼女は若干気恥ずかしそうに顔を掻きながらボソボソと言った。

「あー・・・あの一件では迷惑かけたな。でもこの通り元気になっ・・・ってオイ！」

何でそんなに後ずさっておるのじゃ！人をバケモノでも見るような目で見おってからに・・・」

彼女が言うように、土方はあの一瞬で必要以上に恋歌から距離をとっていたのである。

理由は言わずともがな。おそらく自分がした事を思い出した。と言ったところだろう。

「い、いや大した事ないんなら別にそれで・・・」

まるで付き合いたての恋人同士のようにギクシャクした空気。李麻は小首をかしげた。

「沖田さん。どうなってんの？明日地球は終わるの？」

「知らねエ。」

少なくとも事が自分にとっていい方向に流れている事に気付かない少女であった。

自室に戻って、書きかけの書類整理でもしようと思った恋歌は机に座ったと同時に固まった。

「あれ？・・・・・・・・え・・・・・・・・アレ？」

何故なら、焼いて捨てたはずの日記がここにあるからだ。その代わりに書類がない。

(……何でここに置いたはずの書類がなくて何で焼いたはずの日記がここに？

いや、それはいいとして。書類焼いたらシバかれるよな？まあそれもどうでも良いのだが……

問題は日記！！出る前においてた場所より1mmズレておる！！誰かに見られた！？

屯所内の誰かに見られた！？はたまた外部か？どっちにしても最悪じゃー！！）

動揺が隠せない中、引き出しからある書物を取り出した。

「本当はあまり使いたくなかったのだが仕方ない。」

その書物には『銀魂く出動！真選組く』と書かれていた。

「第二部一発目だし、過去を振り返るには丁度良いし、誰に見られたかも分かるし……」

一石二鳥というもの！」

パラパラと自分が登場していないページをめくった。そして真実にたどり着いたようだ。

「李麻に山崎の奴・・・！！どうりであの寝巻きが一着足りんと思うたら・・・！！」

どうやら違う場所を見ていたようだ。

「あと出ておらぬところといえば・・・ああ、ここくらいかな？」

あ、李麻の奴町娘に片想いを・・・ブフッ！フラれてやんのー！」

などと言う独り言が時おり繰り返されるが、日記の真相は彼女が知る事はなかった。

く王様ゲームは合コンで一番盛り上がってる時に企画すべし!く(前書き)

初っ端からやったって王様は何をどう命令すればいいか分からんからね(´ω｀)

と、若かりし日はモッテモテのウハウハだったというマミーが言っていたよ。

第一部最終章の憂さ晴らしをせんと当分はgdgdなギャグばっか。

「王様ゲームは合コンで一番盛り上がってる時に企画すべし！」

「お前等。覚悟はいいだろうな？負けても恨みツこなしだぞ。」

「分かってる。」

「罰ゲームは回避不可能じゃ。」

「イカサマは無しですぜイ。」

「絶対負けるもんか！！」

「悪いけど今回は負けませんからね！俺！！」

「よし、よく言った！それじゃあ『チキチキ☆王様ゲームでくじ引き大会』は始めるよー！！」

恐らく全く状況が呑み込めない読者の皆様のために、少しだけ時間をさかのぼることにしよう。

*****20分前*****

局長室に集合した、お馴染みの面々。何時になく真面目な顔つきで
近藤は口を開く。

「実は面倒な事になってなあ・・・明日、この中で一人か二人、と
つつあんと一緒に・・・」

自分達のボス的存在に当たる松平の護衛か・・・一同ゴクリと唾を
飲んだ。

「吉原へ行かないといけなくなった。」

「「「ただ、遊びに行くだけじゃねーかあああああ！……！！」」」」

緊張の紐が一気のほどけ、近藤に突っ込みを入れた残る五人。

「だってえ！？しょーがないじゃん！！明るくなった吉原行きたいってあのオッサンがさあ！？」

「僕が行くよ。行ってあのオッサンを文字通り地獄パラダイスに送り届けてくる。」

「聞いたことねえよそんな恐ろしいパラダイス！大体そこにも自警団くらいいるだろ？」

「そうだけ規則だししょーがないじゃん！？行って来いトシ！」

「李麻が行くと言ってるし、李麻に行かせればいいだろ。な、李麻。」

」

「気が変わったー。沖田さん行って来てー。」

「俺ア一応未成年なんで遠慮しときまさア。須藤さん頼みやす。」

「吉原の人、ヤダ、コワソウ。行ってこいや山崎。」

「局長が聞いてきたんですから局長が……。」

という会話が二、三回繰り返されたその時、近藤が切り出した。

「ええい！！話し合いじゃ埒があかねえ！ここは場の空気を読んで王様ゲームで勝負だ！！」

ルールはコチラ！！」

ルール

・ゲーム進行そのものは従来の王様ゲームと同じ。（知らない人はウィキペディア見てきなさい！）

・今回はひいた番号を王様に言われた回数が一番多い人が罰ゲームの対象者となる。

（必要とあらばドベから2番目の人も）

・罰ゲームⅡモチロン『松平と行くぶらり吉原の旅』へのチケット。

・イカサマや、王様の命令を無視・無実行の際、有無を言わずチケット獲得権を得ることが出来る。

「というわけで……いざ、尋常に……」

「」「」「勝負じゃあああああああ！」「」「」

……というやり取りがあって今に至る。今、割り箸がそれぞれに
行き渡ったようだ。

「キャッホウ！僕王様だぜい！」

『King』と書かれた割り箸を振り回して喜ぶ李麻。次に言う事を思い出して笑みを浮かべた。

「じゃあ2番の人、今日は寝るまで語尾に『マヨ』ってつけて話してください！」

じゃ、2番の人！手始めに『了解マヨ』って言ってくれるかな・・・」

小悪魔のような笑みを浮かべて、2番の割り箸を持った人間が現れる事を待った。

「何でマヨ!？」

「あー、何か土方さん見てたら衝動的に。みたいな？」

色白の手が、『2』と書かれた割り箸ごと震えている、よほど屈辱的なのだろう。

「りよ・・・了解・・・マヨ・・・」

ハンカチをギリギリかみ締めながら恋歌がそう言った。

「須藤さん！ 気を確かに持ってください！」

「こっ……これ以上ない屈辱マヨよ……」

コレ以降、彼女が笑いながら王様ゲームを嗜む^{たしな}日が来るのだろうか。

そうして、また新たに割り箸が個々の手に渡る。

また『King』の割り箸を手にした者の口元が吊りあがる。

真選組の夜はまだまだ長いのであった。

く勝負において最も危険な瞬間。其は己の勝利を確信した時であるく（前書き）

先に謝つときます。土方しゃん・・・偉いことになっちゃったニヤン。

ないで結構です・・・」

『1』の割り箸を持っていたのは総悟であった。

「あー、俺一番だ。でも何か悪いなあ。」

心のない感謝の言葉を述べて、割り箸を交換した。

「じゃー5番の人ー。このゲーム終わるまで語尾に『ニャン』つけて下せエ。」

今度は間髪要れずに5の割り箸を持っていた人物が現れる。

「総悟テメー絶対5番誰か分かってただろニャン・・・確信犯だろニャン。」

「やだなあ、土方さん。いちいちそんな事言ったらノイローゼになりやすぜイ？」

「プッ！語尾にニャンだってー。」

「まあ、お似合いな語尾マヨなし。プククッ…」

「何笑ってるニャン！？大体語尾に『マヨ』付けてる人間に笑われたかないニャン！！」

「おまっ…人が気にしておることをヌケヌケと…お前に分かるマヨか！？」

世界一胸くそ悪い単語を語尾にしなきゃならぬ人間の気持ち分かるマヨか！？」

「世にも恥かしい単語語尾につけねえといけない人間の気持ちは分からないニャンか！？」

「ネコの魅力なめた口利きおって…表出ろゴラマヨオ！ネコの魅力を一から叩き込んだるマヨ！！」

「テメーこそマヨの魅力を分かってもらおうじゃねーかニャン！！」

「残念でしたマヨ」。ンなもんにも最初から魅力なんてないマヨよ。」「

「やめねーかトシ、恋歌。ゲームの途中に……」

「うるせーよお前からやったるか（ニャン／マヨ）！！」

「ケンカしても命令はちゃんと実行するってある種才能だねー。」

「ですねー。」

「よっしゃー！私の時代が来たぜマヨ！」

次のくじ引きが終わった頃、恋歌がそう言った。

「何命令するマヨかなー？どうするマヨかなー？」

（（（（絶対ロクでもねー命令が来るに違いない））））

一同の不安を他所に、恋歌はおもむろに口を開いた。

「じゃあ・・・3番の人、夜が明けるまで犬神家やっててくれたらそれで良いマヨ。」

（（（（えげつねー命令キタアアアアアアアア！！！！！））））
）

（オイイイイ！あいつ、何考えてるニャンンン！？朝までって死ぬじゃねーかニャン！

まあ俺は4番だから問題ないとして・・・ニャン。）

（そそそ、そんなこと言ってる場合じゃないですよ副長！番号確認しましょう。

よかったー俺2番。）

（僕1番だーやったあ！！）

(俺ア5番でさア。近藤さんは・・・まさか・・・)

と、声をかけた時には近藤はもう恋歌に土下座をしていた。

「あの、コレだけは勘弁してもらっても・・・もう吉原でも何でも行くんで。」

「アンタにプライドってモンは無いんかいいいいいい!!」

「いや、俺が局長でもああしてたと思いますよ。」

こうして、あっけなく幕が降りた。近藤の敗北と言う形で。

「こんどーさんだったら別に一人でもいいよねー。」

「あーそうじゃな。明日はゆっくり休むとしよ・・・」

恋歌が言葉をとめたのは、李麻がニタニタ笑っている姿を見たからだ。

「ふくちよーも行っといで?命令違反として。」

「は？何を世迷言を申しておるのじゃそなたは。ゲームはもう終わったであろう。」

「そうだけどゝ．．．僕は『今日寝るまで』って言ったはずなんだけど？」

その時完全に目が見開き、肩を揉んでいた右手が項垂れた。

「チツクシヨ一一一一一一一一一一一一マヨ一一一一一

|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
!
!
!
!
!

く勝負において最も危険な瞬間。其は己の勝利を確信した時であるく（後書き）

山ナシ！オチナシ！！意味ナシ！！、^p^ノ

くさつきもメイもどっちも五月く（前書き）

今一番の幸せ…読者様が送って下さった感想を読み返してニヨニヨすること。

今トトロ観ながら書いてます^^

近藤さんには悪いけどメイちゃんカワエエやね（ωゝ＊）

小トトロと中トトロの驚きぶりもカワエエよ（ゝωゝ＊）

くさつきもメイもどっちも五月く

男は天国女は地獄。昔からそう言われ続けられてきた場所。それが吉原。

天人襲来の際に紅蓮の炎に包まれたものの、再び夜王によって再建された。

その者は、今はもう文字通り星になってしまったが。

夜王が消えた際にまた此処に光が戻ってきたらしい。暖かく降り注ぐ太陽の光が。

何でもバカ強い木刀持った侍と、子供二人の活躍によるものらしい。

ここでは灯りなどなくても月夜が眩しいくらい照り付けられていた。

そんな中、松平がゲームに負けた二人を引き連れて夜の吉原をさ迷い歩く。

「いやあーオジさんびつくりしちゃったよオ。まあさか吉原で月が見れる日が来るとはなあ…

しっかしオメエ等暗いなア……。恋ちゃあん。そんな顔じゃ美人が台無しだあ……。」

「触んなボケナス。」

肩を抱こうとした松平の手をピシャリと払いのけた。

「ホントに暗いなあ……。」

「だってえ！？ゲーム自体には勝ったんだぞオ！？まさかあんな落とし穴があるとは……。」

『銀行強盗成功したと思ったらお向かいが奉行所だったー』くらい情けないわ！！』

「お前は強盗そのものは成功したんだからまだいーじゃん！？」

俺なんか、『銀行入ったら既にゴリラが暴れてましたー』くらい情けない！！』

「テメーら何かのゲームの敗北者達かよオオオオ!!」

男は天国 女は地獄。とはよく言ったものだ。客人としても女には地獄である。

座敷の中ではてんやわんや。女身である恋歌が遊女達と言葉を交わすことなどほとんど無かった。

（やっぱり吉原の人。ヤダ。コワイ。）

暇を持て余して、人間観察をする事にした。

当然金の支払いをしたのは松平なのだからより多くの遊女が寄ってくるのは当然だ。

だが近藤の周りには、お酌をしてくれる遊女も、話し相手をしてくれる遊女もない。

若干涙目なのは遠くで見ても分かる。その涙目は同情を誘うくらいだ。

（・・・別に営業でもいい!!でも・・・せめて・・・一人だけでもお酌してあげて!!）

その時、外から何か荒々しい声がする、男と女の声。男の方は酔っているようだ。

すぐに縁側に駆けていき、そこから塀へと飛び上がった。

「なっ、何すんだい!!」

「何って・・・ヒック、代価に見合った働きしねえからだろうが!!」

こっちや高エ金払ってヒック、テメエ等穀潰しいしくつぶに貢いでやってんの
に・・・オブリビオン!!」

急に男が地に伏した。その男の後頭部を恋歌が踏みつけていたのだ
った。

「いやゝ何かケンカのようだった故様子を見ようと降りたら、顔が

あつたか。テヘツゴメーン。」

特に悪気もない口調でその男かたゆつくりと降りた。

「テメエエエエ！！何モンだあ！？客にこんな事してただで済むと思うなよゴルァ！！」

「奇遇じゃのう。私も客の身じゃ。銀行のお向かいが奉行所だったからのう・・・」

それに貴様程度の三下を有頂天にさせてやってる彼女等に穀潰しはなからう。」

男の出方を伺っている時。何か鋭利なものが頬をかすめた。クナイだ。

それが男の額に刺さる。おそらくもう生きてはいまい。

「ちよつと・・・川の向こうで手エ振ってる父上が見えちったじゃねえか。」

錆びた鉄格子のように錆びた首を震わせながら、クナイの飛んできた方向を見た。

ゝ土方派と沖田派は犬派かネコ派くらい相容れないゝ（前書き）

私はどっち派だって？フツ野暮な事を聞くなよベイビー。

親友が沖田派に寝返っても、仲間内で私以外全員沖田派だと知っても
弟や母に興味悪いと言われようとも私の心は1mmも変わらなかったさ（ゝー、）

恋歌ア！私の目が黒いうちはあの人とキャツキャウフフなどないと思え！！

＊昨日まで旅行行ってました！スイマセン！！＊

「土方派と沖田派は犬派かネコ派かくらい相容れない」

一瞬、視界に現れた天国を振り払い、骨をきしませながら振り返った。

男の額に刺さったクナイの持ち主は女性だった。それもとびきり綺麗な。

前髪をクナイを模した簪で、掻き上げて団子状にした薄い金髪。薄紫の瞳。

顔の左半分を縦と横、一本ずつ傷が付いているが、それをも掻き消せるような美しさ。

彼女が此処の自警団「百華」と呼ばれる組織の人間だろうか。こちらに来る。

「ぬし、怪我はないか？」

（・・・・・・・・・・吉原の良い人・・・・・・・・プライスレス！）

などと思いながら首を横に振った。

月詠^{つきよ}。それが、先程のクナイの持ち主の名前であった。

「……………吉原におる不逞の輩を討伐に協力？通りすがりの客に？」

茶屋に招き入れられた恋歌はキョトンと呟いた。

「すまん。客人に対して頼むような用では無いことは分かっておる。だが、百華の者が突然の食あたりに見舞われてな。頭数が足りん。それにわっちが見る限りではぬし、結構な修羅場を潜り抜けておると見た。」

食あたり。何度か経験してきた故、その辛さは嫌と言うほど分かっていた。

それに、受けた親切を仇で返すほどクサってはいない。

「相分かった。この須藤恋歌、全面的に協力いたしましょう！月詠殿！！」

「恋歌・・・！」

今此処に芽生えた小さな友情を、大きな満月が優しく見守っていた。

* * * * *
* * * * *

頼まれた内容を要約するところだ。

今、目の前の店の門の向こうに吉原に非合法薬物を横流ししている輩共がいる。

それを生け捕りにして出所を吐かせる。とのことらしい。

「では私は左から参りますので月詠殿は右から頼みます。」

「分かった。くれぐれも殺さんようにな。」

とは言ったものの、松平達が飲んでいる店に刀を置いてきたのを今、思い出した。

何か代わりになるものは・・・辺りを見渡す。そしてある一点で首が止まった。

武器にはなりそうだ。代わりと言うには程遠いが。

座敷では吉原の敵が、遊女達と豪遊していた。

事実を知った今、目障りなもの以外の何者でもない。事を起こすには何の遠慮も要らない。

「失礼するでありんすよー。」

今覚えた郭詞くわくことばで、大型トレーラーと共に入ってきた。

「ああ？何だオメー。」

敵は三人。丁度酒が回ってきたところか。かすかに頬を赤らめた薄汚い男が面をきってきた。

「新入りでありんす。店長に頼まれて名物料理を持って来たでありんす。」

といいながら、五枚重ねにしたゴム手袋を嵌めて、箱を開ける。

素早く丼を手に取り、瞬時に男達の顔面目掛けて叩き込んだ。

「ギャアアアア！！何じゃこりゃああああ！！！！」

「飯か！？飯の上に何か乗ってるウウウウウ！！！気持ち悪い！！！」

「ウツ！酸っぱー！！ナニコレ！？ドコの名物料理！？」

その様を、笑をこらえながら眺めていた。

「アタイは一日限定で百華に雇われた者でありんす！。因みにそれは……」

私的には『犬も食べないタダの餌スペシャル』 常識人曰く『犬の餌スペシャル』

製作者が仰るには……」

言い終わらないうちに背後からまた輩が現れた。が、一瞬の内に井を叩き込まれる。

「『土方スペシャル』とのことでありんす。吉原ヨコでも存外人気のよう
うで何より。」

銀魂を知る者なら、井の実態が何か。もうお分かりであろう。

軍隊のようにワラワラ出てくる輩共。しかし、どれも顔面に井を叩き込まれて地に伏す。

「何じゃこやつ等！！！どんだけ食いたいんじゃ！！！舌おかしんじゃねえ！！？」

この店の向かいにある『クラブ・マヨネーズ』という存在意味の知らない店が頭に浮かんだ。

大型トレーラーを押して、ひたすら中央へと戻った。丁度月詠と合流。

「何じゃそれは！！！」

大型トレーラーを押して出てきた恋歌の姿に、驚いたのか口走った。

月詠の背後に、クナイが手の甲に刺さって悶えている輩の姿が一瞬だけ見えた。

要らぬ心配だったか。トレーラーを全力で押した。

「月詠殿！！！上行って、上！！！」

状況は全くの見込みない月詠であったが、言われるままに階段を駆け上がった。

それから、クナイを投げる。投げたクナイの矛先は、輩達の袖口とその後ろの壁。

「クツソがあ！！女だてらにいい！！」

クナイに押さえつけられながら、輩の一人がそう言った。

「女だてらに・・・・・・・・だど？」

不意に上、左方向から別の声が聞こえた。大型トレーラーを持っていた女だ。

「その女子に歯が立たぬような雑魚の口からようも言えたものよ。」

まあ、お代わりがほしいなら山ほどあるゆえ……」

恋歌の左足に、ぐつと力が入る。下は階段。さらにその下には・・・

- ・言うに及ぶ。

「て。テメ・・・まさか・・・」

「たーんとおあがりやアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア!!!」

」

その時、トレーラーが階段を急降下で下りてきた。

その後、輩共は出所を吐かねばならなくなった上、三ヶ月ほど逆さ吊りにされたとか何とか。

松平たちの元へ戻った頃には、ちょうど帰るところだった。

「恋歌ア！！もう帰るぞー！」

近藤の大声に慌てて、歩を向けかけて、月詠の方に振り返る。

「今度はただの友としてお会いできる日を待っております。」

月詠の口から、何も言葉がなかった代わりに、フツと出た笑顔が返ってきた。

煙管の煙が満月に昇る。

男は天国　女は地獄。誰が作った言葉なのだろうか。

ゝ土方派と沖田派は犬派かネコ派くらい相容れないゝ（後書き）

べ、別にツツキーとか好きじゃないんだからね！？

地雷亜がツツキー殴った時に殺意が湧いたとか
護ってもらってる日輪さんが羨ましかったとか
何よりパフパフしたりハグとかお姫様抱っこしてる銀さんに液晶越しに

「銀さん、頼む！そこ変わってくれええええ…」なんて言っていないからね！

結論…ツツキーは俺の嫁。好きなのではなく愛してるんだい！（
ω・ゝ）キラッ

「何かやろうと意気込んだところで失敗するだけ。自然体でいこう」(前書き)

「御月隊長!!」

李麻の部屋の障子を勢いよく開ける山崎。

「んー?どったのザキ。」

湯がいたであろう人参を、気だるそうに口に持っていきながら応対した。

「奴が・・・奴が現れました!!」

「な、なんだってー!」

「何かやろうと意気込んだところで失敗するだけ。自然体でいこう」

「そうか．．．．奴が現れたか．．．．もうそんな季節に．．．．」

局長室。近藤の前に二人がちょこんと正座した。

「はい！既に大勢の隊士がやられて苦しんでいます。あの腫れからして奴の仕業かと。」

障子の向こうから、隊士達がひいひい悲鳴を上げているのが聞こえる。

「人間の生き血を吸いおのれの血肉として吸収し、人々に多大な苦痛とムズ痒さを残す。」

「こんどーさん！！このまま奴等を．．．．．」

蚊どもをのさばらせてお

いたら大変な事に!!」

「MBH委員会・・・俺達三人でMBH委員会を立ち上げる!!」

「「おおー!!」」

しばらく時間が経ち、局長室から謎の委員会の人間三人が襖を開けて出てきた。

「ジミ13!」

「ゴリラ13!三人合わせて……」

56

謎のポーズも決まり、早速活動する事になった三人。山崎が何かに気付く。

「何っか庭の方が騒がしいな．．．」

何気なく視線をやった先は、またケンカしている土方と恋歌。

「お前、昨日怪談した後局長に廁付いてってもらってんの知ってんだかな！！」

「そーいうテメーはそのあっさい池にハマって溺れてたの知ってっからな！！」

という原因不明のケンカ。差し当たり大した原因ではないだろうが。

「あいつ等顔合わせたらケンカばっかだよねー仲悪すぎだよ鬱陶しい。まとめて消すか。」

「それは不味いです御月隊長。」

「そうかなあ？俺には、仲良し夫婦の痴話喧嘩にしか見えん．．．」

「ああ！！あいつ等の周り！！奴が！！奴が二匹飛び回ってる！！」

双眼鏡越しに李麻が標的を捉えた。それぞれライフル（引金を引くと…以下略）を構える。

「死ねや害虫がアアアアアア！！」

李麻の人差し指が引金を引いた時だった。

霧となった殺虫剤が出る筈の銃口から、実弾が繰り出された。

「李麻オオオオオオオオオ！？何で！？ちゃんと実弾抜いたじゃん！！！」

「ワ、ワザとじゃねーよ！ちゃんと抜いた…あ、一個抜き忘れてた。」

「マ・・・マトリックスリローデットオオオオオオオ！！！」

いち早く気付いた恋歌が上体を仰け反らせ、タッチの差で弾が堀に
めり込んだ。

「ごつめーん！ワザとじゃないんだ今回はホントにー！！」

「何その軽い謝罪！！こっちはなあ、軽くチビりそうになってしも
うたんだぞォ！？」

「チビるとか言うなよ。一応女だろがお前！！」

と言いながら恋歌の後頭部を平手で打った土方であった。

「痛ッ！！貴ッ様ア！！よっくもレディに暴力をー・・・」

「ザキィ。アレってレディーだっけ？」

「いや、違うと思います。」

屯所から姿を消した三人組が次に姿を現したのは江戸の街であった。

「取り合えず再確認したし。コレでもう実弾は出て来ないな。」

「そうだね。因みに場所を変えたのは屯所じゃそろそろ怒られそうだからだよ。」

「局長！隊長！！奴です！！公園で遊んでる女の子に奴が！！」

「何ィ！？」

山崎につられて、双眼鏡越しに世界を覗き込む二人。そこでは見覚えのある少女が遊んでいた。

オレンジ色の髪にぼんぼりをつけて、青いくりつとした目をした可憐な少女。

その周りに奴がいた。

「アレは！万事屋のトコの怪力チャイナ娘！！」

「え、ウソッ！！マ、マブダチのピンチ！！」

「え？隊長、あの小娘とそんな親しい間柄に？」

「え？何、知らなかったの？」

「知らねーもなにも第一部始まって以来そんなシーン無かったじゃねえか！！」

懐から『銀魂く出勤！真選組！！』と書かれた紙の束をこれ見よがしにおっぴろげた。

「作者があのか女ばっか書いてる時に密かに公園で遊んだり酔昆布食ったりしてたのー！！」

「そんなこと入ってる間に！奴が！奴がああああ！！」

「何だって！？神楽が危ない！！このままじゃ奴の毒牙に！！」

草のしげみを飛び越えて、風のような速さで公園へと向かった。

「ちょっと！こっちはライフル（引金…以下略）があんだから大丈夫ですオオ！！」

「バカヤロー！そいつあ人体に影響が……」

残る二人も続いた。

「神楽ア！！」

自分の名前を呼ぶ声に、振り返った神楽と呼ばれる少女。

「おう！李麻。どうしたアルか？」

「ココ危ない！奴が奴が……アッー！」

言い終わらないうちに、出っ張った小石が李麻の足元をすくった。

走ってきた速さだけの勢いで神楽のいる方向に突っ込んでくる。

ドンッ！という鈍い音。李麻が次に目を開けたときには神楽が下敷きになっていた。

状況を理解できないまま、李麻は宙を舞った。否、神楽が投げ飛ばした。という方が正しい。

駆けつけた近藤・山崎にブチ当たった。

「お前レディーに何するネ！！最低ヨ！！やっぱり男は皆獣ヨ！！」

クヨクヨした口調とは裏腹に丹念に拳を固めている神楽。

「御月隊長。アンタ、戦闘種族なんでしょ？ホラ。」

「あのね、ザキ。何事にも上には上がいるんだよ。兎月^{はぐり}から夜兎族
つてのは・・・」

そこで言葉が切れ、代わりに三人分の断末魔が、江戸の青空に響く。

夕方、仕事帰り。沖田は、ふと通りがかったゴミ捨て場に目をやった。

見れば、アンパン●ンのように、顔面ボコボコになった人間三人が捨てられていたのだ。

「何だコイツ等。」

アイマスクを、人差し指に引っ掛けクルクルと回してその場を後にした。

ゝ何かやろうと意気込んだところで失敗するだけ。自然体でいこうゝ（後書き）

今回は前書きから本編を始めました^^

アニメで言うところのOPの前に「ちよつとやらね？」みたいなアレです。

とりあえずもう二度とやらない！！

＊次回から真選組大好きな皆なら繰り返し見たであろう・・・
動乱篇リメイク（パクリ）しようと思います！もっかい見返さなきや！！

く掟や約束は破るためにこそあるく（前書き）

「俺のこてっちゃんに嫉妬して！嫉妬してー！！！」

無残に折れた刀身を涙目で労わる近藤。

「なんだよ朝っぱらからうるさいなー。」

「あ、御月隊長！」

その場にいた隊士二人が李麻の方に振り返る。

「さっき大荷物届いてたね。すごい武器とか。誰か来るの？」

「ああ、御月隊長が来た頃にはもう屯所から出てたんでしたね。」

「『あの人』が帰ってくるんですよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・『あの人』？」

「掟や約束は破るためにこそある」

「じゃあ、またな。」

「恋ちゃんバイバイッ!!」

「お姉さんな。」

巡回中に通る家の子供との駒遊び。背を向けたまま手を振って切り上げた。

帰りに鍛冶屋にでも寄って帰ろうと、その通りに差し掛かった時だった。

横目で見ると、攘夷浪士と思われる十数人の人間が、一人の市民に殴る蹴るの暴行を加えている。

いや、市民ではない。あれは真選組の制服・・・何か見覚えのある後姿だった。

「あの…このくらいでホントに勘弁して下さい。三千円あるんで。

あの、スイカは勘弁して下さい。家帰れなくなるんで……」

次の瞬間、恋歌は自分の目が点になったのを感じた。

（え……？アレ、アレだよな？『鬼の副長』だよな？惚れちった男ヒトだよな？

そっくりさんじゃないよね？本人だよな？何かいつもと違うようだが。主に言動が。）

などと言っている間に再び殴る蹴るの暴行が始まる。が、今度は違う。

浪士の一人の鞘から抜かれた刀身が日の光で鈍く光っていた。

「おどれ等何さらしてくれ……」

柄を手に持ち、剣を抜こうとした時だった。一瞬、横から人の残像が目映った。

その残像を作った人物は剣を、二、三度振るう。浪士は一人残らず

肉塊となった。

舞う土煙が収まった頃、ようやくその人物がハッキリと見えた。どうやら男らしい。

見慣れた制服・・・・・・・・

見慣れた太刀筋・・・・・・・・

でもその顔は・・・・・・・・

「真選組隊士が襲われてると重い駆けつけてみれば・・・・・・・・こんな所で何をやっている？」

土方

君。」

「お前は・・・・・・・・・・」

動揺を隠せない表情をした土方を通り過ぎ、恋歌の元へと駆け寄った。

「見苦しいところを見せてしまったねお嬢さん。」

ふわりと笑みを浮かべる。しかし、その笑みはどうも胡散臭い。

それに此方を一般市民と見て話しているのだろうか。だとすればこいつの目は節穴だ。

恋歌の着ている制服が目に入らないと言うのだから。

「気遣いは有難いが、私は見ての通り真選組の副局長をしておる。要らぬ気遣いをさせてすまぬ。」

「ああ、失礼。僕はてっきりただの趣味でその服を着ているのかと。」

自然と血管が浮き上がる。

気に食わない。その一言を聞いて、最初に抱いた感情だった。

「伊東^{いとう}先生の帰陣を祝して……カンパーイ!!」

「「「「「「「カンパーイ!!」」」」」」」

その掛け声とともにてんやわんやになってきた大広間。

「沖田さん、沖田さん。」

「何でイ。」

李麻は隣に座っていた沖田の腕をつついた。

「アレ誰？」

「あー。伊東^{いとう} 鴨太郎^{かもたろう}。一年半あまりで真選組参謀のポスト貰ってる新人でイ。」

どちらにしろ自分よりは先に入ってきたのか。人参ジュースの入ったお猪口を傾けた。

「へー。じゃあすごい人なんだね。」

「その辺りは俺もよく分からねえ。」

「僕もその辺りは知りたいたいと思わないよ。だって中身は大体見た目で語ってるもん。」

頭よさそうだし、剣の腕もけっこういいトコの門ググってそうな顔してるもん。」

「御月イ。ググッても意味ねえよ。くぐらねえと。」

「あり？そーなの？」

などと言って、雄弁に真選組の前進を語る伊藤の言葉には耳も傾けない二人なのであった。

盛り上がってきた宴会を他所に、無言で反対方向から縁側を歩いていく二人の男がいた。

一切の言葉を交わすことなく通り過ぎたかと思えば、ほぼ同時に足を止める。

一方が眼鏡をかけなおす仕草をとって、口を開いた。

「土方君、君に聞きたいことがある。」

「奇遇だなア。俺もだ。」

「（お前／君）は（俺／僕）のこと嫌いだろ（う）？」

「近藤さんに気に入られ、新参者でありながらスピード出世する僕

が、目障りで仕方ないんだろ？」

「そりゃアンタだ。さっさと出世したいのに、上にいつまでもどっかり座ってる……」

俺が目障りで仕方あるめーよ。」

互いに互いの顔を見る事もなく、皮肉混じりの会話が進んでいく。

伊東はフツと笑みを漏らして言葉を続けた。

「邪推だ土方君。僕はそんな事考えちゃいない。」

「よかったなア。お互い誤解が解けたらしい。」

目障りなんて

そんな可愛いモンじゃないさ

「「いずれ殺してやるよ」」

鬼。いや、獣の目と言った方が良いでしょうか。どちらにしても人の目をしていない。

そのまま別方向に歩いていった。

「最も……先に排除しておかねばならないハエもいるがね。」

その言葉が、土方の背中に届く事はなかった。

く掟や約束は破るためにこそあるく（後書き）

そう。破るためにあるんだ！もう二度と前書きから本編はじめない。
とか言ったそばからやるようにな！

コンパクトにまとめたので削ったりしてる所がありますがお許し
を。

だってちゃんとやろうと思ったら長杉なんだもん。

「この世の地獄と聞いて見た先が修学旅行だったなんてよくある話」(前書き)

ホラーもの参加できなかった。否、する気が失せた。

その憂さ晴らしにもう一話書くん дай!!

「この世の地獄と聞いて見た先が修学旅行だったなんてよくある話」

局長室で何やら喧騒の音が聞こえる一方、恋歌は何故か伊東の部屋にいた。

恋歌としては、最近やたら増えた書類整備を片付けたいのだが・・・

・

「すまないね須藤君。本当は僕の方から赴くべきなんだろうが人には聞かれたくない話だね。」

「分かっているのならその通りに実行してほしいな。で、何の用じや。」

出された茶に手をつける事無く、話を進めた。

「昨日はすまなかった。君のような華奢な女性が剣を振っているとは思わなくてね。」

隊士達から君が挙げてきた業績は聞いているよ。何でも沖田君とほぼ互角だそうで。」

一言余計だな。心の中で毒づく程度でぐっところえた。

「それはどうも。」

「あと、君と・・・そう、土方君。相当仲が悪いと聞いている。」

「・・・・・・・・そうだな。存在自体が目障りで仕方ない。まあ貴様もそれと同等だが。」

心にもない事を言うのは辛いが、こんな奴にハラの中を読ませるわけにはいかない。

「そこまで嫌いと言うのなら。僕等で一時的に手を組むのはどうだろう。」

「はあ？」

「邪魔な存在が消えてくれたらそれほど嬉しいことはない。僕が嫌いでも構わないし・・・」

「断る。」

伊東が並べる御託に鬱蒼としている。と言う顔で斬り捨てた。

「確かに貴様も奴も生理的に受け付けん。が、それと信頼はまた別のこと。」

それに、幼少の頃より酔っ払いと眼鏡の戯言に聞く耳を持たぬように育てられたのでな。」

さっさと立ち上がり、しょうじを開いた。日の光が差し込む。

「そうじゃ。一つ忠告しておこう。―真選組（我等）は貴様が思っておる程単純ではない。」

勢いよく障子が閉まる音で、密談は終わった。

「・・・バカな女だ。^{ハエ}いいだろう。そこまで言うなら・・・・・・・・・・」

薄暗い部屋に、眼鏡のレンズが怪しく光った。

「ふくちよー！これサインヨロシクねー！！じゃ、僕はコレで！」

自室に帰ってきたと思えば、また一束書類が増えていた。

「何で私ばっか！？何、嫌がらせ！？どーしよ。局長室に置いてこよっかな。」

そーいや今日こないだ検挙した攘夷浪士の拷問dayか！気分転換に行ってこよーっと。」

山積みの書類には目もくれず、屯所の拷問部屋へと足を向けた。

着いた拷問部屋には、それ専門で組織にいる隊士達が外に出ていた。

「もう済んだのか？」

「ああ。須藤さん。いえ、今副長がいつちよおもんだってるトコで・
・・・」

「そーかア。じゃあもう3分後には終いということか。」

土方が直々に手を下す時。たちまち拷問部屋は静まり返る。

そうして5分後。幹部クラスの浪士でも泣きながら何でも話すヘタ
レへと化するのだ。

聞いたところによれば、このドアの向こうにはこの世に地獄が見え
るそうだ。

「ちょっと覗いていいか？」

「へ・・・へい！」

音を立てないように、指先に神経を張り巡らせながら少しずつ隙間
を作った。

最初に視界に飛び込んできたのは二つの布団だ。それも飲料やスナック菓子が散らばった。

「何。好きな人とかいるの？」

「いや・・・別に・・・いないけど・・・。」

「何だよ！俺も言ったんだからお前も言えよな！ズリ…ズリィよ！ハメたな！？」

ハメたろ、お前も吐けよ！」

投げた空き箱が、浪士の背中で弾き返る。

「分かった！吐くよ…でも誰にも言うなよ！内緒だかなんか？」

「おっとそいつはどうか……………!？」

不意に感じた鬼の気配に影。土方と浪士は恐る恐る上を見た。

見れば丹念に拳を固めている少女が目の前にいるではないか。

「何か最近、仕事が多いと思えばそういう事か……」

「ま、待て待て！！これにはワケが……」

「も、もしかして十四朗君の……」

次の瞬間、本当に拷問部屋が地獄へと変わり果てた。

「一応話を要約すると。その妖刀のお陰でそのような事になってしまったと。」

で、こんな時に限り鍛冶屋の主はおらず。何をどうしてもそやつは離れんと。」

所変わってファミレス店。戦利品の小豆アイスを頬張りながら返事

をした。

「ああ。気がつくとも別人格と入れ替わってやがる。いや、人が誰しも持つてゐるへたれた部分が

コイツによって目覚め始めてるのかもな。」

「いや、お前元々へたれだろ。正直に言うてみ？」

言つたと同時に、ファイティングポーズへと切り替えた。

「はい。そッスよね。俺なんて元々そんな。・・・」

「私が悪かった！申し訳ない！！」

まあ・・・何かあつたら言えよ？出来るだけかばうから。手助けはしてやらんが借りは返す故。」

声の上擦るのを抑えながら、早口に言い切った。照れ隠しに残りのアイスをお口に運ぶ。

「恋歌・・・」

頭大丈夫か？・・・・・・・・何かちよ

っと・・・・・・・・気持ち悪い。」

「今のオメーにだけは言われたくねえよ！！もう良い！！帰る！！！」

鞆を掴んでさっさと店を出ようとした時。

「まあ、今回ばかりは頼りにしてやるよ。」

背中からそんな言葉が聞こえた。聞こえなかったフリをして自動ドアをくぐり抜けた。

「我が人生・・・・・・・・一片の悔いは無し!!」

今日は真選組隊士がスキップしながら巡回していたとか何とか。

夕暮れ時。会議室には重すぎる沈黙の空気に時計の振り子が揺れるだけだった。

「遅いな・・・トシの奴。もうとくに時間は過ぎている。大事な

会議だというのに・・・」

「局長。先程チンピラがはびこるコンビニ付近で土方殿らしき人物をみたという情報が。」

多分、嚴重注意を行っている最中かと・・・

「近藤さん。」

もう待てない。と言うように、伊東が立ち上がった。

「丁度いい。今回僕は彼の事を議題に出そうと思っていたんだ。」

最近の彼の行動を知らないものはいまい。自らで定めた『局中法度』。これを破る事十数回。

これを野放しにしているは隊士達に示しがつかない。」

レンズ越しに、ファイルに挟んである紙切れを見つめる。かじりつくように。

「ま、待ってくれ先生！さっき恋歌が言っていたように・・・」

「僕は今回だけの事を言っているわけではない。

モチロン彼が今まで真選組^{コウ}でどれだけ功績を挙げてきたか、重々承知している。

だからこそあえて苦言を呈したい!!」

自覚か無自覚かは定かではないが、強まってくる伊東の口調。

「真選組の象徴とも言うべき彼が法度を軽んずれば自然隊士達もそれに習う。

規律を失った軍団は烏合の衆と成り果てる!

彼にこそ厳しい処罰が必要なのだ! 近藤さん!! ココは英断を!!」

局中法度を犯した者への英断……対処など一つしかなかった。

「待ってくれ!! トシは必ず……」

近藤の言葉をさえぎったのは、襖をぶち破った土方だった。

「チィース! 焼きそばパン買ってきたッス! 沖田先輩!! すいませーん。

ジャンプがなかったんでマガジ……!!」

我に返れば、自分を白い目で見る隊長格の隊士。目を見開いた近藤に恋歌。

そして……アイコンタクトをとって、蔑んだ笑みでこちらを見る伊東に沖田。

(は……はめられた……あいつ等……組んでやがった!!)

「どういことだい須藤君。」

君がチンピラの嚴重注意をしていると聞いてそれを信賴してたというのに……」

「チンピラのいるコンビニ付近をうろついている。そこまでが事実じゃ。」

それより後は私の憶測で、一意見……」

「そのことなんだけど。」

恋歌の弁舌をとめたのは李麻だった。全くの無表情で挙手をしている。

「確かにコンビニ付近に土方さんらしき人物がいたという話はあったけれど……」

そのコンビニにはチンピラどころかネコの子一匹いなかったと店主が言っていました。」

くオタクは話好きく (前書き)

この日を待っていた・・・君が登場するこの日を・・・

トッスイーーーーー!!

くオタクは話好きく

真選組の柱が消えた。屯所の道場で囁かれる噂話。

「聞いたか！？副長達の話。無期限謹慎処分だって。でももう戻ってこないよな。」

「ああ。伊東さんは切腹を申し出たらしいが局長達の説得でそれは免れたらしい。」

須藤さんは須藤さんで局中法度自体は犯してないから嚴重注意で済んだらしい。」

「それに沖田隊長に御月隊長まで伊東についたらしいよ。」

「うっそマジで！？」

縁側を足早に歩いていく恋歌。反対方向から李麻が飛び出てきた。

「まさか、そなたが裏切ろうとはな。まあそちらにつけばまず消される事はあるまい。」

「人聞き悪いなあ。裏切ってないよ、だって伊東センサーも真選組隊士じゃない。」

「まあこれからは、アンタに教わった事全部駆使して頑張ってみるよ。」

そのまま、自分の目的地へと歩を進める李麻。彼のポケットからハラリと紙切れが落ちた。

屈んで紙切れを拾い、さっさとポケットにしまった。

嚴重注意処分として、しばらく仕事は出来ない。つまり一旦屯所を離れた所で支障はない。

伊東は離れた所でじっくり様子見をするお膳立てをしてくれたのだ。

「とりあえず宿でも取るか・・・!?!?」

背後から何か飛び付いて来る気配。伊東が送り込んだ刺客だろうか。

一先ず鉄拳で迎え撃つ。手応え有り。刺客は反動でそのまま池に落ちた。

「おう兄ちゃん誰の回しモンじゃコラ……」

池に浮かんでいたのは紛れもなく土方であった。

「あー！ーッ！ごっごめええん！！背後取られるとつい…だ、大丈夫かあああ！？」

上体を起こし、揺さぶる。そこで不意に違和感を感じた。

向こうにとって意表をついた反応とはいえあの土方がこの程度の鉄拳をまともにくらうだろうか。

少なくとも致命傷は避けられるはず……そこで恋歌の思考は止まった。

真っ白な右手を二つの大きな手が、ガッチリ掴まれた。脈拍が嫌でも早まる。

「拷問部屋で一目見たその日からずっと会いたいと思ってたでござるよ！恋歌氏！！」

その一言で窓のシャッターが閉まるかのように高揚感がしぼんだ。

「恋歌『氏』？……『ござる』？……え、あの……
・お宅、……え？」

当惑している恋歌を他所に延々と語り続ける土方。いや、土方と言っているのだろうか。

しばらく捨て置いたら、自分の手の甲に、別の指先が這う感覚に襲われた。

自然と背筋が凍る。

「触んな痴漢ー！！」

「ゴォフ！！」

掴まれていた手の腕を掴んで一気に投げ飛ばした。木にめり込んだ土方（？）の胸倉を掴む。

「『拷問部屋』ってーと貴様はアレか！？あの別人格の奴か！？」

「何を言っているんだよー。恋k・・・ゴフウー！」

「吐けゴラァ！食った魂全部吐かんかいゴラァ！！あと名前で呼ぶなボケェ！！」

休む事無く鳩尾を殴り続けた。

困りに困り果て、たどり着いた先。それが此処だった。

「久しぶりじゃの。銀さん。これ、お土産のジャンプじゃ。」

コンビニのビニール袋を取り出す。

「あー、どれもこれも。珍しいねえ。アンタから此処に来るなんてよオ。で、ナニソレ。」

「いやー。少し困った事があってな。抱きつくなくなっつってんだろ。」

「ガハア!!」

口調からは想像できないすぎましきで、土方(?)にアップパーカツトを繰り出す。

「……………え?あの、この人……………土方さんですよね……………?」

当惑した顔で新八が尋ねた。

「信じがたいが……………そうらしい。原因は解らんが今日はこんな調子じゃ……………マジウゼエ。」

氷漬けにしてえ。誰か十丁目の日番谷君呼んで来て。千年くらい氷牢にブチ込んどけ。」

「押さえて!!死んじゃいますから、ソレ!!っーか著作権大丈夫

なのコレ。」

「問題ないアル。原作でもTVでもずっとパクリ続けてここまで来たアルから。」

という喧騒が続く中、銀時の表情が一変。どうやら話の本題に入るらしい。

「で、用件は？コイツを預けに…ってだけじゃなさそうなツラしてるぜ。恋ちゃんよオ。」

「まあな。何やかんやでそーなってあーなって・・・」

「そんなんでは分かるわけねーだろ！！ちゃんと説明しろ！！」

割って入ってきた新八のツツコミ。

「新参者にハメられて二人仲良くクビにされただど！？」

「仲良くはやめんか。」

「通じてンのかいいいいいいいい！」

当たり前だろ。と言わんばかりに銀時は親指を突き立てた。恋歌も同様に突き立てる。

「話し進まなくなる。もう掘り下げるな。だが、奴の動きにはどうも引っ掛かる節があるのじゃ。」

「引っ掛かる節？」

首を縦に振ってから、話を進める。

「恐らくあの男は副長の椅子ほしさに事を起こしたわけではあるまい。」

だとすれば攘夷浪士を雇って殺すでもした方が確実に回ってくるし、局長のご不安もまだ小さい。

あの蹴落とし方はもっとデカイ目的を阻む障害物を取り除こうとせん奴の行動じゃ。

もしその最終的な目的が…局長の椅子なら局長のお心が安定してない方がやりやすい。」

土方・・・改めトッシーが飛びついてきそうなのを右手で押さえながら淡々と言いつつ切った。

「じゃあその男の目的って・・・まさか。」

「断定は出来ん。だが可能性も動機も…実行できる戦力も充分にある。」

「じゃあ早くその人を止めないと・・・!!」

「そう急くな。そう思ってそっちに忍ばせておる……………ネズミ一匹ならぬ……………」

ウサギ一匹をな。」

「18..45、ウマシカ公園噴水広場にて。」そう書かれた紙切れをポケットから取り出した。

くオタクは話好きく（後書き）

♪お・ま・け♪

『トツシアターくリアルな女の子は硬派ナリく（トツシーフルボツコタイム）』

*R-1*****

ト「恋歌氏イー!!」

恋「だから名前で呼ぶなっつってんだろーが!!」

バキゴキベキン!!

ト「ブフォ!!」

*R-2*****

ト「恋・須藤氏!コレ買っ方がいいかな?」

恋「勝手に買えば良いではないか。」

ト「でも一人一個なんだよねー。ここは涙を吞んで観賞用は諦めて・
・

保存用と実用用を・・・須藤氏も拙者と一緒に・・・」

恋「一個で良からうが！こんなガラクタ実用出来るわけねーだろう
あ！！」

ドガッシャア！！

ト「ジャーマンスープレックスウ！！」

*F i n a l R o u n d*****
**

ト「恋：す、須藤氏。ちょっと頼みたい事があるんだけどもーいい
かなー。」

恋「ああ？」

ト「このトモエ5000の衣装を作ってみたのだが是非恋歌氏に・・・
」

恋「ほー。よく出来ておるではないか。」

カチャ！↑バズーカs e t s ☆

恋「だが断る！つか何で人の服のサイズ知ってんだボケエ！！」

ドウ！！

ト「ボフウ!!」

[illegible]

く普段大人しい奴ほど怒ると怖いく（前書き）

屯所の外れ。斬りつけられた左腕をかばいながら颯爽とかける山崎。

「伊東の奴・・・奴等と手を結んでたなんて!!」

徐に携帯電話を取り出しコールする。画面に浮かぶ文字は『御月李麻』。
おもむろ

程なくして通話が成立した

『もしもし? ザキ?・・・何か分かった?』

「お、御月隊長!! とんでもねえ事が! 伊東の奴…奴等と・・・!!?」

目の前に現れた、影。実在する、影。それによって山崎の進路は塞がる。

胸部のすぐ下に電撃が走ったような痛みを感じ、そっと手にやる。

手には冷たい刃の感触と、鯨の飛沫のように溢れ出る鮮血。

「お、お前は・・・」

「普段大人しい奴ほど怒ると怖い」

奇抜なデザインのヘッドホン。赤ブチのサングラス。夕焼けが洪緑の髪とジャケットを照らす。

その男が持っていた刀が山崎の身体を貫いていた。

「お……お前は……人斬り……かわかみ河上 ばんさい万斎。」

『ザキ!? どうしたア!? 河上万斎が何だって?』

少年の声ができる携帯電話が山崎の手から滑り落ち、彼自身はドサリと地に堕ちた。

「……君は、本当に愚かな男だ。山崎君。御月君。」

『「伊東……貴様／＼テメエ……敵と内通して（やがつ）たか!」』

「彼等、攘夷浪士がいなければ僕等警察は必要なくなると言うことを忘れてもらっては困る。」

僕はこんな所で終わる男ではない。この真選組は僕の器量を世に示す箱舟となってもらおうのだよ。」

レンズ越しに映る、野心と自尊心の塊の目。蔑みながら、山崎は這って前へ進む。

「やりたきや勝手にやりなよ。学も思想もない俺達には難しい事は分からねえ。」

……だが、これだけは言える……

そんな土道も節操も無い空っぽの器には誰もついて行かんよ。

俺は……最後まで……

あの人達について

行かせてもらおうわ。」

喘ぎ喘ぎにフツと笑みを漏らし、這いつくばって進んでいく山崎。
そこで電話が切れる。

「・・・・・・・・万斎殿。後を頼む。・・・・・・・・君達は御月の始末を。」

そんな中、非情な音が空气中に伝わってきた。

一旦、携帯電話を切った李麻は、恋歌との落ち合わせ場所にいた。

と言っても場所を移す必要性が出てきたところだ。此処が知られるのも恐らく時間の問題。

などと、ない知能を絞っているうちに、漆黒の服を身に纏った男達がなだれ込む。

耳に入る「……御月」「……いない」などという事から伊東派の連中だろう。

しばらく身を潜める事にするか。木の上なら早々には見つかるまい。そう思ったのが甘かった。

公園の入り口近くに、新たに真選組の制服を着た女がいた。約束の時間が迫っている。

李麻は、先程の山崎との会話が録音された携帯電話を握り締めた。

踏ん張りをきかせて、すぐ近くの馬と鹿の銅像。馬の背中に飛び乗って、携帯電話を投げる。

「ふくちよオオオオオオオ!!」

不意に聞こえた李麻の声。聞こえた方向を向けば、携帯電話が宙を舞っていた。

咄嗟に両手を器にして受け取る。

「そこに奴^{やつ}さんの目的が露にされた録音データが!!」

「何じゃと!?!」

李麻が、また恋歌目掛けて飛び降りた時には連中が蟻のように集まってきた。

「ここは僕が引きつけとくから、ふくちよーはそれ持って土方さんのトコに!!」

「相分かった。」

それだけ言って、夕日の方向に消えていった。それを確認して連中に向き直る。

「伊藤先生に仇なす反乱分子めが！此处で肅清してくれる！！」

いくつもの鞘から、スラリと現れたいくつもの刀身。李麻はそれらを睨み返した。

「反乱分子？何か間違えてない？いつ野郎が主流になったってんだよ。」

「こんどーさんやその人につく奴がいる限りこんどーさんが主流だろ。」

「近藤と共にお前達も地獄行きになると言っている。」

「無理だね。僕がやられるわけ無いし、現に一人取り逃がしてるじゃない。」

「そうだったな……まあ。これから消しに行くので支障はないがな！」

合図を聞いたかのように、一斉に駆け出す連中の中の古木達。

李麻は深くため息をつくと同時に、古木達を一蹴で打ち砕く。

「分かんねえのかよ……テメエ等の先に僕が立ちはだかつて
ってこたア……」

此処から先は蟻んこ一匹たりとも
通さねえって事だろうがア!!」

夕日が沈み、満月が少しずつ、顔を現した。

く普段大人しい奴ほど怒ると怖いく（後書き）

一昨日玉兎さんとチャットさせて頂きました^^V
自分が幼稚な分、すごく大人な方だと思いました。
とても同じ高校生とは思えんくらい・・・

私も大人にならんとアカンやね（ω、＊）

「理屈で出来る仲間なんぞクソくらえ」

夜の江戸。逃げた女を捜すべく、真選組の制服を着た人間があちらこちらへうごめく。

屋根の上から女はその様を見ていた。

「・・・・・・・・・・私の庭（江戸）で追いかけてっこなど百年早いわ。」

携帯に耳を当てながら、山崎と李麻によるやり取りを流した。

ようやく話が見えてきた。奴の言葉からして恐らく近藤が始末されるのも時間の問題だろう。

満月を仰ぎ見る。いくらあの大人数でも本気になった李麻に勝てるはずがあるまい。

暴走が過ぎてこちらにまで被害が来ないことを祈るだけだ。すぐ下に、銀色のモジャモジャが見えた。

「テーマは少しは恥や外聞を覚えろオオ!!」

「実用って何に使うアルか!？」

「心配してシのが馬鹿になってくるだろオオオ!!」

丁度、何らかの理由で腹を立てた万事屋一行が土方、もといトツシ
ーをタコ殴りにしていた。

そんな所にいたのか。

近くにあったワイヤーで降りる算段をし始める。そこにパトカーが
一台近づいて停まった。

「副長!! 今すぐ隊に!! 山崎さんが…何者かに…殺されッ……!!」

その言葉に目を見開かざるをえなかった。……恐らくはあのま
ま……万斎に。

「や、山崎さんが!？」

「さあ! 副長も早く隊に!」

「え、でも……拙者クビになった身だし……。」

「言ってる場合ですか! 御月隊長や須藤さんもきつと来ます。さあ早く副長も……」

刀が鞘走る瞬間が目に入り、徐に自身にくくりつけたワイヤーを掴み、飛び降りた。

銀時がちょうどトッシーの首根っこを掴んで、斬撃をかわす。

その直後にそこに降り立ち、連中とワイヤーに一太刀浴びせた。

血飛沫と連中が倒れた後、彼等にその存在が明らかになる。

「須藤さん!!」

「色々大変な事になった! 訳は後で話す。今は逃げるぞ!!」

今さっき奪還したパトカーを親指で差した。

パトカーの中……途中で李麻も拾って、山崎との最期の会話を流した。

「・・・・・・・・と言う事は・・・・・・・・今頃・・・・・・・・」

「武州・・・いや、地獄への列車の真っ只中だよ。中は恐らく伊東派の連中ばっか・・・」

「ハッキリ言ってかなり危険な状態にあるな。」

その頃の近藤は一体何を思って車窓から景色を眺めていたのだろうか。

隊内があんなにも分裂して動いている最中、その表情は穏やかだった。

「久しぶりだなあ、武州に帰るのは。あそこは俺やトシや総悟の生まれ育ったトコでね。」

「どいつもこいつもケンカばかりしてる荒れたところだった。」

考えてみれば今もやってることは変わらねえな。そう言って苦笑した。

真向かいに座る伊東といえ、眉の一本も動かさずそれを聞いている。

「君は立派な侍だ。僕は君ほど清廉な人物に会ったことがない。無垢、とも言うのかな。」

君は白い布のようなものだ。何者も受け止め、何者にも染まる。」

真選組・・・それはきつとその白い布に皆、それぞれの思いを描いた御旗なのだろう。

言葉を続ける。

「比べて僕の色は黒だ。何者にも染まらない、黒く塗りつぶしてしまう。」

何処へ行っても黒しか残らない。私の通った道は全て私の色になってしまう。」

その瞬間だった。無数の刃が無情な花畑のように、近藤の周りに咲き誇る。

鋭い花卉の切っ先を近藤に向けて。種をまいた男が不適に笑みを浮かべ

「近藤さん。すまないねえ…君たちの御旗はもう真っ黒になってしまったんだよ。」

しばし沈黙が流れる。しかし、近藤の笑みの漏らしでそれも破けた。

「ダアーーーーッハッハッハ！！さあっすが先生！面白いことを言うなア！

俺達が真っ黒に染まったア？なるほど…俺が白い布だとすると確かにそうかもな。

だが、俺なんざいいトコ縮れ毛だらけのフンドシってトコかなあ？」

奴等は・・・「色」などと呼べるような代物ではない。言うなれば垢のようなものだ。

洗っても洗っても、拭っても拭っても取れない、しつこい汚れ。

そのしつこさ故に、見ているうちにどんどん愛着と言うものも湧く。

困った事に、寄せ集まって年季が入った汚れは見られるようになってくる。

見張りにおいていたはずの沖田。何故そいつが此処にいるのか。理解不能だ。

「沖田君・・・何をやっている。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・テメーが何やってんだ。クロ野郎。」

伊東は一瞬、耳を疑った。奴は完全にこちらについたはず。なのに何故・・・・・・・・

「沖田君！伊藤先生になんて口を・・・・・・・・」

「離せよ・・・・・・・・」

一瞬……瞬きが出るほどの一瞬。何が起こったのか……
分からない。

しかし、沖田の後ろに、バツサリ一太刀浴びた裏切り者がズシンと倒れた。

「その人から……手を離せて言ってんだ!!」

放っておいたら立派な御旗になった……ただそれだけの事。

「学も思想もねえ。理屈より感情で動いちまう連中だ。何考えてるか分からん、得体も知れん。」

先生エ……アンタの手には負えない。奴等は何者にも触れんし、何者にも染まらん。」

ちょうどその時、車両の扉が開いた。ふと見てみると、俯いて立っている沖田がそこにいた。

ゝ理屈で出来る仲間なんぞクソくらえゝ（後書き）

やっとアニメ102話分が・・・おおお！

〈長所と短所は紙一重〉（前書き）

更新まちまちだったお詫びに（NOT）豪華二本立て。

書いて分かった事…動乱篇って「削っちゃイカン！」ってシーンが多杉な。

あと銀さんゴメン・・・あのシーン・・・恋ちゃんに譲ったって。その代わり名台詞一位のアレはぜってー書くから！！

〈長所と短所は紙一重〉

一步一步、確実に伊藤達に近寄る沖田。その右手には侍の魂が鈍く光っている。

無言で放たれる、気迫。自然と額から冷や汗が垂れ、足が勝手に後ずさる。

「・・・・・・・・総悟。」

「沖田君。やはり君は土方派：僕に近づきその動向を探るためのスパイ。」

土方を裏切ったのは僕を欺くための芝居だったのか。」

「芝居じゃねえよ。言っただ。俺の眼中にあるのは奴が座つて副長の座だ。」

邪魔な奴は誰だろうと叩き潰す。土方は消えた。次はテメーの番だよ、伊東先生。

俺アテメーの下にも奴の下にもつくのはゴメンだ。」

俺の大将はただ一人……
そう……

「そこを除けェ！！その隣は俺の席だ！！」

呆氣にとられていたのか、黙って聞いていた伊東だったが、すぐに唇を吊り上げる。

すぐに車両が甲高い笑い声を反射させた。

「とんだ性悪だ……土方を消すため僕を利用し、用済みとあらば

僕をも消すか。

いいじゃないか。……僕も同じ意見だ。」

後から、突如現れた伏兵。襲い掛かってくる前に、手早く手元のス
イッチを押した。

一方、一台のパトカーがその列車へと向かっている最中だった。

警察の人間が運転しているとは思えない乱雑さ。本当に警察が運転
しているわけではない。

「だ、旦那ァ！！後からパトカー追って来てるんだけどオオオオ！
！」

「ふざけんな！こっちは運転で精一杯だ！！お前からでやれや！！」

「分かってるよ!!」

右側のドアを蹴破って李麻が降りた。すぐさまパトカーが炎上する光景。

今、小さな少年がパトカー目掛けて追っている姿を確認。問題はない。

「ふぬをおおおおおお!! パトカー速エエエ!!」

などと言いながら。

「銀さんまずいですよ! このままじゃ・・・近藤さんが暗殺される!!」

そんな緊迫した車内の空気に、ボソボソと聞こえた声。

「僕は知らない・・・僕は知らない・・・ハハッ、僕は知らない・・・」

車内の端に縮こまって、壊れたおもちゃのように繰り返し呟くトツシ。

「土方さん！！しっかりしてください・・・土方さあん！！」

覗き込めば真っ青な顔。敵陣に乗り込むのがそれほど怖いのだろう。

「僕知らないもん・・・・・・・・知らないもん・・・・・・・・。」

「このままじゃ貴方の大切な人が…大切なものが全部なくなっちゃ
うかも知れないんですよ！」

須藤さんも！！土方さんに何か言ってやって下さいよ！」

さっきから無言で腕を組み、俯いて座っている恋歌。今のやり取り
が聞こえないわけがなからう。

「メガネを掛けて尚、その目は節穴か。コレは…私の知る限り土^{ヤッ}方
ではない。

ただの腰抜けじゃ。どうやらこやつに何を言うても無駄らしいな。」

「そんな・・・」

新八は言葉を止めた。次の瞬間、女の白い細腕でトッシーの胸倉を掴んでいたのだから。

「おい！お前何時までそうしておる気じゃ！！早く局長助けに行くんだよ！！！」

「冗談じゃない！！拙者は行かな・・・」

「テメーはお呼びじゃねえんだよ！！黙っとけ！」

脳震盪のうしんどうをおこす勢いで揺さぶる。

「聞こえてるか！？聞こえておるならさっさとこの腰抜けから体取り返して行くぞ！！」

私が知る土方 十四朗という男は・・・

こんな薄弱な奴に大人しく魂食われ続けるようなヤワな男じゃない！！！！

私が超える壁はそんな薄くて脆い壁ではない！！

私とケンカが出来る奴は恥や外聞も持ち合わせておらぬ臍抜けた奴ではない！！

私が・・・・この須藤恋歌が惚れた男は・・・・

仲間や大将見捨てて逃げ
るような卑怯者ではないっ！！」

熱くなりすぎたせいかな。荒くなった息を整える。

その時不意に掴んでいた胸倉のジージャンから右手が振りほどかれ

た。

「……るせーな……」

「はあ？」

「ピーピーギャーギャー……」

んだよ!!」

うるせえって言って

突然、らしい言葉が返ってきたとおもえば、頭上からチョップが振ってきた。

万事屋は、戦場に着くまで5秒前の恋歌の言葉が頭から離れなかったらしい。

〈長所と短所は紙一重〉（後書き）

＊梨栖の懺悔室＊

キヤツ☆恋ちゃんったらあ・・・言っちゃった♪（ノωノ）／／／

キヤツ☆私ったらやっちゃったワ（＾p＾）このドジッ子♪テヘッ

く人との結びつきは生涯大事に取っておけく（前書き）

前回のうp前日。あの熱狂的な土方さんファンのリア友が現れやがった。

奴には内緒にした第二部連載開始の話を聞きつけてきたらしい。物語を読むや否や、奴はもっそい剣幕でこうのたまいやがった。

続きは後書きで。

く人との結びつきは生涯大事に取っておけく

沖田が押したボタンは爆破のサインだった。車両のドアを開けばそこは炎に包まれている。

「伊藤先生！爆破箇所から炎が出て、これ以上は危険かと！！」

奴を見張りに置いた事を少し後悔しつつ、支持する言葉を考える伊東。

「列車を止めるな！近藤に逃げられる！！」

列車を込めれば近藤達に逃げられる。それに、此処にいるのはあの二人以外、自分の手駒。

列車を止めでもしない限り、奴等は袋のネズミ。ゆっくり叩けばいい。

などというやり取りが行われているのを知る由もない近藤と沖田はその隣の車両にいた。

「すまねえ…こんな事になったのは全部…俺一人のせいだ。俺は何て詫びればいい。」

お前らに…トシに…なんて謝ればいいんだ。」

黙って聞いていた沖田。近藤の言葉が終わったのを見て、静かに車両のドアを開けた。

「…！総悟っ！！」

ガコン。車両の扉がただの鉄とガラスの塊と化す。いくら近藤でも人力では開かない。

それでも必死にドアを叩き、開けるように懇願する近藤。

「近藤さん。大将の首とられたら戦は負けだ。ここは引き下がって

おくんなせエ。」

振り向きもせず、言い放たれた言葉、近藤は激昂した。

「ふざけるな!!」

一喝して、必死にドアをこじ開けようとする近藤。沖田は更に続けた。

「近藤さん。だから何度も言ったでしょう。アンタの悪い所は人が良すぎる所だって。」

誰でも信じて……疑おうともしねえ。」

車両と車両と繋ぐレバーを降ろした。

「挙句、あのキツネまで懐に入れちまうたア……まあ、いつかはこうなると思ってやしがねィ。」

近藤が急ぐ中、無情にも列車は二つに分裂していく。

だが・・・そんなアンタだからこそ、俺達は集まった。

そんなアンタだからこそ、一緒に戦ってきた。

「そんなアンタだから・・・」

があるのさ。」

命張って護る甲斐

どんどん遠のいて、小さくなっていく沖田。近藤はただそれを眺める事しか出来なかった。

沖田がああの車両に戻れば、殺気だった顔で反乱分子が刃の華を向けてくる。

伊東が口を開いた。

「沖田君。君はもっと利口な男だと思っていたが…たった一人で我々に勝てると思っているのか？」

近藤を一人逃がし、自分は此处で討ち死にして悲壮美に浸ろうとでもいうのか。

馬鹿げている。近藤は当初の計画通り死ぬというのに。

ふと車窓の向こうに脇目をやる。

万斎の運転するバイクの音がする。そしてその後には無数の戦車が続いていた。

行き先……モチロン言うまでもない。

しかし沖田は、にっと唇を吊り上げた。

「悪いな伊東さん……実は俺も一人じゃねえよ。」

ズドン！！耳をつんざく爆発音。万斎のすぐ脇を走っていた戦車が煙を立てて転がっていった。

それを飛び越えた、右側のドアの外れたオンボロパトカー。がこちらに向かってくる。

見慣れた顔が約二名。あとの三名は知らない顔だが、確かに隊士の制服を着ている。

そして何より、伊東が目を疑った事実。

その上にズッシリ構えている男の口には、しっかり煙草が挟まっていた。

「バカな！！土方・・・何故奴がこんな所に！？」

「御用改めでアルー！」

「テメー等アア!! 神妙にお縄につきやがれえ!!」

「そーだそーだアア!!」

しかし、副長健在の姿が見られたのはその時だけ。木の枝に顔面をぶつけた。

「いってえ……だああ!!」

土方……否、トツシーはパトカーにしがみつき、縮こまった。

「オイコラア!! 士気上げる為には副長健在の姿見せねばならぬというときにっ!!」

それを後から容赦なく踏んづける恋歌。

「ムリムリ!! 僕には出来ないよコワイー!!」

今更尻尾を巻いて逃げようとする姿。反吐が出る。

「テンメ、人にチョップする時だけ帰って来て何でまたヘタレにな
ってんだアアア!!」

お陰でチョップの前後の記憶があやふやじゃねーかよっ!!」

沖田はその光景を眺めていた。

「目障りな連中がゾロゾロと・・・だが、奴等を潰すには軍隊一個
あっても足りねーよ。」

伊東は、恐ろしいまでに冷徹な顔で車窓に背を向けた。

土方め。今更来たところで何が出来るというのだ。・・・・ま
あいい。

「近藤もろとも消してくれる。モチロン君や須藤に・・・御月も同
様に。」

「悪イが・・・消えるのはテメエの方だ。」

車両の端から端まで、反逆者をざっと洗い流すように見渡して、刀
を抜く。

「見知った顔も多いが・・・伊東派そっちについたからには死ぬ覚悟は出来てんだろぅな。」

真選組局中法度第二十一条『敵と内通せし者、これを罰する』・・・

テメー等全員、俺が
粛清する。」

一度まぶたが落ちて、再び開かれた目。周りの隊士は気が引ける。

そんな中、伊東の笑い出した。明らかに嘲るような声色だ。

「現状が見えてないとは…今この場においては僕が主流…反乱分子は君以外の何者でもない。」

奴が作った掟など、もはや何の意味も持たない。君等の真選組は消えるのだ。」

伊東がドアを開けた先には、迎えに来た万際が、バイクを列車に寄せていた。

伊東は一瞬宙に浮き、バイクに飛び乗る。それを確認した沖田は隊士に向き直る。

「真選組一番隊隊長として……テメエ等に最期の教えを授けてやらア。」

圧倒的に力の差がある敵を前にした時、その実力差を覆すのに一番手っ取り早いのは数だ。

呼吸を合わせろ。

身体共に清めろ。

実した瞬間・ ・ ・。

最も充

「全員、一斉に斬りかけエエ!!」

呼吸が充実した時、合図と途端に、弾け飛ぶように切りかかる。

「そしてエ!!」

そしてそこは・ ・ ・一瞬にして地獄へと化した。

窓が軒並み割れる。走るたびに、割れた窓から飛び散る、大量の血。

車両の中、大量の肉塊の中に、ただ一人立っていた。青年。

「

」

死んじまいなア。

列車の中に

ただ一人

わ 不
せ 適
て に
い 笑
た う
。 青
年
が
返
り
血
に
下
を
這

く人との結びつきは生涯大事に取っておけく（後書き）

「コレ、カップル誕生フラグ！？トシはウチの嫁なの！やめてよ！」

・ ・ ・ ・ ・ 解 せ ぬ 。 （ ^ ω ^ # ） ピ キ ッ

だああから恋歌の片思いだっつってんだろーがああああーっ
！！

トシとか馴れ馴れしいんじゃワレ！副長とお呼びせんかいいいい
いい！！

そもそも土方さんはオメーーーーーだけの嫁じゃねえええんだよっ
！！

思い返しただけでもムカつくぜえええええええ、（ ㇿ # ） ノ ム
キーツ！！

・ ・ ・ ・ ・ 。 （ # ㇿ ） 、 ペ ッ ！

はっ！？（ □ ； ） ・ ・ ・ 失礼。取り乱しました。

く敵同時を結ぶのは利害の一致だけく(前書き)

動乱篇だけで20話超えるっぽい・・・

こんかいちょっと長いです。ゴメンナサイ。

「敵同時を結ぶのは利害の一致だけ」

何処へ行っても爆発。爆発。爆発。

そんな中オンボロパトカーは近藤目指して右往左往しているところだった。

「近藤さんは！近藤さんは何処にいますか！？」

「アレアル！！あの離れたあの車両！！敵がみいんなあそこに向かって行くネ！！」

しかし、そこへ行こうにも敵の数が多すぎて行きつけない。

「・・・だそうだと土方氏。あとは自分で何とかしろオ！！」

蹴落とされたトッシーはパトカーのフチにすがるように掴んだ。

「ちょ・・・坂田氏イ！こんなところに拙者一人置いていくつもりかアアアア！？」

それは、ナメック星にヤムチャ氏一人送り込み、宇宙の命運を託すがごとき暴挙だよオオ」

「大丈夫じゃ。今や貴様はベジータにも匹敵する実力者だからな。なっ、ブラザー。」

「そうともシスター。ジャンプ歴20年と13年の俺達を信じる。」

踏みつけて落としに掛かっている最中、遠くからサイレンが鳴り渡る。

振り返れば、まだ真選組の誇りを捨てていないパトカーが向かってきていた。

「は・・・原田！！」

「副長オオオオ！副長だ！どっちも無事だったぞおおお！！」

「無事じゃねーだろコレどう見てもオオオオオオ！！」

「真選組！？何で？」

「あん時、パトカー壊す前に無線機使って呼びかけたんだっ！」

李麻のウィンク。と同時に、原田達の乗るパトカーへと移る。恋歌も同様に。

「原田。やる事は分かっておろうの。」

「へい！」

「総員、すべき事はただ一つ。攘夷浪士の討伐及び裏切り者の粛清・
・・・一斉にかかれエ！！」

おお！！

いつも以上に士気のこもった掛け声。パトカーがどんどん応戦していく。

「そんな訳でこやつ等は私等で引き付けておく。だから・・・行け
！」

そういつて、彼女達の乗るパトカーも応戦に向かった。

その光景を、動かぬドアの奥で近藤は見ていた。

あいつ等．．．．何で来やがった。何で．．．．．
．

その時、一台のオンボロパトカーが線路に沿って走ってきた。

見慣れた、嫌な連中。その奥に耳を塞いで座っているのは．．．近藤が見紛うはずがない。

この野郎．．．．．なんで．．．．何でお前がこんな所にいるんだ
よ．．．．．

俺にあんな仕打ちを受けたお前が・・・なんで俺のためにこんな所まで・・・・・・・・

「トシイイイイイイイイ！何で来やがった！！バカヤロオオオオオオオ！」

溢れ出る涙。抑えきれずに、床へ滴り落ちる。

しかし、銀時のバズーカの発射口がこちらに向いている事に気がついた。

「え・・・・・・・・アオオオオオオウ！！」

ドアと共に、吹き飛んだ近藤。

「近藤さーん。大丈夫ですかイ！？」

「ダメネ。いないアル。」

「何すんだテメー等アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ドアからニュツと出てきた近藤は渾身の力で叫んだ。

「あ、いた。おーい無事かー？何かお前暗殺されそうになってるらしいな。いっちょ前に。」

「『今』されそうになったよ！たった『い・ま』！！！」

後部座席を見て、近藤はハツとし、これ以上食い下がるのをやめた。

「まさか……お前等……トシをここまで……ありえなくね？お前らが俺達を？」

顔をあわせる神楽と銀時。なんと言えいいのか迷いがあつたらしい。再び向き直り、

「……遺言だ。コイツの。」

「遺言？」

近藤には言っている意味が分からなかった。土方は此処にいるというのに。

「妖刀に食われちまったんだ。今のコイツはへたれたオタク。戻ってくることもあるめえ。」

「妖刀………？」

ここ最近の土方の不可解な行動。それが妖刀のせいならば説明がつく。

「そんな状態で、トシがお前らに何を頼んだんだ！」

「……………『真選組を護ってくれ』ってよ。」

そんな状態になってまで・・・・・・・・アイツは・・・・・・・・

眉をしかめながら、頭を下げた土方の姿が頭に浮かぶ。

「万事屋。俺もお前に依頼がある。・・・・・・・・これも遺言と思ってくれていい。」

トシ連れて、

ここから逃げてくれ。」

↓墮ちるのは簡単だが這い上がるのは難しい↓（前書き）

ヲタにとって夢の国T●Lに匹敵する店舗、アニメイトが近所にな
い件について。

三田や三ノ宮にまでいかねばNARANU。・・・神戸にもアニメ
イトを！！

（行ったことないけど）

今回は本編にウチの子達は出ないのでおまけを書きました。

「墮ちるのは簡単だが這い上がるのは難しい」

「トシ連れて、ここから逃げてくれ。」

近藤の表情は、至って真剣だった。

「こんな事になったのは俺のせいだ。戦いを拒むトシを巻き込みたくねえ。」

俺ア、伊東に注意しろというトシの助言を拒み、些細な失態を犯したトシを奴の言うままに……」

コイツがそうなつてるとも知らずに

コイツがそんな身になってまで真選組護ろうとしてたのも知らずに

プライドの高エコイツが、お前等に頭を下げて真選組を託したとも

知らずに。

「すまなかったなあトシ・・・すまなかったなあ皆・・・俺ア

全車両に告げてくれ。今すぐ戦線を離脱しろと。近藤勲は戦死した。

もう・・・身内同士でやりあうのは沢山だ。」

そんな中、トツシーの手に握られたトランシーバーが磁場を放つ音がした。

「あ、あー。大和の諸君。我等が局長近藤勲は無事救出した！勝機は我等の手にあり。

局長の顔に泥を塗り受けた恩を仇で返す不逞な輩。あえて言おう・・・カスであると！！

今こそ月に代わってお仕置きするのだア！」

車両中。敵味方関係なく、パトカーの無線から流れた言葉。

『誰だアア！気の抜けた演説してるのはアアア！！』

「誰かだとオ？・・・・・・真選組副長

土方十四朗な

りイイイイイイイイ！！」

トランシーバーを置き、荒れた息を整える。

「土方さん・・・・」

「近藤氏。僕等は君に命を預ける。その代わり、君に課せられた義務がある！」

残る。

それは死なねえ事だ！！何が何でも生き

どんなに血色にまみれようが、目の前でどれだけ隊士が死んでいこうが、

君は生きにゃならねえ！君がいる限り、真選組は終わらねえからだ！

僕達はアンタに惚れて真選組に入ったからだ！…バカのくせに難しい事考えてんじゃねえよ。」

車内で燃えた、小さな火。それは戦火でも爆撃でもない。ライター
の火だ。

そして持っていた口元には、真新しい煙草が銜えられていた。

「テメーはテメーらしく生きてりゃいいんだ。俺達や何者からも護
るだけだ、

近藤さん。」

吐いた煙は風になびき、幻のように消えていく。

「アンタは真選組の魂だ。俺達はそれを護る剣なんだよ。」

「……トシ。」

だが安心できたのはそこまで。不吉の象徴、この事件の元凶がバイ

ク音と共に近づいてくる。

「一度折れた剣^{キミ}に何が出来ると言うのだ！

土方君。どうやら君とは何があっても決着をつけねばならぬらしい。
」

ようやく戻ってきた。土方の好戦的な笑み。

「剣ならここにあるぜ。よく斬れるやつがよ。」

左腕を勢いよく押し、肘打ちで後ろの窓を突き破った。臆する事なく、ボンネットに立ち上がる。

『こんな薄弱な奴に大人しく魂食われ続けるようなヤワな男じゃない！！』

不意に頭に流れた部下の腐れ説教。

「聞こえたぜ、あの恋歌^{アホ}の腐れ説教。ガキが偉そうにベラベラベラ

ベラ・・・」

手にそれぞれ、柄と鞘を握らせて、力を入れる。

しかし鞘からは、刀身独特の鈍い光を放つ気配はなかった。妖刀の最期の足掻きだろうか。

「・・・さっさと抜いちまえよ。」

「黙りやがれ！万事屋！！ふぬぬ・・・テメェに一言言っておく！！」

「ありがとうオ！！」

苦し紛れに言った、苦し紛れの一言。銀時は眉一本動かさず言う。

「オイオイ、また妖刀に吞まれちゃったらしいな。トッシーか？トッシーなのか？」

その時、鞘から放たれた。僅かながら、確かに放たれた銀色の、鈍い光。

そこから、残りの光も一気に解き放たれる。

「大将の首をとりたくば、この俺を倒してからにしろ。

何人たりともここは通さねえ。何人たりとも俺達の魂は汚させねえ。

」

俺は・・・

近藤勲を護る最後の砦。

真選組を護る最後の剣。

「真選組副長、土方十四郎だアアアアアアアアアア！！！」

く墮ちるのは簡単だが這い上がるのは難しいく（後書き）

お・ま・け

今は敵の注意をこちらに引き付け、応戦している真つ最中。
土方さんが復活して士気は最高潮なんだZ E ☆

李「行くぜふくちよー！！今こそ僕等の編み出した連携必殺技を！」

言うや否や李麻は逆さ立ちとなつて何かの準備をする。

恋
「おう!!」

タン！！

原「おおぅ！御月さんの足に須藤さんの足が合わさって……」

恋&mp,李「「必殺!!WRダブルアールジャバラジャンプーリング!!」

李麻が、曲げていた足を勢いよく伸ばし、恋歌が飛び上がる。

＊説明しよう。
「必殺！！ダブルアールWRジャバラジャンピング」とは＊

李麻の脚力と恋歌の身体能力を生かした連携必殺技。

李麻をトランポリン的な踏み台役にし、恋歌が飛び上がって、急降下していく勢いを武器に敵と戦う。戦車一つは潰れるほどの威力である。

因みにWRとかRNKA&RIOの略である。

恋「でもやっぱ技名ダサイから…ってコレ何時になったら落ち…アッー！」

李「しかし飛びすぎて、星になるかもしれないリスクも伴う技なのであった。」

原「須藤さあああああん・・・」

こうして・・・真選組副長・須藤恋歌は星になった。

*****END*****

フゝ。コレで後はうpするだけ・・・

恋「勝手に殺すな。」

斬ッ！！

```

** ** ** ** ** ** ** ** *
** ** ** ** *
** ** ** ** *
** ** ** ** *
梨栖・D I E D
** ** ** ** *
** ** ** ** *
** ** ** ** *
** ** ** ** *
** ** ** ** *

```

く大切なものは見えにくいく（前書き）

全体的に半分を超えたらしい。やたっ！、（・△・）ノ

「大切なものは見えにくい」

遂に完全復活を果たした土方。妖刀の切っ先を真っ直ぐ伊東に向けた。

「自力で妖刀をねじ伏せた…」

「…悪いなゴリラ。お前の依頼はナンボ金詰まれても受けられねえ。あっちが先客だ」

近藤はフツと笑った。

「仕事はここまでじゃなかったのか？」

「延滞料金はガッポリ頂くぜエ」

それを聞いた近藤は、何も言わずにパトカーに飛び乗った。

「来やがれ伊東!!」

「――変わった。…あの男の魂のリズムが変わった。」

幼稚なアニソンから骨太のロックンロールでござる」

何も言わず、ただバイクを運転していた万斎がポツリと呟く。

背後で好戦的な笑みを浮かべ、刀を抜く伊東を見て、不適に笑って訂正する。

「いや、ヌシもか。伊東殿。格調高いクラシックから凶暴なメタル…いい曲だ。奏でるが良い。」

……美しき協奏曲を。」

アクセルを思い切り踏み込んでパトカーに近づいていく。

「土方アアアアアアア！」

「伊東オオオオオオオオ！」

「ちょっと恋歌ア！？何やってんのオ！！」

「前回のオマケで飛ばされて落ちた先がここでした！！悪気は皆無にございますっ！！」

「オイ、後ろ…うしろーっ！！」

後退していくパトカーと、前進してくる離脱した列車。

瀬戸際で身を挺して踏み止まった土方。その顔面に蹴破られたドアが当たるのはすぐだった。

「近藤さん。早くこっちに移ってくださいエ。…ちいと働きました。」

「総悟！！」

外れたドアから出てきたのは、沖田。

「ああ…是が非でも俺が勘定方に掛け合っておいてやる。」

押し来るパトカーと列車に抵抗しながら言った。

「そいつぁいや。ついでに、伊東^{ヤツ}の始末も頼みまさア。ちよいと疲れちまったモンで。」

そういつて、寄りかかり、遠い目で戦場を眺める。

「土方さん……少しでも後れをとったら、俺がアンタを殺しに行きます。」

今度弱み見せたら、今度こそ副長の座、俺が頂きますよ。」

「しかし……トシを置いて俺だけ逃げろと言うのか。」

近藤が立ち直り、沖田のほうへと歩み寄りながら言う。土方の上で。

「モタモタしてんじゃねーよ!!」

「そこで揉めんな!! つーかテメー等何で当たり前に人を橋のよ
うに扱ってんだ!!」

その時、重荷を下ろしたバイクがパトカーの上へ、銀時を振り落とすように掻っ攫う。

「銀さん!! ……ってアレ、皆は？」

「早く来るネ新八!! パトカーと一緒に粉々になりたいアルか!？」

既に列車へ移動した神楽たちが、手招きをしている。

「って早アアア!!」

彼もまた大急ぎで、列車に渡り移った。いつの間にやら狭まっていた前の列車との間隔。

間に挟まれ、いとも簡単にひしゃげるパトカー。もはや原形も留めていなかった。

先程まで近藤が乗っていた、今となってはもぬけの殻となった列車に伊東はいた。

「土方君。君は僕の唯一の理解者だった。惜しむらくは僕の器を知り、恐れ僕の敵に回った。

君がもし局長であつたならば、僕は反乱なんて企てなかったかもしれないよ。」

あくまでも仮説の話だが。心の中で訂正した。

ただ君も一つだけ僕を勘違いしている。

君が僕の器を知るように……僕もまた……

親指で柄を引っ掛け、僅かに刀身が顔を出す。

「君の器を知るといふ事を。……来い!!土方十四郎!!」

二方向の斬撃に耐え兼ねたパトカーの残骸が、粉碎し花びらのように舞い散る。

「最期の決着の時だああああ!!」

く大切なものは見えにくいく（後書き）

・・・最近、キャラのセリフで次に続くの多くね？

く利害がずれれば敵は裏切るく（前書き）

実は銀さんをちゃんと書くのは今回が初めてだったり（U、；）
何か・・・心なしかプレッシャーを感じるのだが・・・

「利害がずれれば敵は裏切る」

バイクに轢かれそうになるのを避けるように転がり落ちた銀時。

周囲を確認していると、何処からともなくバイクの音が聞こえる。

場所を捉え、木刀を振りかざした時、相手も同様に斬りかかる。

次に景色となったのは、炎上するバイクであった。

銀時も、バイクの主も軽く出血している。荒れた息を整える。

「面白い音を出すな、お主。気ままで捉えどころのない、ジャズにも通ずる。」

いや、それにしても品がない。例えるなら酔っ払いの鼻歌でござる。

どこかで見た顔。銀時は数多い記憶の中を辿っていく。

「テムエ…高杉のところにいた野郎だな？」

サングラスのせいか、表情も見えない。何の反応も示さない。

「オイ。人と話すときはちゃんとヘッドホン取りなさい。」

「……坂田銀時。いや、白夜叉。何ゆえお主が真選組にいるでござるか？」

烈火の中、爆風でたなびく服に風。勝負は既に始まっていた。

「ちゃんと聞こえてんじゃねえかよ。…あの男。テムエ等の息が掛かってるようだな。」

真選組の実権握らせて、幕府の冠者とするつもりか？」

「味方を売るなどという行為を平然とやってのける者を仲間にするほど……」

拙者等は落ちぶれてはござらん。」

バツサリと言つてのけた。更に続ける。

「また、信義に背く者に人は集まらん事も拙者達は知っている。」

「じゃあ、あの男は。」

「哀れな男でござる。己が器量、知るときはもう遅い。」

もう遠くへ行ってしまった列車をサングラス越しに眺めた。

一方、列車に乗った面々は、土方達がどうなのか車窓から身を乗り出して見る。

何せこちらには、双眼鏡いらずの目を持った女がいるから状況を把握するに事欠かない。

「どうなってる!？」

「双方一向に退かん……何か隙を作らん限り、永遠と互角の戦いになろう。……ん？」

遙か遠くを見つめて、恋歌がうなる。

「どうしたネ？」

「いや、あの橋の上にある……ポコッと出てんの……何アレ？」

指をさす方向には、ただの橋と線路が延々と続いているだけだった。

「何も見えないネ。ただの橋アル。」

「そうかあ……？ 確かにあるって！」

ちょうど激戦を繰り広げている土方達の乗る、列車がその異物を通り過ぎた瞬間。

耳をつんざく爆音と共に橋の一部が池の底へ沈む。

「……全て砕け散った後……眠るが良い、伊東……真選組もろとも……」

192

く利害がずれれば敵は裏切るく（後書き）

アニメから聞き取ってるんで誤字が多いかと思っています。
もし、該当していたら遠慮なくご指摘お願いします。

く人生に一人は心の底から信頼しあえる友達を作れ!く (前書き)

より銀みてきたお!・・・土方さん。アンタいちいちカッコ良すぎだよ。

や、やめてえ!! 梨栖さんのハートはもう黒コゲよ!! (≡△≡)

もう動乱篇も終盤へ向かっている! 気を引き締めなければ!!

「人生に一人は心の底から信頼しあえる友達を作れ！」

ここは何処だろう。さっきまで僕は土方ヤッと殺し合いをしてたはず。

視界に入るのは揺れる船が橋の下を通り過ぎていく、どこかで見た光景だった。

それは確かに、事を起こす前までの僕。目の前には左目を包帯で巻いた、隻眼の男。

「天才とはいつも孤独なものだ。僕には理解者がいない。」

僕はこんな所でくすぶっている男ではない。それは僕自身が一番よく分かっていた。

なのに誰もそれを理解出来てない。誰も僕の真の価値に気付かない。

なら……

「なら、自らで己が器量を天下に示すしかあるまい。真選組を我が物にする。」

それを地盤に僕は天下に躍進し、この伊東鴨太郎が生きた証を天下に、人々の心に刻む。」

その男は、目も合わせず、相槌を打つ事もなく、ただ煙管をふかしているだけだった。

男は、ようやく不敵な笑みを浮かべ、口を開く。

「悪名でも構わねえと？その為なら、恩を受けた近藤を消す事も厭わねえと？」

「恩？……なら近藤の方にある筈だ。あのような無能な男に僕が仕えてやったのだ。」

感謝こそされど不満をいわれる覚えはない。」

それを聴いた男は、また声を上擦らせて笑う。

「伊藤よオ、お前……自分以外の人間は皆バカだと思ってるクチだ

ろ。

だが、そのバカな連中に理解されるのを不満に思っている。理解されたいと思っている。

自分を見てもらいたいと思っている。己の器を知らしめたいなんて大層なモンじゃあるまいよ。」

お前はただ、一人だっただけだろ。お前が求めているものは自分を認めてくれる理解者じゃねえ。

お前が欲しいものは——……

そこで意識が現実へ戻る。爆発の衝撃でグシャグシャになった列車。

かろうじて上着が引っ掛かり、一命を取り留めたのだ。傍を見れば、力なく項垂れた右腕。

自分は今ここで生を掴んでいる。となるとその腕の持ち主は……

「土方……そうか、僕は、僕は遂に土方に勝つ——」

重力に耐えかねた列車の一部が地に落ちる。下は水だろうが深すぎて水飛沫が見えない。

急に恐怖が身を侵し、後ずさる。右腕にいくら力を入れても手が言うことを聞かない。

いや、腕が言う事を聞かないのではない。

言うことを聞かなくてはならない腕とは、さっきまでずっと土方のだと思っていたその事。

それに気付いた時、伊東はあらん限りの声で後悔の声を挙げた。

その頃、銀時は目を見開いてまだ立ち昇る煙を眺めていた。

「晋助は伊東を看破していたでござる。

自尊心だけは人一倍強い、己の力量も分からぬ自己顕示欲の塊だと、それを刺激し利用するのは容易な事でござる。思惑通り同志で争い、戦力を削ってくれたわ。」

「テメエ等、ハナから真選組潰すつもりで奴を利用してたのか。

伊藤の反乱を協力する呈を装い、戦力を消耗した真選組を壊滅するつもりだったのか。」

なんら表情を変えず、淡々と続ける。

「あの男らしい死に方でござろう?」

ちょうど同じ頃、鬼兵隊のヘリが伊東の元へ向かっていた。

助けが来た!! 彼等の真の目的を知る由もない伊東はそう思った。

裏切り者は裏切り者によって消える。

マシンガンの照準が、状況を理解し、真っ青に顔を染めた伊東に
合わされる。

伊東自身にあたった手応えはない。ただ、彼のライフラインであ
った引っ掛けが碎けた。

重力に逆らえず、落ちていく伊東。

止めてくれ。僕はこんな所で終わる男じゃない。もっと出来る男なんだ。

彼の頭にはそれしかなかった。

寺子屋で神童を謳われた時も、北斗一刀流に推挙された時も。喜びを伝える母も、友もない。

挙句、「次男にどれだけの才覚があろうと宝の持ち腐れ。あんな子、産まれなければ……」

自分が母の腹の中にいたとき、兄から全てを持っていたというのなら……

双子の兄、鷹久は今、自分から両親を奪っている。

頑張っても頑張っても頑張っても。周りに認めてくれる者など誰一人としていない。

一人にしないで。

もっともっと僕を見てくれ。

僕の隣にいてくれ。隣にいて、この手を握ってくれ。

めい一杯手を伸ばした。掴んでくれたのは共に反乱をした相手でも、鬼兵隊でもない。

今まさに、自分が消そうとした張本人……

そして張本人に従う者達が梯子のように、自分を助けようと踏ん張っている。

「遅いアルよお!! 李麻!!」

「いや、流石に列車の追っかけはキツイって……」

地上でそんな言葉が聞こえる。

「近藤! 分かっているのか!? 君は、今、自分が何をしているのか!!」

それでも近藤はてを離そうとしない。おもむろに口を開く。

「謀反を起こすのは大将の罪…無能な大将につけば、兵は命を失う! これを斬るは罪じゃねえ。」

……すまねえ。俺はアンタの上に立つには足らねえ大将だった。」

この上更に詫びてくる近藤。その目は嘘をついている人間のそれではない。

「元々向いてねえんだよ。大将なんて、俺ア。アンタの方がよっぽど大将に向いてらア!」

俺は目の前で隊士が死んでいくなんざ黙って見てられねえよ。死兵

と割り切る事は出来ねえ。

先生エ。俺ア兵隊としてじゃなく、ただ肩付き合わせて酒交わす仲間として傍にいて欲しかった。

まだまだアンタには沢山、教えて欲しいことがあったんだ。先生エ
「！！」

僕が一人なのは僕のせいじゃない。周りが無能な奴ばかりだからだ。

孤独を受け入れられず、孤独なのを周りのせいとして生きてきた。

人に拒絶される事を恐れ自分から拒絶してきた。傷付くのを恐れ、孤独が好きなフリをした。

自己顕示欲だけが日増しに大きくなっていった。

そう、自分はいつの間にか忘れていたんだ。自分が本当に欲しかったものを。

それは、地位や名誉武功や才能でも、自分を認めてくれる理解者でもない。

ただ隣にいて欲しかったんだ。ただ誰かに見て欲しかった。ただ一人が嫌だった。

ただ……

「先生エエエエエエエエエエ!!」

掛け声と共に、一気に引き上げていく近藤。

「「ふぬうううううううう!!」」

神楽達が引き上げる事で、伊東も地面に触れた。その時、被弾する。

その時、ヘリに乗っていた男は、上にまだ、誰かがいる事を確認した。

「何してやがる!! さっさと逃げやがれエエ!!」

斬撃が見えたと思えば、プロペラが車体から斬り離される。

回転して落ちていくヘリの上に乗っていたのは、土方だった。

形相は相変わらずだが、手を伸ばして此方へ来る。それに応えて伊東も手を伸ばす。

そしてその手は、しっかりと掴まれる。

そうか……僕が欲しかったものは、とつくの昔にここにあったんだ。

「土方君。君に一つ言いたい事があったんだ。」

「奇遇だな。俺もだ。」

「俺／僕はお前／君が嫌いだ。いずれ殺してやる。……だからこんな所で死ぬな！！」

ったんだ。

僕が欲しかった絆は……すぐ傍にあ

ゝ人生に一人は心の底から信頼しあえる友達を作れ!ゝ (後書き)

今回はいつもより長いです (また!!)
ゴメンナサイ。

「護るべきものをコロコロ変えるな!!!」

伊東を引き上げ、一旦列車に引っ込む。あたりは戦場と思えないほど静かだ。

ハエとしか思ってた女。自分の肩を担いで、歩く女が急に強^{したた}かに見えた。

「君は本当に肝が据わっているんだな。あの時、自分の身の危険も恐れず土方を護るとは。」

あの会議だと言うことはすぐに分かった。

女は顔も目も向けず、伊藤の方を担ぎ続けながら言う。

「何を勘違いしておるか知らんが、私が護ったのは近藤勲殿じゃ。」

あの方には土方^{ヤッ}がおらねば困るからついでに助けてやった。それだけの事。」

恋歌は、さっきまでの伊東を以前の自分と重ねていた。

10回目の誕生日で竹刀を取られた。

更には、お前は女だろう。そんな言葉で吐き捨てられ、やさぐれていた自分と。

あの時、あのストーカーを見つけなければ、自分も第二のコイツだっただろう。

そう思うと、今にも溢れそうだった伊東への憎悪が消えていった。

「私も奴等に負けず劣らずの阿呆だからな。そなたのような難しい事は言えんし分からん。

だがこれだけは言える。世の中どんなに優れた奴でもそやつを認める者とそうでない者がおる。」

私も未だに「女だてらに」と言われたりする。とフワリと笑いながら女は言っていた。

「そなたの周りにはたまに……
後者しかおらんかっただけの事。

言いたい奴には言わせておけば良いのじゃ。どーせ自分が出来ぬ故

妬んでおるだけ。」

いい加減な考え。だが、真っ当で筋の通った考え。座席にそっと降ろされる。

それと同時に、此处をこぎつけた輩が斬りかかりに来た。

不意に伊東が不安げな表情をする。が、それは野暮というもの。

やからがは一太刀の傷を残し、肉塊に成り果てる。

「案ずる事は無い！此処におるのは数多の修羅場をくぐって来た猛者ばかりよ！

新たな仲間が絶対護り抜く！！」

そう言っただけで彼女もまた応戦に向かった。数が違うにも関わらず圧倒的な力で迎え撃つ仲間達。

その時、車窓から異質な物が空に浮かんで、こちらに来るのを見た。いち早く気付いた土方。

「オイ！上！！」

全員が気付いた時にはもう遅い。照準はキッチリ此方に合わさっていた。

遠慮なく引かれる引金。当たらないように、必死に地にしがみつく面々。

曇が晴れた時、近藤と土方はふと仰ぎ見た。そこには、自分達を庇って血まみれになった伊東。

「先生エエエエエエエエエエ！！」

「伊東オオオオオオオオオオオオ！！」

吐血し、倒れる伊東。咄嗟に土方が抱えた。酸素を求めて喘ぐ彼の名をもう一度叫びながら。

へりの撃ち手は標的に当たった事を確認し、恍惚としている時、へり全体が揺れた。

見れば、上司である河上万斎が銀髪の侍に押し上げられているではないか。

「ば、万斎様アアアア！前が……」

万斎は後ろ手で三味線に隠した、刀を抜き取り、銀時の左肩をえぐるように切り付ける。

「死ねえ！！白夜叉アアア！貴様は何が為に戦う！何が為に命を懸ける！！」

もはや侍の世界の崩壊は免れん！！晋助が手を下さずともいずれこの国は腐り落ちる！！

お主が一人足掻いたところで止まりはせん！この国に護る価値などもはや無い。

醜く腐ったこの国に、潔く引導を渡すが武士の役目。この国は腹を切らねばならん！！」

苦し紛れに銀時は笑って言う。

「死にてーなら…一人で練炭自殺でも何でもしやがれ!!」

「坂田銀時。貴様は亡霊でござる。かつて、晋助と共に侍の国を護ろうと戦った想い……」

それを捨てられず、囚われ…生きた亡霊だ!」

一気に刀を引き寄せ、弾くように斬る。おびただしいほどの血が雨のように地に落ちた。

「ヌシの護るべきものなどもう在りはしない! 亡霊は…帰るべきところへ帰れ!!」

そのまま、亡霊が地へと落ちる。先程とは違い、冷静な口ぶりで呟いた。

「レクイエムをくれてやるでござる。」

ベン。

この音を万斎が聞き違えるはずはない。弦が自分にまわり付い

てる事に気付いた。

上手い具合に絡まってほどけない。

「オイ兄ちゃん……ヘッドホン取れ！！この野郎オオオオオオオオ！！」

「洞爺湖」と書かれた柄。刀身に弦が巻きついている。

いつの間に弦を……咄嗟に脇に目配せをする。

「何をしている！撃てエエエエ！！」

マシンガンが繰り出されるも、照準がぶれているのか、標的にあたりはしない。

「耳の穴かっぱじてよく聞けエ！俺は安い国の為に戦った事は一度たりともねえ！！」

国が滅ぼうが侍が滅ぼうが！どうでもいいんだよ！！俺は昔から！！」

向きを変えて、力の限り引っ張り込む。ずいずいと引きずり込まれていく。

「今も昔も…俺の護るモンは何一つ……」

エエエエエエエエ！！」

変わっちゃいねエエエ

へりの重量に抗いながら、一気に振り下ろす。比例するように、へりが爆炎を上げていた。

ゝ護るべきものをコロコロ変えるな!!ゝ (後書き)

後書き Q..あの…銀さんが三味線ブツ千切って助けに行く・・・

A..…というカッコイイ銀さんは原作、もしくはアニメを見て萌え
ましよう!!

「何事もノリとタイミング」

炎上するへり、そこに生きた人間の気配がなかった。

「ば、万斎様アアアアアア!!」

いくら呼ぼうとも返事はない。真選組一同はそれをただ呆然と見ていた。

「な……何をしている……!!」

苦し紛れに、声を出す伊東に振り返る一同。

「ボヤボヤするな……副長オ、指揮を。」

しばらく黙っていた土方であったが、やがて目つきを変え、妖刀を握り締める。

「総員に告ぐ!! 敵の大將は討ち取った! もはや敵は統率を失った

烏合の衆!!

一気に畳み掛けろオオ!!」

副長復活の姿を見せ、戦いに終止符を打った。

あれからどれくらい時間が経っただろう。二つの足音で伊東の意識が戻る。

メガネをかけた少年と、髪をぼんぼりで飾った少女。隊士ではない。それはすぐに分かった。

「何で、あんな事を。裏切りなんてした貴方が何で僕等を庇ったりなんか……」

「君達は……真選組ではないな。だが、彼等とは言葉では言い難いような絆で結ばれている」

友情とも違う。敵とも違う。でも、浅はかならぬ絆で。

メガネの少年は優しく微笑み言う。

「ただの腐れ縁ですよ」

意表をつかれた。遠のく意識の中で、力なく笑う。

「そんな形の絆いともあるんだな。知らなかった、いや、知ろうとしなかっただけか。

人と繋がりたいと願いながら、自ら人との絆いとを絶ち切ってきた」

ただちっぽけな自尊心の為だけに、本当に欲しかったものまで見失うとは……笑いものだ。

ようやく気付けた大事な絆さえ、自ら壊してしまうとは……

「何故……何故いつだって気付いた時にはもう遅いんだ」

何故共に戦いたいのに立ち上がれない。何故剣を握りたいのに腕

がない。

何故……ようやく気付いたのに、自分は死んでいく。

「死にたくない。死んでしまえば本当に一人だ。どんな糸さえ届かない。もう一人は……」

コツ。靴の底が冷たい地面に音を鳴らした。

「そいつを……こちらに渡してもらえるか？」

原田の冷徹な声。二人は振り向きもしなかった。

「お願いします。この人はもう……」

どんどん呼吸が浅くなる伊東を見下ろす。

「万事屋。今回は本当に世話になった。だが、その頼みは聞けない。そいつの為に何人が犠牲になったと思っている。裏切り者は俺達の手で処分しなけりゃならん。」

「助けてもらったんです!! それに……」

新八の必死な弁明を止めたのは近藤だった。新八とは目も合わせない。

「連れて行け」

ただ一言。近藤が言い放った冷徹すぎる言葉。連れて行かれる伊東。

「近藤さん!! 何で……」

泣き叫びたいのを堪えながら、ひっきりなしに涙を流す近藤にそれ以上何も言えなかった。

そう、彼等とて同じなのだ。この男を、ただの薄汚い裏切り者で死なせたくはない。

大事なものに気付けた。ほんのわずかな時間だが、やっと絆で繋

がれた。

なら……せめてもの手向け。伊東が連れて行かれた場所は隊士達で作った土俵。

そしてその中にいる。刀を二本持った土方。そのうちの一本を放り投げた。

「立て、伊東。決着着けようぜ。」

刀を拾い。気力だけで立ち上がった伊藤。それまでにどれほどの血が出ただろう。

お互い、相手だけを真っ直ぐ見て構えを取る。

「土方アアアアアアアア！」

「伊東オオオオオオオオオオ！」

一太刀が光る。程なくして伊東の背から鯨の飛沫のように、血が溢れ出る。

だが不思議と痛くはない、一本の絆がそこにあったから。

そして次第に、二本……三本と増え、無数の糸が伊東を取り巻いた。

これが……ずっと欲しかった絆^{いと}。今まで見たどんな美しいものよりも美しかった。

「……がとう。」

ありがとう。」

一片の悔いもなく。一片の恨みもなく。幸福と、仲間の絆の尊さ

を背負って、男は旅立った。

〈何事もノリとタイミング〉（後書き）

関係ないけどBLEACH見たお！

十刃がああ！！

まあジジイはどーでもいいとして。（むしろよくも碎蜂隊長の腕を……！！）

スタークさんとリリネットちゃん、結構好きだったのになあ。

……というか。ハ、ハリベル様アアアアアアアア！？（姉御キャラに弱い私。）

野郎オ……絶対に許さん！！

く死者はちゃんと弔ってあげよう。化けて出てくるよ）（前書き）

動乱篇最終回となります。思えば長い道のりだった…！！
書き遂げたぞおおおお！

アニメで動乱篇を見直した感想

！！

高杉さんはハタチになってから

「死者はちゃんと弔ってあげよう。化けて出てくるよ」

真っ暗な夜空の下で、静かに響いて、重奏を成す二つの三味線。

怪しい雰囲気しか出てこなかった。

「そうかい。伊東が死に、真選組が生き残ったか。存外、まだまだ幕府も丈夫じゃねえか。」

いや、伊東が脆かったのか、それとも……」

怪しい男。高杉晋助。その目は目の前の河上万斎を獣の目で睨みつける。

「万斎。テメエが弱かっただけなのか」

どうやってその程度のケガで済んだのか。万斎はただ黙々と弦を弾いていた。

「元々今回の仕事は、真選組の目から幕府中央から引き離すのが目

的。

春雨も無事密航し、中央との密約がなったとなれば戦闘の必要もなし……

最優先事項は無事、成されたでござる。」

「俺ア、真選組も潰すつもりでいけと言ったはずだ。」

獣の眼差しは変わる事無く真っ直ぐ万斎に向けられる。

「何事にも重要なのはノリとリズムでござる。それを欠けば何事も上手くいかん……

ノれぬのあれば、即座に退くのが拙者のやり方。」

「万斎」

立ち上がって、出て行こうとする万斎を引き止める高杉。

「俺の歌にはノれねーか。」

万斎は立ち止まり、振り返ることなく呟くように語り掛けた。

「白夜叉が、俺の護るものは今も昔も変わらんと。晋助。ヌシ、何か分らんか？」

何故か最期まで聞きたくなつたでござるよ。」

奴等の歌に聞き惚れた。誰が敗者かは言わずとも分かつていた。

万斎が出て行つた部屋。そこからまた、一つの三味線の弦が弾かれていった。

真選組屯所に並ぶ来賓。念仏を唱える坊主の前には山崎の遺影が飾られていた。

「あんにやろー！！何で逝きやがったんだよチキショー！」

ハンカチに目を当てながら、そんなことを言う李麻。

その部屋の後で、眼一つ分、障子が開いていた。

（や…やべええええ！俺、完全に死んだ事になってるウウウ！まさかもう葬式まで……）

完全に出遅れた！出るタイミングを逸したアアアア！（！）

その正体は言うに及ぶ。あの時万斎の刀に刺さったのは山崎ではなく、砂利であった。

『気が変わった。ヌシの歌…少し聞きたくなつたでござる。』

生き延びて歌の続きを聞かせてくれる日を…楽しみにしているでござる』

（などというやり取りがあつて奇跡的に俺が生存していたとは誰も思つてはいまい！

マズイぞ？敵に情けをかけられた上、今の今まで入院し連絡もつかなんだ事がばれれば…）

間違いなく肅清される。自分の末路が容易に見えた。

(ヤバイヨ。どうしよう！死んじゃおっかな？死んだ方が楽じゃね！?)

次第に、泣きすする声が叫び声へと変わる。挙句同席していた松平が身を乗り出し

「ブワカヤロオオオ！ 年寄りより先に逝っちまいやがってエエエエ…」

と叫びだす始末。

(ヤメテ！！どんどん出づらくなるウウウウ！！でもとつつあん。そんなに俺の事を)

しかし、そのささやかな感動も次の一瞬で冷める。焼け石に水とはこの事だと。

「キスケエエエエ！！ 俺を置いてかないでくれエエイ！！」

「キスケエエエエ！！ また一緒に遊ぼうよオオオオオオオオオオ！！」

[illegible]

セツトと言うより、山崎の遺影のほう明らかに小さい。どう考
えてもついでだ。

（いくら地味だからってそれはナイ！！つーか何で仏前に二口を！好きでも何でもねえし！！）

すると、坊主が木魚を叩きながら、二口のコップを手にとって飲みだす。

（オイ坊主ウ！！ 何俺のニロちびりちびり飲んでんだよ！ 別に
好きじゃねえけどヤメロオ！！）

ピリリリリ：突如なる携帯のコール。

（オイ！携帯切れエ！！）

「何？あー……今とつあんの犬の葬式。」

（山崎の葬式だと言えエエエエ！！）

ジャンプを読みながら足を崩す隊士もいた。

（お前はジャンプをしまえエエエエ！！）

「何で犬の腐れ葬式に私が……ネコ派なのに。」

（どっち派でもいいーよ！！オメーの趣味なんかー！！）

いつの間にやら死に装束に着替えた山崎。ミントンラケットを構え、取り出す。

（ふざけやがって…人の葬式何だと思ってんだ！ 目に物見せてやる、罰当たりどもめ！！）

その時。山崎のもくろみは空しくも砕け散った。バズーカに吹き飛ばされて。

「ギャー！！山崎がバケて出てきたアアアア！！」

「局中法度十二条…マガジン以外の漫画 局内で読むことなかれ」

聞きなれた懐かしいバス。

「局中法度十七条…会議及び重要な式典の際は携帯の電源を切るべし。

局中法度四十五条！ 死して尚化ける事なかれ。武士たる者潔く成仏すべし

テメエ等全

員、士道不覚悟で切腹だ！！」

「「「「「ふ、副長オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」
「「「「「」

泣き叫んで喜ぶ隊士。戸惑う土方を遠い目で眺める。

（トシ。お前は俺を真選組の魂なんて言ったがよオ。

奴等にとっちゃお前もかけがえのない
魂なんだよ。）

「どうだい、恋歌。お前も少しは素直になって行って来たらどうだ

「？」

「何の事です？ 私は何時でも素直にしておるつもりですが。」

こうして真選組に無事、平穩が戻ってきた。

思いをする事になるのだが。

最も約一名、死ぬほど恥かしい

F
i
n.

「死者はちゃんと弔ってあげよう。化けて出てくるよ」(後書き)

書き上げてから思った。

「しまった。コレ、第二部の最終章にすりゃよかったんじゃない?」
と。

まあ遠い話になりますけどね。またソレ用に考えねばNARANU
!!

「その時はカッコイイと思っても、後から見ると恥かしい」（前書き）

スルー？あり得んな。この話を書いたにあのセリフを言わせたというのに！

今回うざったい恋愛小説になります！そして長すぎる。

「ざけんなよコノヤロー」と言う人はRun a way!

梨栖さん恋愛とかウブなのよ。ここ3年ほど妄想でしかした事ないのよ（´ω、`）

ん？何言ってんだ私。

「その時はカッコイイと思っても、後から見ると恥かしい」

今回、前回までの一件の報酬を払いに、恋歌は此処に来ていた。

幸か不幸か、銀時は外出中らしい。応接した新八がそう言っていた。

もう帰ろうかと、刀を手にとったその時だった。

「あの、須藤さん。藪からぼうですみませんが一つ聞いてもいいですか？」

「ああ。幸い今の私はかなり機嫌がいいからな。良い、答えてやろう！」

後に彼女はこの発言を後悔した。

「あの…須藤さん。車で土方さん説得してたじゃないですか。その時…えっと…あの…」

そこで新八の口調がもどかしくなる。

「何じゃ！侍なら用件はさっさと言わんか！！」

「あ、ハイ。えっと…」

しびれを切らしたかのように、神楽が割って入ってくる。

「もういいアル新八ィ。私が言ってやるネ。

恋チャンってマヨラーの事好きアルか？駄菓子屋であつた時言つたのってマヨラーの事アルか？」

この瞬間。背筋が凍る思いがしたと言う。

「What do you say（お前何言ってるの）？ Ah a
n？」

何かの聞き間違いだ。そうだ、そうに違いない。だって何も言っていないもの。

「二度も言わせるなヨ！ 恋チャンがマヨの事好きかって聞いているアル！！」

二度も聞いて、聞き違いだと思うほどエスケープ出来る状況ではなかった。

（バツババババババ、バレてるうううう！？ な、何で？ 何処で？
？ いつの間に！？）

「コレ見るヨロシ」

渡された紙切れには『銀魂く集合！真選組く』とその話のサブタイトルと内容が書かれていた。

「アレ？ これ終わってから配られるんじゃ…？」

「僕等みたいに、あんまり出番ない人間は毎話ごとに配られるんですよ」

「助かるわー。何せチョップ前後の記憶が……お、我ながらカッコイイ事言うなー……」

そこには確かに、自供しているセリフが書かれてあった。

「で、実のところどうなんですか！？」

「お前もマヨにやられたアルかー！？ 毎日三食マヨネーズアルかあ！？」

興味津々の目で見てくる子供二人。此処に銀時がないことだけが不幸中の幸いだ。

言い逃れも思いつかないが、自白はしたくない。こうなればやるしかない。

「あー。アレピン子じゃね？」

ソファーから立ち上がり、適当な土地を指差して言う。

「マジでか!!」

「どこアルか？」

「え、見えんのか？ソコソコ。」

と言いながら、身体をひねって出口へ急ぐ。

「ああああああ!! に、逃げたあああ!!」

「待てや小娘ゴルアアア!!」

こうして逃走劇が始まった。追いかけていくも、標的の姿がどん

どん小さくなる。

「は、速ッ!!」

「新八、お前はそのまま追いかけてるアルよ。私が先回りして足止めするネ。」

「あ、うん!」

こうして散会した事を、完全に振り切ったと思った恋歌は知る由もない。

10分後。彼等はまた万事屋にいた。逃走者が水浸しになって。もはや気力がない。

「で、あの、質問なんですけど……」

「はい……お二人の仰る通りで……好きです。惚れてます。もう首

っ丈です。」

10分前とは打って変わって、素直に容疑を認めた恋歌。

「神楽ちゃん。何したの。まさか……」

「私そこまで鬼じゃないヨ。恋チャンが勝手に噴水に落ちたアル。」

「いや、貴様のせいだから。貴様があんな事を……」

つい5分前の出来事を思い出しながら言った。

撒いたと思い込んだ恋歌。もう帰ろうと、噴水のフチに手を置いた時だった。

「おうマヨラー。こんな所で何してるアルか？ いっちょ前にデートアルか？」

「え……アッー!!」

神楽の言葉を聞きつけ、身を乗り出した時、バランスを崩して噴水の水溜りに落ちたのだった。

「そんで誰もいないとかホントにナイ!! 騙まし討ちなどヒド過ぎるわ!!」

「アンタが言うか!!」

バン! バン!! 二度に渡って叩かれた机。叩いた人間たちが痛みを堪える。

「まあ認める代わりと言ってはなんだが、どうかこの事は他言無用であって欲しい。」

銀さんが帰ってきたらそう言ってくれ」

きよんとした表情をした子供達。何故だろう。

「いや、いいですけど……知られたら何かマズイんですか？」

首を縦に振る。

「もし、そんな事が知れ渡ったら大勢の人間が悲しむ事になる。

局長とて私にこんな感情を抱かせるために隊士にしてくれたわけではあるまい。

こんな私を慕ってくれる隊士達も、知れば落胆する。隊内の士気も一気に下がる」

確かに自分の気持ちに背いて嘘をつき続けるのは辛い。

だが、自分の気持ちを押し通して真選組が壊れるのは多分もっと辛い。

「己の弱き心せいで大勢の人間が苦しむのは嫌じゃ。なら、私一人が辛い方がずっと良い」

その瞬間。恋歌の頭に、頭が四つの割れたかのような痛みが走った。

ゝその時はカッコイイと思っても、後から見ると恥かしいゝ（後書き）

コレはヒドイ！しかも次回に続くとかもつとヒドイ！

く恋をした時くらい、自分優先で事を考えろ！く（前書き）

例の熱狂的な土方さんの（ry。家・ごく近所。頻繁に遊びに来やがる&p;批判。

いい加減、私の堪忍袋の緒も限界だった。私は言ってやった。

「おまいは土方さんがテレで赤面した顔を見たくないんかい！！

ファンの風上にもおけねーなっ！（ん、）、ペツ」

一応謝ってくれた。私に勇気をくれた流御蔭様。アリガトウゴザイマス。

今回は短めです。ゴメンナサイ。

「恋をした時くらい、自分優先で事を考えろ！」

「「ぶわっかやろおおお！」」

頭が四つに割れた気がしたのは、新八と神楽の鉄拳をまともに受けたからだ。

「いでああああ！！ 何すんじゃお前等！ コレ半数以上の脳細胞が死滅してる……」

「さっきから何グダグダくだらない事言ってるアルか！？」

「そうですよ！！ アンタ何時からそんなに回りに気を配るようになったんですか！！」

「ガキが知ったような口……」

ぐわんぐわん揺れる頭を押さえながら言う言葉を遮って、新八は続ける。

「周りの意見・状況も気にせず！ 自分のやりたいようにやって！
ジャマする人間は残らず完膚なきまでに叩き潰す！！ それが貴女
でしょう！？」

自分の、戦いに対する持論が新八の口から出てきた。

「それは戦の話であってだな」

「一緒ですよ！ 恋愛も一種の戦争です！！好きな人のハート取ら
れたら負けなんですよ！？

肩書きや周りを気にするなんて……迷いのある剣を振るうのと同じ
です！！」

この小僧にもっともらしい事を言われて諭される。最上級の屈辱
だった。

「なるほど。お前が常に負け続けている理由がよく分かったアル」

「なっ！？」

だがしかし言い返す箇所がないほど筋の通った説得。それに。

戦と聞いて黙っていられるほど侍として廃ってはいない。

ごめん、局長。

ごめん、皆。

ミツバ殿。

申し訳ない、

僧。

今回ばかりは礼を言おう、チャイナ娘、メガネ小

だが、戦と聞いて持論を捻じ曲げるわけにも、自分に嘘をつくわけにもいかない。

刀を手に取り、腰に差し、出口に足を向ける。

また、追いかける体制に入る二人。恋歌は背を向けたまま口を開いた。

「もはや否定はせん。素直に認める。だが、銀さんも含めて他言無用で頼むぞ。」

まず初めに気持ち

を伝えるのは私の口じゃ。」

そうして、少女はまた大人になった

く恋をした時くらい、自分優先で事を考えろ！く（後書き）

李「そうして、少女はまた大人になった。……じゃねーよこの作者^{ボケ}！！」

だ、だってえ……他に言い締めくくりなんて思いつかないんだもおおおん！

李「何気にまた僕置いてきぼりになってんし！自覚あんの！？」

ある！ただネタは冷めない内にやる！それが私だ！！（ゝ・ω・
ゝ）

「スカートの中は男の浪漫というが必ずしもプリチーパンチーがあるわけではな

パンツじゃない！パンチーだー！！

くスカートの中は男の浪漫というが必ずしもプリチーパンチーがあるわけではな

フンドシ仮面。そいつは異様な容貌で夜の江戸を駆け抜ける。

真っ赤なフンドシで顔半分を隠し、ブリーフ一丁。市民にもなじみ人気があった。

綺麗な娘の下着を搔っ攫い、モテない男にバラまいてゆく。

そいつは以前に、捕まったはずだった。しかし、その男はまだ泥棒家業を諦めていなかった。

ある時、警備の隙をかくぐり、あれよあれよと務所を出た。

そして今日も元気に下着泥棒を繰り返していると言う。

その事件の担当をしていたのは、御月李麻だった。

だがこの時、この事件を真選組総員でとり行うなど誰も夢にも思わなかっただろう。

ある朝。いつもと変わらない、朝日が差し、眩さで少年の目が覚める。

その時少年の枕元にあったのは下着だった。それも女物の。

「こっ……これはまさか。フンドシ仮面のほどこしパンチー……！」

ここで李麻はある犯人の特徴を思い出した。

『綺麗な娘の下着を搔っ攫い、モテない男にバラまいてゆく』

「何で俺がモテない事が割れてんだアアアア!!連載始まってから隠してたのに!!」

もらい物を押入れに閉まってから叫んだ。

「祭りじゃい……あの変態仮面を血祭りにあげたるわアアアア!!
集まれ同志よ!!」

中庭。冗談半分で言ったつもりだった。しかし人がわらわらと中庭に集まってくる。

「李麻オオオオ!! まさかお前も。奴め許さん!!」

「やりましょう!! 御月隊長!!」

「こんどーさん……ザキ……おおう!! やってやろーぜ!!」

まあ中庭に集まった連中は判る気がする。ただ三名を除いては。

「で、なんでアンタ等がここに? 土方さん、沖田さん、ふくちよー。

つーか土方さんとふくちよーに至っては何でオソロのハチマキを?」

『断罪・拷問・打ち首!! 変態仮面!!』 と書かれた世にも恐ろしいハチマキを指差す。

「脱獄しても馬鹿な事するんですねィ奴^{やつこ}さんは。須藤さんからパンチー盗んで。

また土方さんに施しパンチー送るなんざ。俺は面白そうだったんで」

「あーナルホドそれで。じゃなかったらその二人がタッグ組む訳ないもんな」

「オイ。やる事は分かってるな。」

「おう。今までのイザコザを一切合財忘れ、今回限りは共闘する……相違いないな？」

取り合えず今のこいつ等を静めるには軍隊が何個必要だろうか？

そんな事を考えながら、各々トレーニングに当たっていった。

夕暮れ。全員、もう最終確認へと入っていった。

「それでは、今回奴を捕縛するための作戦を確認しておきます。

題して！『ドキッ☆アレなるはオナゴのパンチー！』と思いきや罠

だったよトホホ☆大作戦』」

『ドキッ☆アレなるはオナゴのパンチー！　　と思いきや罠だった
よトホホ☆大作戦』とは

？パンチーを吊り避けとく。待っとく。

？出て来たところを総員でとっ捕まえてガハハ

というシンプルで何の策もない作戦の事である。

「今回はふくちょーの全面協力のもとオトリに使うパンチーを提供
してくれました。」

「おう。コレを提供するぞ！」

そうして、恋歌の懷から出てきたのは真っ白な布だった。

「いや、シンプルすぎね？　　地味すぎね？　　白で無地ってアンタ…

…」

「まいったな。残りもこれと同じなのだが。だって見られないと思
って……」

「オイ！！　せめて勝負パンチーの一着くらい持つとけよ！　ねっ
！　土方さんっ！」

「俺に聞くなよ！！　娘の質重視なら形とかはどうでもいいんじゃない
ねえのか？」

「あの土方殿がそう仰せになっておるのじゃ。そうに違いはない。こ
れで釣るぞ」

そう言って白い布をハンガーに吊るし始めた。

「何若干喜んでんだ！！　褒められたと思ってんだろ！！　こんな
んじゃ釣れるモンも……」

言い切らないうちに、脇の隊士が異論を唱える。

「イヤイヤ御月隊長オ！　無地で真っ白だからこそそこに浪漫が…

…ガフウ!!」

程なくして、恋歌のとび蹴りが鳩尾にはまる。犯人との先頭前に、池に身が沈む。

「うるせえよ、変態が。テメエは一生叶わない夢でも語ってろ」

と、池に向かって唾を吐きながら、露骨なほどに蔑んだ目で吐き捨てた。

「スカートの中は男の浪漫というが必ずしもプリーチーパンチーがあるわけではな

今回、ネタがお下品でしたね。ゴメンナサイ。次回以降、もうしません。

く戦うメイドって萌えるよねく（前書き）

3Zだったら恋歌と李麻ってどうなるのかな？考えてみた。

李麻は学ランにウサギのTシャツ着ててく

恋歌はセーラーに学ラン（上着）を羽織っているのはどうだろう。
良くなくな？良くなくな？（ゝ・ω・ゝ）

「戦うメイドって萌えるよね」

あれからどれくらい待っているのだろう。

既に二時間は経っているはずだ。それくらい退屈な待ち時間。

白い布が風になびいているだけだった。

「ホラ言わんこっちゃない。やっぱあのショボパンじゃ釣れないんだって」

「ウサギ柄にするか？ウサギの血でウサギ柄に染めるか？」

鞘から除かせたほんの少しの刀身。その目は至って本気だった。

「ナマ言ってスイマセンっした!!」

その時、屋根くらいの高さからストンと誰かが落ちてくる。

屋根から隊士は降りて来まい。そなるとその人物の正体は一つしか考えられなかった。

「光あるところに影がある。一つ人よりハゲがある

パンツのゴムに導かれ、今宵も駆けよう男浪漫道、怪盗フンドシ仮面！　ここに見参！！」

「来たがったなド変態が！！　皆ア！武器庫へ急げ！！」

李麻の指示で隊士達は武器を取りに行く。そして李麻は近藤と山崎の襟元を掴んだ。

「取り合えず食らえい！！　ゴリラロケット&mp;ジミーロケットエエエエツト！！」

わけが分からないまま投げ飛ばされた二人。そのままフンドシ仮面に突っ込んでゆく。

を下さん!!」

という、その男の背後には武器庫に大量に積んだジャスタウェイの山があった。

「「「!?!」」」

これでは迂闊に行動できない。ヘタに刺激すれば屯所が焼け野原になる。

いや、屯所だけで済むのだろうか？　とにかく真っ向勝負など出来そうにない。

四人は円陣を組んで作戦会議に出た。

「どーする気じゃ？　あいつプロの変態だよ。じゃなきゃあんな理由で脱獄しないもの!!」

「落ち着け！　いつか必ず隙が出来る。そこを叩けば何とかなる」

「隙なんてねえよ！　仮に隙を作るとしても相当上手くやらないとムリだよ!!」

「俺にいい案がありやすぜ。土方さんが説得役に回って奴の注意をひきつける。」

その隙に残りで捕まえにかかるんでさア」

土方を見捨てて逃げる。という案が出てくると思ったので円陣内では沈黙が流れた。

「沖田さんにしてはまともな作戦が浮かんだね。」

「どこが!？ 完全に面倒役俺に押し付けたいだけだろうが!!」

「刀三本で構えてりや大丈夫でさア」

その発言で何か連想したのか、恋歌が手の平を拳で叩く。

「それだけでは弱くないか? どうじゃ、 緑のバンダナと腹巻も添えるのはどうだろう

ついでに眼帯もして『レッツパァリィ』と言えはどうだろうか。間違いない注意の的じゃ!」

「お前等俺をどうしたいんだよ!!」

とか何とか喧騒を繰り返している間に、李麻が説得役に回っていた。

幸か不幸か完全に奴の注意は李麻に向いている。

「よし、今じゃ李麻!!^{ダブルアール}WRジャバラ……って李麻が説得役だったの」

ショボンとした時、何故か屯所のしげみの隅で縮こまっている土方。いや、コレは……

恋歌は何も言わず、ただ土方の首根っこをガツと掴んで振りかぶる。

「この場面で出て来んじゃねえよ、このヘタレオタクがああああああ
あ!!」

「何で拙者だっ!!」
あああああああああああああ
あ——……」

説得という名のパンチ―談義に盛り上がっていたフンドシ仮面の右頬にぶち当たる。

フンドシ仮面は遠のく意識の中、李麻が抱えていた紙切れを辛うじて読み取った。

『引っ掛かったなバカめ』と。

その後、江戸はおろか、この地球上で彼の名を聞く事はなくなっただという。

く戦うメイドって萌えるよねく（後書き）

先生、ゴールインをさせたいです。

先生、チューをさせたいです。

先生、愛の抱擁をさせたいです。

先生、デートをさせたいです。

先生、愛の告白をさせたいです。

先生、恋人つなぎをさせたいです。

先生、ケンカ以外で二人きりでの会話がさせたいです。

先生、一番ウマウマな恋愛シーンが知りたいです。

先生、作者も恋がしたいです。（イケメソ・漢前限定）

「そんな事させたらそこで連載終了だよ」

く身長ネタやる時は慎重にく（前書き）

「身長ネタやる時は慎重に」

今日は健康診断日。

いつもの食堂にはない、医療的な器具。身体測定から色々、隊士達が列をなす。

自分の腹部を必要以上にさする者、なにやら白濁色の者を喉に押し込む者。

中には喫煙に関する問診にえらく時間を費やした者もいたり、賑わった光景であった。

「ザキ。聞いてよ。去年と身長変わってないんですけど!! 何で!?! あんなに食べたのに!!」

身長と体重が書かれたカード。身長の子に指を差しながら言う。

「大丈夫ですよ、隊長。俺も。何も変わりませんでした。ミリ単位

でしか。」

「だははー。どんまい。じゃあ、今あの女を視界に入れてる僕の気持ち、分かる？」

ピースなのか数字の二なのかは定かではないが、近くの隊士にVサインで話しかてけた。

至極嬉しそうに。

「ええ。鮮明に分かります。どうです？　グチを肴に昼飯外で……」

「あー、ゴメン。午後から巡回だわ。あの女と。^{アマ}」

お花畑と、火の玉。両極端のオーラが同じ警察から放たれていた。

「のどかだねー……」

「のどかだなー!」

同じ言葉でも随分声色が違う。どうも女は体重が2kgほど減ったらしい。

やはり先程のVサインは数字の二だったのだろう。横目で隣を見る。

(しかし。まさかこのアマが土方さんに惚れ込んでるとはねえ……ん? 何で知ってんのって?)

知らないと思ったかブワッカ!! 神楽から聴取済みじゃボケエエエエ!!

あそこまで見せたがらないって事は秘密にしときたい筈だ。盛大にバラしたる!)

同じ頃、女は真正面をボンヤリ眺めながら物思いにふけっていた。

（まさかあのチャイナ娘。口止めより先に李麻に話しておると思わなんだ。誤算だった。

帰る前に厠借りた時にあのチャイナ娘がお前に言ったとメガネに言うていたのを聞いた！！

まさか貴様が全てを知っておる事を知ってとは思うまい。さて何時消してやろう）

のどかな青空の下で、広がる二つのはたから見たらどうでもいい曇天。

（落ち着け。平静を装ってシッポを掴め。相手が相手だへたにいつたら間違いなく……）

（バラす前に殺される！！）

（殺す前にバラされる！！）

「そ、そーいえばふくちよーって体重でえらく喜んでるけど身長はどうなの？」

「あ？あー、そっちは変わらなかったなあ」

「あ、そーなの。あ、ねえ知ってる？理想のカップルの身長差って15cmらしいよ」

（マ、マジでかああああ！！何でもっと早く言わないのオオオオ！！？）

心では、あの時土方の記録カードを盗み見しておけば……と後悔しつつ口を開く。

「あ、そーなんだ。えー、でも何で今このタイミング？色恋にでも目覚めたか？」

「えー、いや別に？身長で思いついただけー」

（（野郎。眉の一本もうごかさねえ。絶対に悟らせない気だ！！））

「うっせーよあっち行けのこんのメス豚がああああ！！」

その時、何かがこちらに飛んできた。ぶつかった感触からして人

間だ。

直撃した恋歌はそう直感した。

く身長ネタやる時は慎重にく（後書き）

今回はちょっと長すぎましたね。ゴメンナサイ。

「フザケンナ！自重しやがれこのバカ！！」という人のためにも

今度からもっとコンパクトに書いていきますです。

く15cm差は正義なりく（前書き）

おととい、ネタ漁りもかねて「恋空」見ましたよー！

序盤からアッー！　ばっかだと思ってたら急に切なくなるし、泣けるし！

しかしどっちかが病気でそれをもう片方が看病で萌えるやね（＊、

ω、）

ラヴラヴ甘甘もいいが切ないのもまたイイね。

個人的にはおにゃのこが看病されてたほうが・・・おっと不謹慎。でも私はやらない！だって奴等、ビョーキとか絶対無縁っぽいもん！

「15cm差は正義なり」

前回のあらすじ。心理戦を繰り広げていた恋歌と李麻。その最中何者かが飛んできた。

「いだだだだ……」

「いってて……すいませ……」

「「あー!!」」

赤フチ眼鏡をかけ直して声を挙げる少女。

「貴様は何時かの変態ドMストーカー野郎!!」

「え？ 知り合い??」

初めて見る顔に驚きを隠せない李麻。

「貴女こんな所まで何しに……まさか銀さんを狙って!! この二股女が!!」

「ちげーよ、巡回じゃ!! 男とは思ってねえよあんなプー太郎!!
つか……アレ？」

今、何と？ 二股？二股女？ 恋歌は自分の耳を疑った。まさか割れてる？

仮に知られていたとしても二股ではない事には変わりないのだが。

「そうよ！ 報われないながらも貴女には銀さんという想い人がいるでしょう!？」

なのにこんな……どこにでもいそうな特徴もない男なんかと掛け持つて!!」

突きつけられた写真には確かに先週、土方に働きぶりを評価され

赤面している自分がいた。

しかも恥かしさのあまり猛ダッシュでその場を後にする写真まで。

まさかこの女、あれからずっと自分の事をつけ回していたとも言うのか!?

だとしたら相当ストーキングされ続けていたという事になる。

そう、恋歌は気付いていなかったのだ。あの日万事屋にいた天井裏のネズミの存在を!!

「あれ? 何で土方さん相手に赤面? あんなに仲悪いのに」

追い討ちをかけてくる部下。弱り目に祟り目とはこの事だ。

(イカンイカン!! ここで顔色を変えるな。何が何でも絶対に切り抜けろ!!)

その時、頭脳に神様が降りてきたのを感じ取った。

「違うぞ。これは体質じゃ。マヨラーに触られつと拒絶反応出るんだよ。なっ。」

（何だと！？ コイツ、ここに来て忘れ去られてた初期の設定持つて来やがったアア！！）

しかしそれは紛れもない事実。李麻は首を縦に振るうしかない。

「うん。そうなんだ。因みにマヨに触ったら吹き出物出るんだよ」

（くそっ！僕もすっかり忘れてた。 おねーさん！ もっと確たる証拠は無いですか？）

「ところで知っておるか、メス豚。カップルの理想の身長差って15cmなんだと

15cm差カップルって超ウケるらしいぞ。絶対結ばれるらしいぞ」

「え、ホント！？」

（わ、話題変えやがったアアアアア！！ 野郎、奴のガサ入れ一切を封じやがった！！）

（ウブワツハツハア！！ 甘いんだよ小僧めが！！）

二人の目はもはや人の目をしていなかったという。ただの醜い化け物の目だ。

しばらくメモ帳に筆を走らせていたが、パタリと止まってそれらを地面にたたきつける。

「15cmどころか10cmもないじゃないの！！ どうしてくれるの！？」

「「しらねえよ！！ オメエ一人で何とかしろやクソが！！」」

声を重ねて罵倒混じりのツツコミを叩き付け返した。

「偉そうに言ってるんじゃないわよ！ だったら須藤さん？ 貴女はナンボのモンなのよ」

「162cmじゃ」

一度は叩きつけたメモ帳たちを拾い、再び筆を走らす。

今度は、地面ではなくコチラに叩き付けられる。

恋歌は間一髪で屈み、李麻の顔面に直撃して倒れる。

「え！？ 何！？ 何事！？ 私は何もしとらんぞ！！」

恐る恐る手を伸ばし、メモ帳に目を落とす。見れば銀時に関する事が掲載されていた。

そういえば近藤も同じ様なメモ帳を持っていた気もするなどと考えながら目を通していった。

まあ今の状況からして見るべきは身長欄なのだろうが。

「ひゃくななじゅう……ななcm？ それがどうしたと……あっ」

咄嗟に自分の背を引けば、ぴったり理想の数字が答えになる。つまりそれに腹を立てている。

そういうことらしい。

「いや、ちょっと待てメス豚。今の今まで知らなかったただけだから。興味ないから。」

殺気立ってる彼女に向かって何を言っても無駄だ。右足を軸に半回転する。

「巡回残ってるからまた今度なー!!」

二、三歩。地面とは違う感触を感じたが、構わず走った。命が危ない。

「ま、待ちなさい!! どういうつもりで発言したのか洗いざらいはきなさい!!」

彼女もメモ帳を直撃して倒れた李麻を踏み越えて追っていく。

無数の足跡がついた李麻はおぼろげな意識で確信した。

「女の嫉妬って……超コエエ」

く15cm差は正義なりく(後書き)

BLEACH見たお!

あの野郎……やりやがった。ハリベル様をやりやがった。
一度ならず二度までも!! ゆっ、ゆるさん!!

く祭りを邪魔する悪い子は神様にたたられるよく（前書き）

い……いい加減バトらないと！

いい加減バトらないとただの恋愛小説になってしまう！（。；；）

「祭りを邪魔する悪い子は神様にたたられるよ」

蝉時雨と異常な熱気で鬱蒼とした公園の下、ブランコが二つ揺れていた。

「神社祭りィ？ 明日の？」

「そうネ。私、万事屋トリオと姉御と一緒に行くアル。お前も来るヨロシ！」

揺れるブランコに身を委ねた少年少女が、そんな事を言っていた。

「いいよ！ 丁度僕も上様の護衛で行かなきゃなんないし。抜け出してくる！」

だが少年は気付いてはいなかった。その祭りに忍び寄る影に。

その日の晩。明日の手筈を整えるための会議に隊長格が集っていた。

李麻はあまり真剣に会議をしたことがない。

土方の声も右から入れば左へと。左から入れば右へと。ちくわのように抜けるだけ。

「……以上だ。將軍にかすり傷一つつけようものなら俺達全員打ち首獄門だ。心してかれ。」

「土方さーん。僕マブダチと遊ぶ約束したんだ。空き時間遊んでいい?」

「お前人の話聞いてたア!? 空いてる時間なんかねえよ!」

「でえー!? 何とかして産めた時間掘ってくれよう!! 祭りで仕事するだけとかマジないわ!!」

「お前の亡骸入れる穴掘ってやろうか!! 鬼兵隊が乗り込んでくるかもしれねえんだぞ!!」

その言葉に広間はにわかにざわつく。初耳だったか。後味の悪そうに頭を掻いた。

「コイツはまだ未確認情報だが、どうもその祭りに奴等の影が尾をひいてるらしい。

あくまで噂だが用心するに越した事はねえ。併せて心するように！」

はい！　きれのいい返事で会議は幕を閉じた。

様々な大きさの宝石がちりばめられた夜空の下で祭りは行われた。

わたあめ。りんごあめ。射的。町は賑わい、楽しそうだ。

自分も楽しみたかった。

先程抜け出そうとしてぶたれて出来たタンコブを抑えつつ、李麻

はそう思った。

「ねーねー土方さぁん。……ふくちょーは？ サボリ？ ひいき？」

恋歌もここで待機していたが、随分前から姿が見えない。

「『たこ焼きと鯛焼きが食べたい』だと。いいご身分だぜ全く」

そういつて高みの見物を決め込んでいる将軍に顎をしゃくった。

などといったら、真選組の制服を着た女が、長い髪を揺らし
てこっちへ来る。

「おーう。待たせたなぁ」

近づけば、鯛焼きの尻尾をかじりながら帰ってきているではない
か。

「遅エぞ……って何食ってんだアアアアア！ それ將軍の！！」

「これは毒見じゃ！！職人達の中に敵が紛れ込んでたらどうする！

「！」

たこ焼きが刺さった爪楊枝つまようじを親指と人差し指でつまみながら言う。

「お前が食いたただけだろが！！」

「何？ 羨ましい？ 鯛焼きたこ焼き食べたいんでちゅか……！！」

不意にたこ焼きが恋歌の手の平からすべるように落ちた。

落とした本人は倒れこんで、悶絶している。……まさかホントに毒が入れていたのか？

駆け寄って、真相を詰め寄った。

「あー。うー。おー。」

「『体中が痒い』？ 毒か？ 変なモンでも入ってたか？」

「アンタ辛子入りマヨネーズかけたでしょ。多分それが反応したんだよ。大丈夫だよ微量だし」

夜空に向けて一際美しく輝こうとする花火。

仰ぎ見ているにしてはやけに近い。まるでコチラに向かってきているようだ。

それが花火と言う名の爆発で、火の粉が降りかかっている事に気付くのに時間はいらなかった。

「同窓会言ったら一人くらいは「あれ？誰だっけ？」って人がいる」（前書き）

昨日、ワガママを聞いてもらって憧れの玖月様とお話することができました！

想像以上に大人な方でした。だからあんな素敵な小説がかけるのネ（ω、＊）

妄想の丈をぶつけたら「ネタにしてもいいですか？」とのこと。

色々、現実にして頂けるそうです。皆さん一緒に全裸待機しましょうネ☆

「同窓会言ったら一人くらいは「あれ？誰だっけ？」って人がいる」

度が過ぎる花火は、將軍の下にも行き届いていた。警備に当たっていた近藤と沖田がむせる。

「上様ア！ お逃げください！！ でないと輩が……」

將軍の背後を護るようにながら近藤は言う。しかしもう遅い。

煙に紛れて何本もの切っ先が近藤達を襲う。間違いない。鬼兵^{やつ}隊だ。

土方たちが警備に当たっていたところも例外ではなかった。

「だらっしゃあああああ！！」

李麻の飛び蹴りを正面からうけた輩は、そのままボウリングの球のように仲間を倒していった。

しかし、意外だったのが、真選組が警備に当たっていない場所から輩が飛んできた事だ。

「ヒエエエエ！ つ、強エエよ。何なんだよあのチャイナ娘エ！！」

しばらくして少女は李麻を視界にいれ、互いにこくりと頷いた。

「「祭りの邪魔する悪い子は……だれ……だれ……」」

彼等は後に書かされた始末書に「勝てる気がしなかった」と書いてあった。

「取り合えずあの二人なら軍隊何個あっても大丈夫だろ」

「ああ」

煙に紛れて、微かだが、「ガシャ！」という音がした。銃の音。

鬼兵隊で銃使い。彼等の知る限りでは一人しかいない。「紅い弾丸」だ。

煙から不規則に弾丸が飛び出してくる。だが方向は一定に限られている。

「そこか！」

恋歌は迷いなく飛び出し、紅い弾丸の頭を踏み越えてゆく。

「ちょっと待つッス！ 逃げる気ッスか！？」

一度、見たような顔がそんなことを言っていた。

「悪いが一度勝った相手には用ないんで」

背後から飛んでくる銃弾をジグザグに避けて建物に隠れた。

障害物さえ隔てていれば銃の猛攻など、恐るるに足らない。

しかしどうにも引っ掛かる。あの弾丸は何だ。まるで当てる気が一向にない。

以前戦った時はあと1秒遅れていたら…という弾が何発かあったが今回はそれがない。

それどころか急所に気を付けずとも楽に避けられた気がする。

あれから月日も経つ。彼女の腕が落ちているとは考えにくい。となる……

「……さすが。相変わらずいいカンしてるわ」

耳元で不意に囁かれた声。咄嗟に間合いを開けた。バカな、気付かなかったなんて!!

「でもちよーっと遅かったね♪コンニチワ! 鬼兵隊の新しい幹部の者ですっ!」

黒髪に、黒ぶち眼鏡。白刃を帯刀した眉目秀麗の男。忘れるはずはない。

「久しいな梨本。てっきりあの時死んでくれたかと思うておったのに」

梨本^{なしもと} 圭吾^{けいご}。派府意右無の頭領。今のセリフから「元」とつけたほうがよさそうだが。

剣を構えて、一気に斬りかかる。ヤレヤレと首振りをして彼も刀を手を取る。

しばらく剣と剣の話し合いが続く。だがこいつ、以前に比べて遥かに強い。

修行したのか、それともあの時、全力ではなかったのかは分からないが。

「何かさー、捨て駒を見極める判断力と人の心理知識の能力に長けてるなって言われて

晴れて憧れの鬼兵隊の仲間入りってワケ。君のお父さんが死んでくれたおかげだよ！」

ああ、ゴメン。にくったらしいよね？ わざとっばい笑みを浮かべる。

父親の件はどちらかというどうでもいい。奴もあのくらい覚悟の上だったはずだ。

でなければあの時、自分と一緒に外へ逃げていただろう。

こいつと戦うのはこいつが生理的に気に入らないから。ただそれだけの事だ。

そんなことを考えていると、剣の振りが途中で止まった。捉えられて腕を掴まれたのだ。

しまったやられる！ 思いとは逆に、何か柔らかいものが唇に触れた。

一瞬何が起こったのか解せなかったが、梨本が自分の唇に舌を這

わせた姿を見て合点した。

当惑が怒りに変わり、回りの情景など、どうでも良く思えた。

「デメエエエエエエエエエ！　何しやがったアアアアアアア！
」

「あら？　もしかして初めてだった？　案外ウブ？」

大方片付いたのか、真選組の隊士の制服を着た男が近づいてくる。

「あらかた片付いた。もういい」と言うようにに羽交い絞めにされた。

タバコの匂いが鼻を衝いた。

「まあ祭りはブチ壊したしこんなもんか。来島さん待つてよー！」

そうこうしている内に、忌まわしき相手の影はどんどん遠ざかっていく。

無事を祝って打ち上がった花火の騒音に負けないくらいの大声が
夜空に響いた。

「同窓会言ったら一人くらいは「あれ？誰だっけ？」って人がいる」（後書き）

お疲れ様です。長かったですか？すみマセン^^；

玖月様に頂いたネタは……この小説の最終章にやろうと思います。
大したものでもないのに、引っ張ってすみマセン＜＜

ちなみに。本人は知らないけど人命救助と言う名のファーストキスは済んでいます。

第一部最終章をご確認くださいまし^p^

ゝそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらゐゝ前編（前書き）

皆様の友達にサブタイみたいな子いませんか？

悔しいですよね！！羨ましいこと山の如しですよね！！（ゝ・ω・

ゝ）

私は太る上に運動しないからアニメ91話の神楽ちゃん達状態ですよ>><

久しぶりにプロットナシで作ったんで普段以上にgdgdです><

くそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらいるく前編

昼前の公園。少年少女がシーソーで遊ぶという実に微笑ましい光景が目映る。

ただ、少年の方に一向に落ちる気配がないのだが。

「神楽アー？　どうしたのお？　地面蹴り上げてくれる？」

そう言われて神楽と呼ばれた少女は、私たちの知っているいつもの彼女の姿ではない。

縦にはさほど大きな変化は見られないが、横に異常に大きい。

不意に、少年の方にシーソーが落ちた。奈落の底に突き落とされたかのように。

少年は一瞬目を閉じ衝撃に備え、しりもちを突いた。尋常ではない痛みが襲ってくる。

次に目を開けたとき、一番最初に映ったのは折れたシーソーだった。

ちょうど彼女が乗っていた数歩分手前で折れている。

「アレ？何かデカくね？」

「遅くネ？」

事態に気付き、最初に訪れた場所は志村家だった。

自分達の姉のような存在である彼女ならきつと何か良い方法を知っているはず。

そう、やせられる方法を。しかも楽しんで。だが、その期待も鮮やかに裏切られた。

「アンタもずんぐりむっくりじゃねえかあああああああああ
ああああ!!」

神楽と同じ。そう、今の彼女もまた私たちの知る志村 妙ではない。

「ああああ李麻君。一目見るなりそんな失礼な。串刺しにされたいの?」

「スンマセンッした」

薙刀突き出された以上、もう何も言えないが酷すぎる。

「李麻。お前の知り合いに痩せてる人いないアルか?」

「いや、多分僕の知る限りはいな……いや、一人いたわ」

夏だなんだで暴飲暴食しがちなこの時期、絶対に太り得ない人物。

すっきりとした端整な顔つき。無駄な肉のないスラリと伸びた手足。

細いくびれに、女性の丸みを帯びた腰つき。

彼女……改め須藤恋歌に『肥満』という文字は当てはまらないだろう。

「お願い恋チャン助けてヨ！ 私たち切実に痩せたいアル！！」

「悪いけどお願い出来るかしら？」

「ま、私はこのおバカさん達を笑いに来ただけなんだけどね」

「ガリガリノブス面拝メルツテ聞イテ、来テヤツタンダ。アリガタク思エヨ、コノヤロー！」

同じ様に横に成長した、猿飛とキャサリンまでもが屯所に押し寄せてきた。

「いや、一向に構わないけれど……何が起こったか説明してもらおうか

今までの話の流れで何故メス豚と化け猫が来ているのかも含めて」

「そっちのメガネの人はお妙さん屋根裏から聞いたって。化け猫は

『ソコノクソガキ迎エニ来テヤツタンダヨ!』だって」

承諾はしたものの少し迷った。自分が普段やっているトレーニングを彼女等にさせるのか？

だが面子を見た限り、ちょっとやそつとではギブアップしないと信じ切り出した。

「よし！ ついて来いそなた等！！ 題して

『恋ちゃん逃げて超逃げて！！（脂肪的なものから）トレーニング』を開始する！！」

これで、痩せられる！ 四人の目には灯が点いていた。

「ふくちよーってネーミングセンスないんだね」

「今付けた」

ゝそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらいゝ前編（後書き）

後半に続く。

キャサリンって読みづらいですね。でも雰囲気重視でいくのでご了承ください。

ゝそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらいゝ中編（前書き）

トレーニング方法は「MA●OR」の夢島のアレをベースにしたものですゝpゝ

ゝそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらゐゝ中編

太陽が顔を覗かせた早朝。細い影二つと太い影四つが地面に伸びている。

彼女等は、江戸随一の高さを誇る山のふもとで静かに並んで立っていた。

「これからそなた等には私が普段行っておるトレーニングをそっくりそのままやってもらう。

手始めに『心臓破りの山』で手並拝見いたす。手元のトレーニングカリキュラムを見せてくれ」

その分厚い紙の束。該当ページにはこう書いてあった。

恋ちゃん逃げて超逃げて（略）トレーニング。『心臓破りの山』

・目の前の山を登山してすぐ下山し10分の休憩を挟む。コレを1セットとする。

・一日一時間2セット行う事（日増しに1セットずつ増えるのでそのつもりで）

・一時間で2セット以下だった者は朝飯ヌキ

先程までの覇気は、見事にしぼんでいった。

「つまり、ノルマ達成には20分で山を上り下りするって事!？」

冗談じゃないわよ!！」

最もだ。猿飛以外の人間も、何故か来る羽目になった李麻もそう思っていることだろう。

だが、恋歌はこう言っただけだ。

「出来る。いくら太っておるとはいえ、そなた等の身体能力は超人並。

中もお前の忍者としての能力なら4セットは楽にこなせるはずじゃ!」

「コッ……コーチ！」

「いや、何でコーチ？ さり気に皆の倍やれて言われてるんだよ
アンタ！？」

「コーチがそう言うならきつと出来るアル！」

「そうね。頑張りましょう！」

「背二腹ハ変エラレナイシナ」

李麻の言葉に耳を貸す者などもはや誰もいない。一斉に駆け上り
だした。

全員朝食にありつけたものの、食欲がなかったのは内緒である。

恋ちゃん（以下略）午前トレーニング『兔の山登り』

・足をテープでグルグル巻きにする（その後マーカーで印をつけるので外すとばれるよ）

・その状態で飛び跳ねてふもとの階段を上り下りする

・尚、テープをはがせば昼飯抜き

「ふくちよー。何時そんな事してた訳？」

「仕事がある日は早朝くらいだな。非番の時にするやつじゃ」

ぴよんぴよこ跳ねながら階段を駆け上がる様はまさに兎のようだった。

あれから去ること五日。

初日はひいひい言っていた彼女等も今では黙々と成すことをこなしていく。

地獄のトレーニングを共にこなしてきた彼女等には友情に似た仲間意識が生まれていた。

それも仲の悪かった連中ほど。ジャ●アン映画版原理である。

そんな中、彼女等のコーチは彼女等をいつもの山のふもとに集めた。

訝しげな顔を並べる彼女達に何も言わずに「美」と書かれたバツジを配る。

そしてこう言った。

「今からやってもらうのはいわばサバイバル。

この五日間修行を行ってきた仲間を蹴落とさねばならない。カリキユラムの123ページ」

彼女等はまた、ページをめくる。該当ページにはとんでもない事が書かれていた。

最終トレーニング『美のサバイバルゲーム』

- ・全員に「美」と書かれたバッジを配る。
- ・どんな手を使ってもいい。二日以内にバッチを四つ揃えて私の元に提出。

・提出したものにのみ、仕上げのトレーニングを教授する。

(これは……つまり！)

(自分か完璧な美を手に入れるためにすべきことは……)

(こいつ等を蹴落とし、バッジを頂き、あの女に差し出すという……)

(究極ノサバイバル)

この瞬間。彼女等が築いてきた絆が音を立てて崩れ去った感じがした。

ゝそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらゐるゝ中編（後書き）

昨日「不思議探偵団」見ましたおゝpゝ

タイムカプセルは感動したけど、印象に残ったのは「マヨネーズ専門店」

粉状のマヨとかwwwしかも通な奴はマヨに乗せするらしいぜ。

冗談抜きで吐き気がしたさ。つゝかなんという土方さんホイホイゝ

pゝ

ゝそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらいゝ後編（前書き）

玖月様が私の妄想を書いて下さりました。何という俺得かゝpゝ

「そんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらいいる」後編

サバイバル。それが最後のメニュー。だが、一向として動く気配がない。

昨日の時点で築かれた友情にも似たものは綺麗に崩れ去っているはず。

四人とも、一刻も早く他の奴等からバッジを奪いたいはず。

「ふくちょー。あいつ等一向に動かないんだけど。もう一押ししたら？」

「今忙しいから後にしろ！！」

ジャンプに挟んだ女性ものの雑誌に目を通しながらそう言った。

「てっ手料理でイチコロ！？マジでか今度やろっ」と

などと雑誌の活字に相槌を打ちながら。

()()(動きづらい)()()

いくら仮初めの仲だったとはいえ、あのトレーニングを共にしてきたのだ。

奇妙な連帯感をブチ破るにしても、何か正当な理由が必要だ。

まずはバッジの確保より、野獣共からバッジを遠ざけるのが妥当。

「私はいいわ。あのガキの下で教わるなんて真っ平御免こうむるわ。

貴女達で勝手に奪い合ってれば？」

そう言って、バッジを投げ捨てる猿飛。桃色のバッジが音を立てて地面に落ちる。

（バカのくせにプライドだけは一級品ですもの。さあ、乗ってきなさい！早く！！）

「私も同感アル。姉御達を蹴落としてまでキレイになりたいとは思わないネ」

「私も。恋ちゃんには悪いけれど」

「私モデス。誰ガアンナ挑発ニ乗ルトデモ思ッテンノカ！アノクソガキガ！！」

黄色。水色。緑色。残りのバッジもカラんと音を立てて地面に落ちた。

（かかった。でも予想以上に効き過ぎた。もうトレーニングが終わる勢いじゃない

私から切り出しといてサバイバル再開を持ち出すのは不自然。第一恥かしい）

（バッジを根こそぎ奪うためにさっちゃんの案に乗ったけど逆効果だったアル。

まさかキャサリンまで乗ってくるとは思わなかったネ）

（誰か再開を切り出してくれないかしら。私はキレイになりたいの。誰か察しなさいよ）

（テメー等早く再開サセロヨ。ホントハ皆心ハ一ツノハズダローガ）

先程よりも一層手を出しづらくなったこの状況。打開策はないのか。

刻限も迫ってきている。手を出さずにハイ時間切れ。という事態だけは絶対避けたい。

もうこの際格好がつかなくたっていい。地面に手を伸ばしたのはキャサリンだった。

「「「なっ!?!」」」

「アバヨ、テメー等！ マア、ブサイクが痩セテモブサイクダカラ！」

「待てゴラァー!!」

「オメーにだけは言われたくないんだけど!!」

後を追う三人。しかし、たるんだ腹は重荷以外の何者でもなかった。

その時、一瞬の残像がキャサリンのすぐ横を通り去った。バッジが四つとも持って行かれてる。

「ニュッ!？」

残像は神楽の傍でとまり、バッジが彼女の手渡る。

「李麻君!!」

（まさか、あのアルアル中華娘……組んでたのね!？）

（ブハハハハ！ 考えてみろヨ。今回参加する必要ない李麻が参加している訳を!!）

（こういう時の為に決まってるネ!）

その時、神樂の右手がヌメツとした感触に包まれた。豆が発酵した匂いが鼻を突く。

納豆だ。納豆に絡みついたバツジが、猿飛の手に収まる。

「バカね！　あなた達が手を組む事くらい関係上読めてたのよ。

私がその対抗策を考える努力をしなかったとでも思ったの？ガキg
……ブフォー！！」

猿飛の顔面がダークマターに包まれる。そして納豆付きのバツジは妙の手に渡った。

「フフツ。狩りは獲物を狩った瞬間が一番危険なのよ？顔洗って出直して来なメス豚が」

もはや醜いだキレイだなどという次元ではない。全員一斉に妙に飛び掛る。

その時だ。日落ちの鐘が、鳴り響く。すなわち、タイムオーバーだ。

ゝそんなに食べて何で細いの？て子が友達の中に一人くらゐゝ後編（後書き）

ハリベル様がいなくなってテンションガタ落ちの中BLEACH見たお！

やあっと一護出てきたよ（。D。）。危うく存在自体忘れるトコだった。

ルキアちゃあああん会いたかったあああああ（つゝ、＼、）つきメエWWW

ってヤミーの野郎……俺の嫁に何しやがるんだ！許さん！！

くものの取り合いに時、そんな時は漁夫の利を狙えく（前書き）

Give me NETA……そろそろ底をつきそうだぜジョニー……

そろそろキャツキャウフフな事があっていいんじゃないかしら？
いや、小説スタンスぶち壊す事なくね？ いや、ラブコメならセフセフ……

「ものの取り合いに時、そんな時は漁夫の利を狙え」

熱気のおかげでゆらゆら揺れるように見える景色。

ジャンプ。たった一つの少年雑誌を求め、コンビニの地に足を踏み入れた。

「しゃーせー」

他愛もないバイトの挨拶が歓迎してくれる。そのまま雑誌の羅列へいき、目を泳がせる。

汗を隊服の袖で拭う。長い髪をたくし上げ、首に冷気を送る。

五軒に渡ってずっと捜し求めてきた。聖書バイブルとも呼べる代物。

「あった!!」

「週刊少年誌ジャンプ」手を伸ばせば、自分の手より一回りくらい大きい手が現れた。

見れば毎週。ジャンプを買った時、よく話す同志とも呼べる存在だった。

「よう、銀さん。早速で悪いが、手を離してくれんか？」

「そいつは俺のセリフだ。ここは年上を敬ってだな……」

「いや、未来ある若者に譲ろう？」

などと言うやり取りでジャンプが右や左に引っ張られる。

多分、このままでは埒が明かないと思ったのだろう。銀時は口を開いた。

「あ、アレ土方君じゃね？」

「え？」

不意に聞えた言葉。反射的に店の外を見渡す。その時、身体とジャンプが引っ張り込まれた。

「アー!! おま……騙まし討ちはナイ……って、ん? アレお天気お姉さんの……」

「え!?! ウソ、どこどこ!」

その瞬間、今度は銀時自身もろともジャンプが引っ張り込まれた。

「お前もちゃっかりやってんじゃねえか。俺がファンなの知ってて……汚ねえわホント」

「純情な乙女心利用するのは汚くないのか?」

相当目立った言い合いだったのか、店員が駆け寄って、恐る恐ると言うように口を開く。

「あの……お客様方。申し訳ありませんが他のお客様の迷惑になるのでお静かに……」

「「ウルセエエエエ!!」」

「ハッひふッへほオオオオオオオオオオオオ!!」

拳二つの跡と共に店外へ吹きとばされた店員。だが、こんな調子では警察沙汰だ。

何より決着も着かないだろう。

「こうなったらこうしよう!! アレで決めよう!! ジャンケン!!」

「そうだな。じゃあ一回ジャンプ置るか。せーので置くぞ!」

せーの。声を重ねてジャンプをレジのカウンターに置いた。そして拳を固める。

「最初はグーからな。俺はパー出すわ」

「あーそ。なら私はチョキを出すことにしよう」

と言っている間に二人の脳細胞はひっきりなしに働きだした。

（まさか鵜呑みにするような馬鹿じゃねえだろ。だが、幸いこの女はバカだ。

俺がグーを出すと思ってるに違いない。てことはパーを出せば……）

（……とか考えておるのだろうなこのクソ天パは。そこまでバカじゃねーし。

すなわち高い確率でパーが出ると言うことじゃ。でも裏の裏をかかれては……）

一向にジャンケンをはじめない。異様な空気がコンビニ内を支配する。

（いや、だが万一チヨキを出されたら一巻の終わりだ。今週のジャンプは永遠に読めねえ。

ここはグーを出すのがいいのか？ いや、裏の裏の裏を書かれたら……）

（やっぱパーの方が良いのかコレは。いや、裏の裏の裏の裏をかかれたら……）

その時であった。コンビニの自動ドアが開き、山崎が姿を現した。

レジにおいてあるジャンプを見るや否や店員を呼びとめ言った。

「すみませーん！ このジャンプくださーい！」

「はい」

ジャンプが入ったレジ袋を提げて、嬉しそうにこちらを見る。

「あれえ？ 旦那に須藤さん。どうしたんです……ヒッ！！」

次の瞬間、コンビニ一帯に、断末魔の叫びが聞えたという。

結果、山崎は全治三ヶ月の大怪我を負わされ現在入院中とかなん

とか。

ゝものの取り合いに時、そんな時は漁夫の利を狙えゝ（後書き）

漁夫の利美味しいですへpへモグモグ

ゝミスかって一見涼しげだけど穿いてみたら結構むれて気持ち悪いゝ（前書き

先日、恋歌が玖月さん家の操お姉様のトコにお邪魔してきました。
アホの子恋ちゃんじゃない。操お姉様の可愛い妹だった！

ん？・・・まだ見てない・・・だと？

バックモーン！！URL貼ってやつからさっさと見て来い！、（#
、ダ）ノ

番外編～もう一人の女隊士～..http://ncode.syosetu.com/n4913n/

そして同じく玖月さん家の姫華お姉様が遊びに来てくれたよ。
コッチは・・・暇を持て余した時に見てくれればいいです。

番外編ゝ鬼の傍を舞う蝶ゝ..http://ncode.syosetu.com/n4912n/

くミニスカって一見涼しげだけど穿いてみたら結構むれて気持ち悪いく

鳴り止まぬ蝉時雨。視界をくらます熱気。そう、今は夏真っ只中のこの時期。

巡回しただけで、隊服が大量の汗を残らず吸い込む。それが肌にまとわりついて、気持ち悪いことこの上ない。

「暑い……。でも帰ってもムサイ野郎とじゃじゃ馬しかないって
どういふことなの……」

などとぶつくさ言いながら街を歩く李麻の隣で山崎が首を縦に振っていた。

「ホントですよ。ああ、暑いで思い出したんですけど来週の会議、『真選組の夏服を考える』って議題らしいですよ」

「マジで!?! やっとこの暑苦しい制服とおさらば出来ると!?!」

山崎の話では、「最近検挙率が低迷しているのはこの暑さに、あの厚着だからなのではないか」

ある幕吏の鶴の一声で全員分の夏服を作るには充分過ぎるほどの資金が下りたのだ。今回ばかりは幕府様様、と言うべきだな。李麻は素直にその幕吏に感謝した。

「じゃあこの際、女子用も作ればよくない？ 士気もあがるじゃん。」

「え？ でも誰が着るんです……あ！」

反論しかけた山崎も、合点がいつてそれ以上は何も言わないどころか目を輝かせていた。

そして、来るべくして来た会議の日。夏服採用はもはや決定事項。三番隊の案を重んじた「上着とタイがない、シャツとベスト姿（一般隊員はシャツのみ）」という結果で会議は終わりに向かっていった。

そう、御月李麻が動くまでは。

「あのおり、二番隊で考えた『女子用』なんですけど、聞いてもらっていいですか？」

それを着る人間など一人しかない。その発想にたどり着かなかった、若干名を除いた隊士が「おおっ」という表情^{カオ}を見せて、李麻に注目した。

「ミニスカとかミニスカートとか膝上10cm以上の丈のスカートとか!！」

「総じてミニスカじゃねーか。ふざけてんのかゴラ。何のメリット

「があんだよ!!」

その場を仕切っていた土方に胸倉を掴まれ、ふざけてはないよと宥める。

「メリットならある! 隊内の士気が上がるじゃない!!」

胸倉をつかまれたまま、真顔で答えた李麻。

「士気が上がるんじゃない。舞い上がんだよ」

「何か、すごい嫌がるよねー。何? ミニスカ穿いた人が傍にいたら意識して仕事に手がつかないって?」

「そっ、そんなわけねーだろ!」

掴んでいた胸倉をぱつと離し、まごついた土方。乱れた衣服を整えている李麻の顔つきが変わる。

「引っ込んでろやムツツリが」

普段の無邪気な言動とは反比例をいく、冷め切った表情と目つきで放たれたきつい一言。

「ムツ……ムツツ……つーか今ものすごい蔑まれたような……？」

「こんどーさんは賛成だよねっ？」

子供の表情に戻って、近藤に振る。

「いや、士気は上がるかもしれねえが……」

「もしかして感化されたお妙さんが『明日からミニスカ』ってなるかもよ？」

「よし採用だ！」

李麻の言葉が終わると同時に近藤はこう言った。

「局長オオオオオ！！ 貴方の英断に感謝！！」

「俺、アンタに一生ついていきます！！」

採用は必至。そんなムードの中、白い細腕が一本がおずおずと上がった。それは、今の今まで俯いてじっとしていた恋歌の腕であった。

「あの、スカートで素足を出すのは恥かしいので……せめてショートパンツにして下さい」

「
「
「
「
いや、大差ねーから」
「
「
「

ゝミスかって一見涼しげだけど穿いてみたら結構むれて気持ち悪いゝ（後書き

読み返して、何か単調すぎるような気がして書き方を大幅に変えてみますた。

読みづらいとかあったら言ってくださいまし。元に戻します。

あと金曜にうpするつつつたのに遅くなってゴメンナサイ。

土方さんてムツツリっぽくね？とかチラリズム派っぽいよね。

と、梨栖さん変態モード突入してしまったんですゴメンナサイぶたないで。

くフラれたら潔く引け！く（前書き）

先週ショッピング！に行つてまいりますた（ゝ・ω・ゝ）キリツ
何も買わずに帰ったんですけどね（↑オイ！）

いやいや、髪飾りとかピアスとか見つけたら「コレ恋歌に似合いそ
う」とか

洋服見つけては恋歌がそれ着てモデルポーズとつてるトコとか考え
てたら……

え？李麻？男モンは見なかったなあ。似合いそうな半袖パーカなら
あった。

くフラれたら潔く引け！く

巡回中。腹の虫を鳴かせながら、熱気で揺らめく江戸の街を歩く隊士がいた。腰くらいの長さの栗色の髪が、色白の手にすくわれて、かきあげられる。

「ママー。あのお姉ちゃん暑そうだねー」

「指差しちゃいけません！」

やってしまったのだ。巡回の日だというのに、須藤恋歌は朝早く作った弁当、飲料を買うための財布を忘れたのだ。

「やっちゃったなあ……やっちゃったなあオイ……」

などと呟きながら、公園のベンチに腰掛ける。今の状態ではとても午後からの巡回を無事終わらせる事は出来まい。

ふと隣を見ると、隣のベンチで金髪、グラサン、ピアスの穴だらけ、見るからに薄弱で将来性もなさそうな若者がうなだれていた。

膝にはコンビニ弁当が置いてあったが、箸のビニールにすら手をつけていない。恋歌の腹の虫は、コンビニ弁当ほしさに、より一層大きな鳴き声で主張した。

「これ……食う？」

そんな恋歌を見かねた若者が、膝の弁当を差し出した。

「彼女にフラれた？　また哀れな奴よのう。まあそのような身なりであれば当然か」

七兵衛しちべえと名乗る若者は、つい先月ほど前に恋人に愛想をつかされたい。

「でもアイツは……栗子は俺が脱糞しても引かなかったんだぞ！？」

「マジでか!?! いい彼女を持っておったのだな? 尚更何故にフ
ラれたのじゃ?」

「実は……」

すすり泣き混じりの説明で要所要所聞き取る事は出来なかったが、
要約すればこうだ。

二人、別々の道を行きつけになったのは、先月の遊園地での
デートだった。栗子という名の可憐な少女と、メリーゴウランドに
コーヒーカップ……それは楽しいものだったそう。

ところが見ず知らずのサドスティックな少年に刃物を突きつけら
れ、ジェットコースター乗車並びに脱糞を要求された。言われずと
も実行してしまった彼に彼女は実に優しく対処してくれたらしい。

更に観覧車でキスを試みた七兵衛に襲い掛かったのは侍13とい
うヘリコプターに乗った、怪しい殺し屋三人組。各々ライフルの銃
口と照準を自分達……というよりは自分に向けてきたそう。

そんな絶体絶命のピンチを救ってくれたのが自称「愛の戦士」と
いうマヨラ13なる殺し屋だった。マヨネーズ型のビーム方でヘリ
ごと沈めてくれた。そして彼女の心を奪われた。

考えただけでも悲惨なものだったが、悲劇はまだ終わらない。続きがあるのだ。

先日、コンビニに立ち寄った事。彼女がレジ員。再会のチャンスと思い、購入する商品を手に取りれば、やはり可憐な容姿を持つ彼女は同僚の男性にも注目の的だった。

それも、彼自身よくは見えないが黒髪短髪、黒い着物を着流しに、帯刀した男が颯爽と現れた。彼女はその男の姿、そしてカウスターに置いたマヨネーズを見るや否や確かにこう言ったそうだ。

「マヨラ13様」と。

「しかも栗子の奴……近々ソイツとデートするってダチがよおおお！」

くよくよなよなよと続いた話が終わりを迎えた頃、遂に恋歌は口を開いた。

「それで、悔しゅうないのか貴様は」

「……はい？」

「貴様のようなクズをそんなに慕ってくれておった良い娘を……

マヨラだがバサラだか知らんが、そんな訳の分からんクソツたれた殺し屋に彼女をとられて……

悔しゅうないのかと聞いておるのじゃ!!」

「悔しいよ!!　けど……栗子はもう……」

未だに寝ても冷めても繰り返される、その度に心をえぐられるような気持ちになる別れ言葉。

「もうこんな脱糞野郎とは別れるでございますから、私と付き合いってもらえないでございまするかー?」

七兵衛の心はもうボロボロと言っても過言ではないものだった。

「だったら奪い返せ！」

「でもどうやって……」

「デートを全力でブチ壊してに決まっておろう！ 安心しろ、一飯の恩も有る。私が手伝ってやる」

「ね、姐さん……」

「狙うは栗子のハートただ一つ！！ そしてマヨラ13なる戯け者の泣きっ面を拝む！！」

「姐さああああああああん！！」

意気投合する中、恋歌はこう思ったのだという。

よ
う
な
……
？
）

（でも『栗子』ってど……っかで聞いた

くフラれたら潔く引け！く（後書き）

コレを読んだ良い子の皆！

人の恋路の邪魔 ダメ！絶対！ 梨栖さんとのお約束だよ？

く理想の彼女は栗子ちゃんく（前書き）

あの子はいい子ですね。絶対尽くすタイプですよ^p^

栗子ちゃん可愛いよ栗子ちゃん。決して114話、の土方さんとの再会で

「栗子そこかわらんかいいいいい!!」なんてヤボな事考えてませんから。

まあ、一ツツキー（俺の嫁）には劣るがね（^v^）

「理想の彼女は栗子ちゃん」

彼女と、その忌まわしい男とのデート当日。草のしげみに恋歌達はいた。草の根をかくぐって、隙間に双眼鏡を差し込み、業況把握に当たっている。

名前の通り、恋歌とは些か違う栗色の髪をおかっぱにし、丈の短い着物にニーハイソックスというよく見る若い街娘の格好だった。ただ、そのら辺のアイドルよりも可憐で愛らしい。

「アレか。貴様の彼女は」

「ああ、間違いないえよ姐さん」

やっぱどっかで見た事あるな……と心の中で呟きながら、その娘を監視していた。

恋歌が見た事があるような感覚に襲われるとは当然の事であった。彼女の名は松平^{まつだいら} 栗子^{くりこ}。自分の上司に当たる松平の実の娘なのだから。

しかし今現在、そんな事は恋歌たちの問題ではなかった。栗子の表情が緩み、挙げられた右手が左右に揺れる。

「マヨラ様ア〜！」

と言いながら。

「来た！」

不安げにそう言う七兵衛に恋歌はそっと呟いた。

「案ずるな。デートで女子を待たす野郎に大したヤツはおらん。そんな男からは容易に奪い返せよう」

もっとも、彼女を一時間待たせた男にかけるような言葉ではないが。再び双眼鏡に目をやったとき、恋歌の景色が色を失ったような、そんな感覚に襲われた。

黒髪短髪、黒い着流し、帯刀。見間違えるはずがない。今回、敵に回す事になったのは土方であったのだ。

「ああ、アイツだ間違いねえ……って姐さん！？　元氣なくなっていない？」

七兵衛の言葉など聞えない。悶々とある考えが恋歌の頭を支配する。

(……奪い返すどころか、コイツ視界にすら入れてもええなくなか？　だって月とスッポンのアレだよ？　ハナから勝負にもならへんて！　心身ともに！！　つーかデートって事は何か？　あいつ等出来てんの？　夫婦か？　恋人同士か？　カップル？　アベック？　私フラれた？　遅すぎる初恋終わった？　つーかそれ以前にフラれたのかコレ)

最早最悪の展開しか思い浮かばない恋歌をよそにデートへの最初の一步が踏み出されていた。そして。よく見ればよく見知った顔三つがその後を追っていた。

「まあ作戦どうりに行けばあいつ等はもう……」

「問題ないネ。あんな姿見せたらあの女間違いなく……」

「でも万一須藤さんがコレ見てたら誤解されませんか？ 死ぬんじゃないですかあの人……ん？」

肩を叩かれて、振り向けばそこには恋歌と妙なチャラ男がいました。

「だああああああ！！ スンマッセーン！！ スンマッセーン！！
つか、その人誰ですか！？」

必死に頭を地面に叩きつけた新八は、我に返ったのかそんな事を聞き始めた。

「あのクソ女の元カレらしいぞ」

「オイ！ 誰の元カノ捕まえてクソアマだああ！？ あのクソ野郎

と一緒に葬ってやろう……!?!」

全部言い切る前に、七兵衛の喉元に刀が添えられた。犯人は言うに及ぶ。

「言葉は考えて喋らんかいクソガキが。あんまナ言ううとるとブチ殺すどワレ」

とびきり低いトーンで脅され、七兵衛はペタンと尻餅をついて、蚊の鳴くような声で言った。

「……スンマセンっした……」

あれから何時間か時が経ち、時刻はもう午後を告げていた。栗子という少女の懐の大きさと深さに恐れをなしながら二人の後ろを歩く一行。

もう、打つ手もなかった。

「姐さん？」

例外になく、消沈していた恋歌に声をかける七兵衛

「がっかりする事ないネ。マヨは演技でやってる事アル」

「分かっておる。分かっているでも私はドン引きしておる。でも……あの娘は演技とはつゆ知らず一向に引いてる素振りを見せておらん……もうコレ、引いた方がいいの？ 引く感じ？ ヤダヤダ」

「いや一般常識を持った人間の当然の反応なんで負い目に思う事は……」

「まあでも、あいつ等何気にお似合いなんじゃね？ ナイスカポーじ

やね？叶わぬ恋応援するよりコッチの方がよっぽど……」

銀時が途中で言葉を止めたのは、あまりにも冷めた空気が蔓延していたからだった。

「オイ！ 姐さんだって叶わないなりに懸命に頑張ってるんだよ！
？ ……あっやべ！」

「読者の皆ー。別にワタシ達悪気はないヨ？ 別に作者が叶わぬ恋の方向で終わらす気らしいアル。だから文句あるなら作者に言うヨロシ」

「イヤ、でも人の気持ちなんてすぐに変わりますし……あれ？」

恋歌の気配を感じず、振り向けば彼女は抜刀して切っ先を腹にかざしていたところだった。

「須藤さあああああん！？ 落ち着いてください！！ 僕も作者の説得手伝いますから！！」

「離せええええ！！そんな事いってお前もあいつ等と同じなんだろう！
？どーせ叶わない事前提で付けられた設定だし！？ 今回だってマヨ

ラ13って聞いた時点で『来るなコレ』って思ったもん!!そもそもコイツのデートの邪魔した奴だって私絶対知ってるぜ多分!」

「……? 何かあったんでござりましょうか?」

「……さあ?」

く理想の彼女は栗子ちゃんく（後書き）

次回に続く。

今更ブリーチ見ましたお！

よく分からなかったが小さいルキアちゃんが可愛かったし何も言うまい（ゝゝゝ）

〈最終章予告〉（前書き）

Q…え？栗子ちゃんの話は？

A…後書きにて「次回に続く」といった事は認めよう。

駄菓子菓子、「栗子ちゃんの話が次回に続く」とまでいった覚えはない（キリッ

〈最終章予告〉

「あのねえ……パパがいなくなっちゃったの」

始まりは一人の少年のこの一言。これが江戸を巻き込む大規模な事件に繋がる。

真選組に保護された少年。何故か次々に彼を狙う攘夷浪士達。

「正義の……聖杯？」

不思議な響きを持つ病原菌が隊士達の身体を次々にむしばむ。

「アツハアハハハアハハ！いい眺めだねえ。鬱陶しい江戸がもうこんなだ」

謎の病原菌の裏に潜む黒い影。

江戸の命運を左右する鍵は、少年の父親。

江戸に明日はあるのか？ 勝利の女神が最後に微笑
みかけるのは？

そして――……

な。
あの仏頂面」

「叶う事なら……最期にもう一度だけ見たかった

れるのか

少女の胸の内は明かさ

〈最終章予告〉（後書き）

ホントは恋歌の誕生日までもたせる気だったんだけどね、ゴメンネ♪
最近ロクでもねーgdgdギャグばっかだったので
「梨栖さんだってシリアス書けっしな」ってトコをお見せしますた
い。

プロット出来次第更新開始します（ω、）ノシ

「オトナの事情だった仕方ない」(前書き)

体育祭のお陰で最終章プロットが進んでない。つか出来てない(テヘツ

しかも間もなく生徒会演説でスピーチ原稿も考えなくちゃならん(ゲヘツ

しかし、生徒会顧問のババアが腹立つ。正直入りたくねえwww(エヘヘツ

でも立候補届けはもう出した。もう……選択の余地などないのだ(シヨボーン

オトナの事情話「李麻君、小太刀を持つ巻」

ブログ書いてるよ!良かったらみてね!

<http://kitariya314.blogspot.fc2.com/>

「オトナの事情だったら仕方ない」

突如恋歌に呼び出された李麻。彼の正面には恋歌と小太刀が正座していた。

黒い鞆が日光で鈍く光る。私服は勿論、隊服でも懷に仕舞えてしまいそうなほどの、可愛らしいサイズの小太刀。

「……ナニコレ？」

「小太刀じゃ」

「見りゃ分かるよ。何で僕が！？ 刀とかいらないんだけど！？」

「戯けが。足は身体の一部、急な不意打ちには反応しきれない部分が出てくる。無論、普段は足技を使っても構わんが、相手の懷に入り込んだ時、コレで一太刀浴びせれば良い。一人くらいは倒せよう」

いかにも面倒くさそうな顔をしながら、李麻は頷いた。

屯所の中庭。小太刀を持った李麻と刀を持った恋歌が正面に立ち尽くしていた。

「いいか。真剣勝負は剣と剣との話し合い。刀だろうと小太刀だろうと関係はない。黙り込んだ方が負ける。迷うな、例え味方でも目の前に立ちふさがる者は全て斬る気で来い」

「おうっ！」

刀を構え、一気に恋歌目掛けて駆けて行き、刀を振り上げた。次の瞬間、恋歌の拳が彼の鳩尾を衝く。

「フオゴオ！！」

「峰打ちで斬りかかって来る奴があるかっ！！ 刃の方を使い！！」

背後に見える、鬼のオーラに怖気づきながらすっ飛んだ小太刀に右手を伸ばした。

「小太刀はギリギリまで存在を悟られるな！ 前から出すな！ 懷からスライドさせろ！！」

「はい！ コーチ！！」

「抜刀が遅い！ 斬る前にやられるぞ！！ 懷から出した時点で柄を握れ！！」

「はい！」

などと言う罵声が中庭に響くようになって何日が経つだろう。今の李麻には中庭を見る元気がない。

大体、人には厳しい注文をつけるが、自分はどうだと言うのだ。手本として見せてくれた事もない。

憂鬱な気分を露骨に顔に出し、中庭に目をやった。そこには朝早くだというのに、真剣で素振りをしている恋歌の姿があった。

彼女も小刀を懐から出す練習をしていたらしい。が、自分のそれとはまるで違う。懐から滑るように現れる小刀。既に柄を持つ右手。

そして目にも留まらぬスピードで舞い降りた紅葉を両断。そこから刀に切り替える。これを繰り返す。

「……おはよー。いつもこんな事やってんの？」

見兼ねた李麻はポツリと声をかける。

「ああ、大体な。この位はな。隊士の倍はせんと、時々自分の地位に押し潰されそうになる」

「アンタに怖いものとかあったんだ？」

また背を向けて、素振りを始めた恋歌に投げかける。

「一応人間だからな。最近、死ぬのが少し怖い。死に逝くには……遣り残す事が多すぎる」

素振りを続けながら、低い声でそう言った。

「例えば？」

「来週のジャンプが気になる。鯛焼き屋の親父が新メニューを作ると言うておった。後は、山崎に貸したDVDが帰って来ん」

「まだ燃え上がるような恋もしてない。とか……」

ドスン！！ という音を立てて、李麻のすぐ後ろの柱に恋歌の愛刀がえぐるように刺さった。

「ちょおおおおおおお！？　ここここっ殺す気イイイイイ
！？」

「いや、今のはわざとじゃ……ごっごめえん！！」

この後、李麻は何週間もかけて、小太刀を使いきれるようになったと言う。

くオトナの事情だったら仕方ないく（後書き）

玖月さんが書いてくださった、松光お兄様と李麻のコラボ話。

ある一文を読んで妄想して、書きちいました。

「子供が嫌いなんじゃない。ガキが嫌いなんだ」(前書き)

この日にだけは…なんとしてでも間に合いたかった。

昨日中に最終章プロット序章が書けた完成じゃないけどネー(´ー´

、)b

え？今日ってそんな特別な日なのかって……？

ええ。銀魂ファンにとってはすごく大事な日です。

「子供が嫌いなんじゃない。ガキが嫌いなんだ」

早朝。ちぎれ雲が川のように流れる空の下。「沖田家之墓」と書いてある墓石の前で瞳を閉じ、静かに手を合わせている恋歌の姿があった。

激辛せんべいと百合の花が飾られている事から、一通り備えるものは備えたようだ。

自己満足以外の何者でもないと分かっているにも、来られずにはいない。彼女は月に一度、こうしてミツバの墓の前にやってきては、一人静かに手を合わせる。

想い人とは相変わらずケンカばかりでロクな会話が出来ていない。激辛スナック商品がまた新しく出る。

そちらには変わりはないか。

毎月、取り留めの無い一方通行の会話をして、そっと目をあける。

「貴女はお優しい方でしたから……笑って許してくれるのでしょうか」

か」

きつとそうだと考えて前を向く。それでも、胸が張り裂けそうに痛むのだった。

屯所に帰れば、また騒がしい一日が始まる。重い足取りで帰って来たら、何やら声がした。

「ごめんね？　それだけじゃちょっと……」

「えー？ でもお姉ちゃんケーサツの人でしょ？」

「お兄ちゃんだから！！」

珍しく、李麻の視線が下がっていた。何せ相手は4・5歳くらいの少年だからだ。

茶色がかったサラサラ黒髪。どこにでもいそうなオトナしそうな少年。

勘がいいのか、鼻が利くのか、李麻はすぐに恋歌の帰宅に気付いた。

「あー！ ふくちょーおかえりい！！ どこ行ってたのさ」

「私用でな。ところでその小僧は何奴じゃ？ 隊士の子か？」

「いや、それがさー……」

李麻が説明しようとした時、その少年が割って入ってこう言った。

「あのね、パパがいないの。起きたらパパのお布団に手紙が合っ
てここにいきなさいって」

歳の割には、ハキハキとした説明だった。

少年の名は木下^{きのした} 翔太^{しょうた}。母親は父親と仲違いし、翔太の物心がつ
いてすぐに別居したそうだ。

以来、男手一つで育てられた翔太だったが、朝起きれば隣で寝て
いたはずの父親の変わりに、ここを示した紙切れが寝ていたという。

詳しい事は分からないが、この少年も市民。親がいないのはさぞ寂しかろう。と近藤が捜査に当たると決めた。

そして、翔太はそれまでの間、真選組が保護する事となった。

ここまではよい。しかし、相手は子供。事情聴取とて大人以上に繊細に執り行わなければならない。そして逃げたり、迷子になったりせぬよう、四六時中誰かの傍に置く事になった。

その「誰か」を巡って議論は小一時間ほど続く。

「やっぱり、ふくちよーじゃね？」

「何故に!？　べつつに誰でも良からうが!!」

「いや、でもガキの扱い方とかよく分かんないんで」

「俺もです」

李麻の突飛な提案に、後押しする沖田と山崎。そこに本人の意志など関係ない。

「いや、私とて分からんし！ 昨日検挙の時壊した喫茶店の始末書云々そのバカに濡れ衣着せられて忙しいし……」

その言葉で、ガタツと膝立ちになった、そのバカこと土方。

「ちょっと待て！！ アレは正真正銘お前個人の判断だっただろーが！！」

「はぁ！？ それはないな！！ だってあそこで撃たないと逃げられておったぞ！？」

「パトカー走らせてりや間に合ってた！」

「だから貴様はバカだと言うのじゃ！ あいつ等結局何で逃げようとして……」

もはや恒例行事となったこの二人のケンカ。沖田と李麻は顔を見合わせコックリ頷き合った。

「今の内にこのガキの荷物、須藤さんの部屋に入れましょーかい」

「さあさあ、こっちだよ。しょーた君」

「はあーい」

翔太の世話役は恋歌。コレが覆る事は無かった。

そして思いもしなかった。

になろうとは——……

これが江戸を恐怖のどん底に貶める序章

「子供が嫌いなんじゃない。ガキが嫌いなんだ」(後書き)

10月10日……我等が主人公・銀さんの誕生日ナリ。

銀さんハピバアアアアアアアアア!

でも一切登場してないですねゴメンナサイ。

(アニメ銀魂113話に登場した隈無さんも今日が誕生日だそうです。

併せておめでとうございます。)

く子供の寝顔と笑顔は天使だよねく (前書き)

Q..土方さんと両想いになる話は無いの?..?

A..妄想だけならしてますよ (ゝ・ω・ゝ) キリッ

子供の寝顔と笑顔は天使だね

「はあ……」

翔太を引き連れて巡回している恋歌のため息。

あれから三日に渡って世話役を回避しようと試みたが、誰も承諾してはくれなかった。

「恋ちゃん僕のこと嫌い？」

「いや。そんな事無いから安心せい」

小さな手を右手で握り返す。千切れ雲混じりの空を仰ぐと、どっしり構えるデパートが目についた。

「翔太……デパート寄るか？」

「おしごとサボっちゃダメだよー」

「翔太がやりたいこととしてやるのも恋ちゃんの仕事じゃ。良いから行くぞっ！」

翔太が転ばないようにだけ気をつけながら手を引き、入り口へと歩み寄った。

食品売り場、おもちゃ売り場、生活必需品売り場。様々な売り場を転々としながら翔太は自分の事を話し始めた

母親は翔太の物心がついてすぐ、買い物に行ったり帰って来ないこと。それまで父親が男で一つで自分を育ててくれたこと。

親子で買い物などした事もなかった事。親の仕事を取ってしまったみたいで恋歌は些か良い気分ではなかった。

でも、自分の手を強く握る小さな手は儚く暖かった。

「恋ちゃんってすごいね!!」

「え？」

夕映えしたデパートの屋上。買ってやったオレンジジュースを飲みながら唐突にそう言った翔太。

何で？と聞いてみた。

「だって、パパもママもこんな所知らないから」

子供は純粹ゆえに残酷だ。いい年をした大人がデパートを知っているはずがない。いくら生活費のためとはいえ、子供をデパートにも連れて行ってやらないなんて……

「こっ、今度はもっと楽しい所に連れてってやるからな！ そうじや！ 遊園地とか。楽しいぞ？」

自然と自分の幼少期と重なり、翔太にすごんだ。翔太は少し驚いた顔をしたがすぐに笑って

「ホント！？ つれて行ってくれる！？」

「おう！ 約束する！」

「じゃあコレかしてあげるっ！」

すると、懷から綺麗な錦の包み袋を差し出した。中を改めれば、袋に負けなくらい美しい白い飾りの簪が姿を出した。

「これは……」

「ママがねっお守りだって言ってたの！ 恋ちゃん達のおしごと危な

いってゴリラのおじさんが言ってたからかしてあげるっ！」

「ありがとうな……」

そつと胸ポケットに仕舞い、沈み行く夕日をじっと眺めた。

く子供の寝顔と笑顔は天使だよねく（後書き）

今日は短いですねゴメンナサイ。

く子供目線…ハタチ超えたら立派なおぢさんく（前書き）

ただ・・・翔太（小さい子供）と土方さんを絡ませただけなんだ。

そしてたまにはオナゴを抜いてみようとか血迷っただけだ。

俺得回、Part 1

く子供目線…ハタチ超えたら立派なオヂサンく

真選組の定例会議。議題は勿論、翔太の父親の事で持ち切りだった。

「えーと……分かっている事は木下翔太の父親の名が木下^{きのした}忠義^{ただよし}。取調べの際出て来た単語からして職業は医療関係かと……」

十番隊隊長の原田の低い声で、資料の文字が読み上げられた。

「手掛かりが少なえな」

「何せ相手はガキですからねィ。出て来る情報なんざハナから知れてらァ」

「しかし、何としてでも探してやりたいなあ」

各隊長がああでもないこうでもないと言論を繰り返しているうちに近藤の左隣にいる恋歌は眉をひそめた。

先日、翔太と約束した遊園地行きの算段をこの会議中にでもとっておくつもりだった。しかし、この状況でそんなことを言おうとも結果は言わずともがな。そう思った時だった。

「恋歌。翔太君、アレから変わらないか？」

地獄に仏とはまさにこのことだ。一瞬そう思った恋歌は、すかさず口を開いた。

「いたって元気ですが近頃、遊園地行きを強く所望しております」

「遊園地だア！？ 却……」

「オメーに聞いてねえよ！ 引っ込んでろ」

ここ最近、特に頻繁に勃発するようになったこの二人の喧嘩。割って入るように近藤が叫ぶ。

「いいなあ！ 遊園地！！ 行こう行こう！！」

「僕もさんせー。しょーた君が行きたいって言ってるなら良いんじゃない？」

いくら土方でも近藤にまでそう言われたら、首を縦に振らざるを得なかった。

「……で？総悟はともかく何故に私が留守番？」

翔太が楽しみにしていた、遊園地の当日朝屯所前、その事実を告げられた恋歌はそう言った。

「「だってお前最近仕事サボりまくってんじゃねーか」」

これは昨晚遊園地の事を翔太に伝えた時、この世の汚れを知らない五歳児から聞いたことだった。

「なー！？ 翔太の世話役という仕事をまっとうしておるではないかあああ！！！」

「そーゆーことだからお留守番ヨロシクね。ふくちよー、沖田さん」

「恋ちゃんバイバイ。おみやげ買ってくるね！」

特に依存もなさ気に手を振る沖田と未だ納得できない恋歌に見送られ一行は遊園地へと歩を進めた。

この地に初めて足を踏み入れた翔太にとっては、何もかもが出会いの連続だった。

メリーゴウランド、コーヒーカップ、ジェットコースター、お化け屋敷……いたる場所行って、瞬間瞬間を楽しんだ。

昼前までに一体いくつのアトラクションに乗ったことだろう。隊士達も童心に帰って無邪気に遊びまわった。

しかし、一番楽しみにしていたはずの翔太がどこへ行っても何に乗っても、どこか寂しそうな表情カオをしていた。

「じゃー僕、飲み物でも買って来るよー」

「待て！お前に任せられるか……」

などと言いながら、去って行く李麻と土方を遠い芽で見送った近藤は、翔太の方に駆け寄った。

「どーした？恋歌がいないと面白くないか？」

翔太は首を横に振って、「けど……」と李麻と売店に並ぶ言いながら土方を指差した。

「僕、あの人嫌なんだ。恋ちゃんにいつも意地悪いって怖くさせる人だから」

申し訳なさそうな顔でそう言った翔太の小さな頭を、近藤の大きな右手が包んだ。

「大丈夫だ。トシも恋歌のアレは照れ隠しだからなあ。本当には思っていないさ」

「じゃあ、どーして本当のこと言わないのお？」

訝しげな顔でそう聞く。

「おじさん達くらいになるとなあ……、周りの人を気にして嘘ばかりつくんだよ。最初は嫌いで仕方なかったんだろう。それが突然……だからお互いどう接していいのかわからねえだけさ」

「ふーん……僕も大きくなったらわかる？」

まだ分からなくてもいいかもな。そう苦笑いしながら答えていると、売店に行っていた二人が戻ってきた。

李麻は何を思いついたのか、例の如く子悪魔みたいな笑みを浮かべて、

「あ、土方さーん。これ、しょーた君の分ねっ！」

と紙コップを渡した。土方は一瞬なんで俺が……というような顔をしたが、翔太に駆け寄って、膝をまげてそれを差し出した。

「……ホラ」

翔太は満面の笑みでこう言った。その瞬間、その場にいたほぼ全員が腹を抱えて大笑いしたそうだ。

「ありがとうっ！
おじさん！」

後に土産話としてそれを聞かされた留守番組は一晩中笑い転げていたそうだ。

く子供目線…ハタチ超えたら立派なおぢさんく（後書き）

「おじさん」って言わせたいがために作った今回の話。ほのぼのの夕
イム終了！

ここから話が進んでいくかと。

「最近、朝早く牛乳配ってくれないよね」（前書き）

Q…恋歌の名前の由来は？

A…リアル↓何となく。オリキャラの名前決める時は大概こんなんです（^^;）

作中↓お父さんの名前が「歌ノ介」お母さんのが「恋」くっつけて「恋歌」。一見悩みぬいた挙句決めたっぽいけど案外単純な理由なのです。

李麻のキャラはネット友さんが考えてくれたので分かりません……。

「最近、朝早く牛乳配ってくれないよね」

朝起きれば、いつも騒がしいはずの屯所が静まり返っていた。いや、静まり返ってはいないのだが、隊士達の部屋の障子越しから聞こえるのは、ただ咳き込むか「欠勤する」という言葉だけだった。

「……ハイ、二番隊の欠勤者リスト」

「……多いな。二番隊も。今分かっておるだけでもほぼ全ての隊が多数欠勤してる。隊によっては隊長も……」

身体の丈夫さだけは批判されることはない真選組だっただけに、これは異常だった。

一人、ただ黙々と煎餅を口に運びながら、TV画面を眺めていた沖田がおもむろに呟いた。

「もしかして奴等全員コレなんじゃないですかイ？」

その言葉に後押しされたように、TV画面へと視線を切り替える
数少ない出勤者たち。

『現場の花野です。現在、江戸を蝕む謎の病気！症状は発熱、吐き
気、頭痛と様々ですが、その風邪薬も効かず……キャア！？』

女子アナの叫びと共に、突然暗くなるTV画面。突然ノイズが聞
こえたと思ったら、機械的な声がした。

『ワ・レ・ワ・レ・ハ……コワス。コノ世界ヲ』

『貴方は何者なのですか！？ 今回の件について何か知っているん
ですか！？』

スタジオのMCが叫ぶ。

『全テダ。今回バラ撒イタういるす……「正義ノ聖杯」ニツイテハナ』

「正義の……聖杯？」

機械の言葉を見よう見まねに呟く李麻を他所に話は進んでいく。

『詳しく言ウツモリハナイ。ダガ……コレダケハ言ツテオコウ。』

『「正義ノ聖杯」ヲ体内ニ入レタ者ハ死ヌ。確實ニナ。最モ一月持ツ者もイレバ、スグニ死ヌ者モイルガナ』

そこで現場中継のカメラは元に戻り、TV画面には『しばらくお待ち下さい』とデカデカと書かれてあった。

ほぼ入れ替わりに、隊士が勢い良く障子を開ける。

「局長オー！ 先程飛脚から……」

差し出された茶封筒を受け取った近藤は乱雑にそれを破いて中のDCRを取り出した。タイミングを見計らってからか、隊士が差し出したパソコンに入れた。

今度は、中年の白衣を着た男が画面に映る。男はおずおずと口を開き、こう言った。それが、その場にいた人間全員の背筋を一瞬で凍てつかせたのだ。

『真選組の皆さん……私が……「正義の聖杯」を作った者です。名を……

木下 忠義』

「何だって!？」

誰よりも先に反応した近藤。順を追うように辺りもざわつき始める。

「ねえ、ふくちょー。この人って……」

「ああ……間違いない。翔太の父君じゃ」

ビデオの向こうの木下は、『正義の聖杯』なる病原菌は、多くの人間に感染させる事よりも、感染した人間を確実に死に至らしめる事を重要視したため、人から人に移る事はあり得ないと言う。

ただ、『正義の聖杯』を一度体内に入れてしまえば、それを前進に増殖させ、確実に今生の別れとなると言うことを20分ほど延々と語っていた。

「待ちなせエ。こんなポツと出の情報信じる気ですかイ？」

全員がその言葉を鵜呑みにしかけた時、それを沖田が制する。

『私の事が信じられないと仰るなら、証拠をお見せしましょう。市民には牛乳に「正義の聖杯」を混ぜた牛乳を宅配。隊士の皆さんには三日前に注文なされた刀の汚れを拭くための布を液状のものを浸

しました』

「被害者……被害者市民の共通点は」

恋歌がポツリと呟いた。それを聞き取った隊士は報告書の活字に目を通す。

「はい！ 市民はいずれも宅配された牛乳を飲んでから体調不良を訴えています」

「他は知らないけど……リストに上がってる二番隊^{ウチ}の隊士は……布を使わない時、口にくわえて刀の手入れしてたよ」

ここまで聞かされては、否応なしにあの男の言うことに耳を傾けざるを得ない。

『奴らめ……まさかこんな事に使うとは……全て済めば私はどんな罰でも受けます。ですがそれまでは……どうか貴方に協力させてく

ださい。ご安心を。こんな事であろうかと対抗剤は出来ています。そして息子に持たせていますので場所は……あの子がお守りにしている簪の裏に……』

容量を超えたのかCDRはそこで途絶えた。

「おい。今すぐ翔太を……」

「その簪なら!!」

翔太に知られたくない。自分の仕事を。恋歌は本能的にそう思ってた。土方の言葉を遮った。

「私が持っておる」

上着の胸内ポケットから錦の包みから白い飾りをベースにした簪を取り出した。ひっくり返せば、確かにそこには紙に包まれた物が括り付けられていた。指先で触れた時、紙越しに粉と分かる。

「でかした！ 早速科学班に……」

「待て、近藤さん！ まだ対抗剤って決まった訳じゃねえだろ！」

「あ……」

「野郎が言ってたろう。『奴等』って……野郎に薬を作らせた複数の人間……つまりは組織が存在するって事だろ」

それにこのCDRを聞いた限りでは、忠義は此方に味方する呈を装ってはいるが、実際のところ、どちら側の人間かは分からない。

「どーしやす？ 捨てやすかい？」

「いや、俺が飲む。飲んで何もなければ野郎のいう事に嘘偽りはねえってこった」

水道の蛇口を捻り、コップに水を注ぐ。三分の二まで来たところで蛇口を締め、その粉薬と一緒に飲んだ。

「大丈夫か？ トシ……」

身を案じて言葉とかけた時にはもう遅い。咳き込んだ土方の手の平には赤黒い血が付いていた。

「ひ、土方さん！？」

「副長！！」

「トシイイイイイイイイイイイ！！」

「最近、朝早く牛乳配ってくれないよね」（後書き）

ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……
（土下座）

全国の土方さんファンの皆さん。申し訳ございません。申し訳ございません。

ホントに悪いと思ってるんで。あ、ヤメテぶたないで……。・

（ノド、）……。・

もうお外が怖い。誰か私の代わりにガッコ行って来て下さい＞＜

く普段泣かない子が人前で泣いてたら思わず抱き締めたくなるく（前書き）

土方が倒れた。

紙に書けば、余白などいくらでも生まれるその一言。

しかし、その一言でどれだけ士気が下がったことだろう。

どれだけの隊士が取るもの手につかなくなったのだろう。

朝、眠気を覚まそうと井戸で汲んだ水を手ですくい、顔を洗う恋歌。

水面に映る顔えお見て、 ひどい顔。 と呟き、仕事へ向かった。

「普段泣かない子が人前で泣いてたら思わず抱き締めたくなる」

「そんな事があったアルか」

公園。ジャングルジムに腰掛けて、李麻は神楽に一連の事を話した。

「ってゆーか神楽達よく牛乳飲まなかったよね。僕、てっきりやられてるかと思ってたよ」

「なめんなヨ！　ウチにそんなサービス頼む金持ってると思うなアル！！」

「よし、よく分かった」

失礼な！　なんて言い返した後、神楽は不安げな顔で訊いてきた。

「じゃあ、恋チャン……」

「あー。本人は気丈に振舞ってるつもりなんだろうけどね。応えてんの見え見え。あのサボリ魔が脇目も振らず仕事してるわ寝ないわ食わないわ。こんどーさん達にメーワクかけす……ぶ！」

李麻の顔面に鞘に収められた状態の剣がめり込んだ。飛んできた方向を見れば、そこに恋歌がいた。

「こんな時にサボるとかどんだけ！？ 仕事せい！！」

「どの口が言ってんだアア！？ アンタにだけは絶対に言われたくなかったんだけどオ！！」

ギヤイギヤイ口論した後、「で……」と話題を切り替えたのは恋歌の方だった。

「何か掴めたのか？」

こくりと頷いて、メモ帳をパラパラとめくった。次第に親指で止めて活字を読み上げる。

「どーも忠義さん、数日前から職場から消えてるみたい。たぶんアレを作るために……そんで例の簪、鑑識に持ってたらアンタの指紋しか出て来なかったんだって」

「そうか……悪いな。翔太の面倒まで」

別に？　と言って肩を竦めながら公園を後にした。その場に残された神楽はポソツと声を出す。

「恋チャン？」

明らかに心配されている眼差し。李麻の奴、余計なこと喋りやがって。心でそう毒づきながら、無理矢理に笑顔を作って言う。

「平気ゆえ気にするな……なっ！」

「私誰にも言ったり笑ったりしないネ。だから正直に話すアル」

真っ直ぐ綺麗な眼差しを前に、隠し事が出来るはずがない。かといつて本当を話すには、少し抵抗があった。

しかし、やはり溢れてこぼれそうな素直な気持ちは、蓋をしても押さえられるはずが無かった。

「……誰もいない頃を計らって姿を隠して様子だけ見に行っておる。最初は起きて書類仕分けくらいの仕事はしておった。それが……今は……っ」

それまで淡々と話していた恋歌だったが、もうそれ以上は言葉にならなかった。

武士たる者人前で泣くべきではない。

泣いたところで解決に結ぶわけじゃない。

先に進む訳もない。分かっているけど泣けずにはいられなかった。

拭いても拭いても、全ての涙は拭えない。終いに、人の目もはばかりず疲れた顔をグシャグシャにして泣いていた。

「なあ……どうしよう……次様子を見に行ってた時っ……死んでたらどうしようっ……！！ 一体どうしたらっ……」

呂律も回らないまま、壊れたおもちゃのように同じ事を繰り返す彼女を、神楽は黙って見ていた。

「大丈夫アル。女にこんだけ泣かせといて、死ぬような奴いないネ。銀チャンが言ってたヨ」

そこからは、声をからして泣く恋歌の残響、反響が空しく響くだけ……。

く普段泣かない子が人前で泣いてたら思わず抱き締めたくなるく（後書き）

と、いう恋歌が書きたかったがために、土方さんには偉い犠牲を強いてしもうたのう……。

エ？ やっぱお前反省してないだろって？？ イエイエ滅相もございませんm＞＜m 最近はいつ殺されかかってても対処できるように四方八方注意深く見てますから！

「教室の隅でだんまりしてる子が陰キャだと言われるが表向き明るくても影で私に言わせりゃ陽キャなんて言える人はほんの一握りですよ。」

実はここから詰まってたんですけど過去の話を読み返したら「あいつ」がいたことを思い出した。そう、ポツと出てフツと消えたあの三姉弟が！！

教室の隅でだんまりしてる子が陰キャだと言われるが表向き明るくても影でい

「あれから一転に進展ありませんね」

「そーだな……」

内部でどんなことがあってもそれを敵に悟らせないために、巡回はいつも通りやる。今回は山崎と恋歌が当たっていた。

「しかし……あんなに弱った副長、俺初めて見ましたよ。仕事中、ミントンしてても怒られないなんて逆に違和感っていうか……」

「健気な奴じゃな。私は無駄な事で血圧上げずに済むゆえ清々する」

ウソで塗り固めた言葉を並べ、巡回の続きに入った。しばらく歩いてると市女傘を被った町娘と肩がぶつかった。

反射的に「すまない」と言えば、にわかには信じ難い言葉が聞こえた。

「木下 忠義……今、鬼兵隊に身を寄せてるらしいわよ」

目を見開き、市女傘の女を見上げた。同時くらいに、被っていたそれを外し、素顔を現した。どこかで見たような……

「お久しぶりね。須藤恋歌」

「お前はっ……!!」

いち早く、正体に気付いた山崎は、刀の柄を手に掴むが、女は片手を広げて、制止した。

「やめなさいな。今回は貴方達の敵じゃない。今の私は貴方達の為の情報家としてここに來たの。」

幕府直属のね」

「幕府！？ 攘夷志士であるお前がだと！？ お前等はお上に突き出したはず……」

「話は最後まで聞きなさいな、坊や」

「なっ……」

坊や。　　そうわれ何も言い返せなくなったのか山崎は黙り込んだ。
だ。

女は、自分が今に至るまでを恋歌達に話した。

例のほとりでのテロの後、攘夷志士として名を連ねていた女とそ

の二人の弟達。

あの後、例外になく真選組に逮捕された。

ただ、用心棒として雇われていたに過ぎなかった彼等は、大した情報を持つてはおらず斬首刑で話が固まっていた時、幕吏の一声で取りやめになったのだ。

そう、「実験台にはなるだろう」と。そうして彼女等は施設へと身を移すことになった。着いた先で目を合わせた人間は皆白い服を着て、自分達を人間として見てはいなかったと言う。

地獄。この先始まる人生が容易に想像出来た。弟達もきっと同じだっただろう。そんな夜だった。

牢屋とも言える、自室で眠っていると、急に足音が聞こえる。曲がりなりにも戦士だったのだ。跳ね起きて牢越しの相手をにらみつけた。

「そ、そんなに睨まなくても大丈夫ですよ。私は貴女方の敵じゃない」

顔は暗くて見る事が出来なかったが、声で男だと分かった。勿論そのような戯言に傾ける耳など以っていない。

「そんな言葉信じろって言うの？」

「そんなことは言ってます。ですが、ちょっとした提案があります」

ハッキリしない物腰に苛立ったが、黙って聞いた。

「先程からこちら一帯回って言ってるのですが、どうも引き受けてくれなくて……」

「何でもエエから、はよ本題入ってや」

しびれを切らせた弟が、投げかけるように言う。

「すみません。と慌てながら、口を開いた。」

「この仕事、結構企業秘密事が多いので攘夷浪士達に狙われやすいんですよ」

「それで？」

「私としては……用心棒が欲しいんだ。勿論貴女方がどういう人間だったかは知っている。餅は餅屋にして事だよ」

「その攘夷浪士に幕府の為に働けっての！？冗談じゃないわよ！！」

女は、頭に敷いていた枕を投げつけた。もちろん策のせいで、男に届く訳がない。

「確かに……暮らしは楽になった反面、僕らの誇りであった『侍』を消した。その原因である天人が憎いのは、一般市民なりに分かるつもりだ。私とてそんな奴の為に働いている訳じゃない」

男は続ける。

「でもね、天人の中には申し訳ないことをした。と思っている者や、地球への想いが地球人よりも強い者だっているんだ。私はその者達^{ココ}が安心して地球で暮らせるように頑張りたい。

地球のことを純粹に愛してくれる天人が増えるような仕事がしたい。貴女方には…その手伝いをして欲しいんだ」

「頼む」「断る」と言う会話を延々と続けているうちに朝になつてしまったのだろう。窓から朝日がこぼれ出る。

当然、その男の顔も見える。

皆と同じ白い服。

出で立ちからして皆をまとめるもの
だろう。

でも……その眼差しは——……

「ってな事で今はその医者 of 用心棒兼情報やしてるってわけ。私達も今回の件に着いて追ってたんだけど、弟達が例の『正義の聖杯』入りの牛乳飲んでね。動けるのは私だけってこと。

ウチの大将も今回の件で行方不明になってね。貴方達に持ってる情報タダであげて、さっさと事件解決してもらおうと思ったの。

特に、アンタとは一戦交えかけた仲だしね」

恋歌はそれまで黙って聞いていたが、やがて困惑した顔でその重い口を開いた。

「まずハッキリしない事があるのでそれを片付けておきたい。一つ聞いていいか？」

「ええ」

「お前、誰だっけ？」

この言葉に、女はおろか山崎まで絶句したと言う。

「はあああああああああ！？　ちよ……アンタ忘れたの！？　廃工場やほとりの船で会ってんでしようが！！」

それを聞いた時、恋歌は頭の霧が払われたような表情をして声を大にして言った。

「ああ！　思い出したぞ！！　阿呆道……」

「亜横道じゃボケエ！！　つーかこのやりとり前にもやってるから！！」

「教室の隅でだんまりしてる子が陰キャだと言われるが表向き明るくても影でい
小説情報見たらお気に入り件数が知らない間に10件を超えていた
ようで……気付きませんでした^^;ありがとうございますーっす!

亜横道美香って誰ぞ? って人は第一部54・58・59部目をご覧
下さい。

「3Dでアニメ見ると余計空しくない？」（前書き）

私は持っていないんですけどね。そりゃ確かに画面から嫁出てきますけどね。

触れないじゃないですか！！ただの詐欺じゃまいかー！、へ、
#）ノ

「3Dでアニメ見ると余計空しくない？」

屯所に来た美香は、持っている情報を全て話した。

今、忠義は鬼兵隊の者が停泊している船の中に身を潜めていること。

そして彼は、味方の感染防止用の本物の対抗剤を完成させたこと。

更に、二日後にはそれらを鬼兵隊の人間が飲んでしまうということ。

「まあ数だけで言うなら向こうの方が多いし、足りるでしょ。つてことで貴方達が今すべき事はただ一つ。対抗剤を奪還することよ」

「あー……その前に意義があんだけどー……何でオメーが仕切ってんだよ!!」

事情も一通り知ってポンポン言われてわけが分からなくなったであろう李麻が講義したが

「私は情報を提供してやってるのよ！ 少なくとも貴方達より敵状は知っている。大人しく従いなさい」

ここまで言われると、最早誰も何も言う事が出来なかった。

「で、具体的にはどうすりゃいいんですかイ？」

「そうね……まずドンパチは絶対避ける事ね。対抗剤に被害が及んだら大変だわ。隠密行動に徹しなさい。対抗剤を運ぶ人数を考えれば私も入れて四人が妥当ってところかしら。まずそこの地味な男は決定」

「誰が地味だコルア……」

「やめときなザキ。向こうの言う通りだよ」

「え……？」

そのまま部屋の隅で体育座りをした山崎。それが視界に入らなかったかのように美香は続ける。

「副将は動けないし、大將がノコノコ隠密行動なんて論外。須藤、貴女はここで大將達の護衛よ」

「待て！ 私とて……」

「自主規制だそうよ。作者が言ってたわ」

「チッ……」

見るからに。不服そうな顔をしたが、恋歌はそれ以上何も言わなかった。

「じゃあ沖田と御月って事になるわね。じゃあこの四人で……」

そこで美香は言葉を止めた。自分の足に、五歳くらいの男の子が必死にしがみついていた

「おねえちゃん！ パパは？ パパがそこにいるの？」

何時から話を聞いていたのだろうか。翔太は今にも泣きそうな顔でそう言った。

「翔太。テメエの親父はもう捕まるしかないんでイ。もう……」

「パパは悪い人じゃないもん！ そんな人じゃないもん！ 僕のパパだもん！」

そこから言葉は続かず、耳をつんざくような鳴き声がかどました。恋歌はそれをなだめるように向こうの部屋へ連れていく。

角を曲がったのを確認して美香は続けた。

「分かってると思うけど、木下は連れて行かないわよ。ま、屯所が襲撃されても良いってんなら話は別だけど」

「あ？ でも考えたら沖田さんにメリツトなくね？ 土方さん健在し続けるよ？」

いいの？ と聞く李麻に沖田は至って真面目な顔で応える。

「確かに土方が死ぬの万々歳だが……奴さん達のやり方が気に食わねえ。それに、復活してすぐ殺しちまえば俺としては無問題でさア」

「どんだけサドスティックなんだよ」

解散ムードになっていく一向。どうせ向かうのはもう少し先の話……そんな気構えだった。

しかし、美香の一言でそれは慢心だったのだと思わざるを得なくなった。

「じゃあ……」

時間もないし、今から行くわよ」

[illegible]

「3Dでアニメ見ると余計空しくない？」（後書き）

プロットも師匠（友達）の手厳しいチェックのもと終盤に。

次回までには終わってるといいなあ……。

近づいてきた恋歌の誕生日。でもその日って期末なのよねえ。

「たまには休憩を挟んでみようか」（前書き）

今日はアホの子恋ちゃんの誕生日と言うことで・・・

玖月さんが書いてくれたお祝い小説に便乗して「恋歌オメデト小説」をば。

因みに最終章とは一切関係ないので読み飛ばしてくれてもおkです。番外編で登場した小刀の出所もハッキリしとかないとな。

個人的には（チラッ）祝って（チラッ）欲しいかな？（チラチラッ）

「たまには休憩を挟んでみようか」

いつも通り騒がしい屯所。いつも通りむさ苦しい面子。だが、今日は何時もとは違うことがある。

恋歌は珍しく眠い目を擦って縁側を歩く。この季節では、中々起きる事が出来ない。ウダウダしているうちに早朝トレーニングを忘れていた。

食堂に通りがかかると、大勢の話し声がする。

大勢の話し声はいつもの通りなのだが、どうも皆が皆同じような話をしているのだ。

……いや、もっと言えば文化祭前の学生がクラスごとで出し物をしているようだった。

ドアを開けた途端、食堂の空気が外にも引けをとらないくらい凍てつく。

「おっおはようございます！ 須藤さん！」

「今日は早いんですね！」

などと、声がかかりそそくさといつもの情景に戻る。今日が三日目だ。

「何じゃ。何かあるのか？」

座ればたまたま隣にいた李麻に訊く。

「い、いやその……お、男同士の話！」

今の恋歌の様を漫画で表すなら、頭上に「？」という字が止め処と無く出ているだろう。

そんな中、唐突にドアが開いた。ドアの向こうから現れたのは、

ズタボロにされた山崎。

ニ、三步よろめいてそのままドサリと倒れこんだ。

「ザ、ザキィー!!」

山崎は三日ほど前から屯所に顔を出していなかった。恐らく密偵中、何者かに正体がバレて襲撃を受け、命辛々逃げてきたのだろう。

「す、須藤さ……コレ……し、真選組を……頼み……ま……」

手をわななかせながら言葉を発していたが、途絶えると同時に手もガクリとうなだれた。

「ザキィー!!」

恋歌は託されたクシャクシャの髪を、手でアイロンして広げた。

そこには、曲がりくねった直線、筆を放したと思われる辺りにバツ印。これが意味するのは……

「そーいえばザキ、じょーいろーし一派追ってるって」

「すぐに局長に……」

「局長は將軍^{うえ}に呼び出し喰らってまして……副長もそれに付き添ってます」

「なら仕方あるまい……今から全員……いけるか？」

「あいあい」

市民を警戒させないように一般車で出動することになった。距離としては徒歩でも良いのだが武器を積むには車での移動の方が都合が良い。

何せ敵は密偵のプロを見つけることが出来るのだ。なめてかかってはいけない。

車で行けば十分もかからない所が敵の集会所だった。

「どこか」

「誰もいないっぽいですねィ……」

人っ子一人もない。神経を極限まで研ぎ澄ませて奥へと進む。コッソ。書類の束にけ躓いた。

何気なく拾い上げる。中には攘夷活動が事細かに書かれていた。

「どうやら派不意右無の残党らしいな」

「そのようで」

書かれていたのは先週検挙した、派府意右無の残党の悪行三昧についてだ。

頭無き烏合の衆では、真選組にされるはずもないというのに。最後のページまで捲る。

すると驚くべきことが書かれてあった。

「『残党が検挙された暁には、屯所に爆弾を仕込ませておこう』……だと!?!」

近くにいた沖田も流石に目を見開かせた。

「ヤベエ……近藤さん今頃帰ってくる頃だ。まだ何も知らねえ……」

「何!?!」

急いで屯所に戻るぞ！　そういいかけた時だった。突然うおおお！
という掛け声が聞こえる。

見てみれば、隊士達と労使と思しき男達が真剣を交わしている。

「感づかれたか！」

恋歌達に気付いた李麻は言う。

「沖田さん！　ふくちよー！　ここはいいからさっさと屯所に！
こんどーサン達をー！！」

「お……おう！」

頼む！　間に合ってくれ！　頼むから！！

言ってるようだった。

恋歌の足音はそう

屯所。裏口から直接入ろうと、勢い良くドアを開ける。その時だった。

パン！！　　パンパン！！

耳をつんざく音と共に、綺麗な色をした紙くずが頭にかかる。目の前には花束を持った近藤。

「「「「須藤さん！ 誕生日おめでとうございます！
ます！」「」「」

12月10日……今この瞬間まで、自分の生まれた日を忘れていた。

「この日の為に三日くらい前から打ち合わせしてたんすよ！」

「いやー、大成功！」

主役をそっちのけで盛り上がり始める面々。その脇で主役に歩み寄る土方。

「お前でも分からなかったか？」

皮肉混じりの笑みで。

「はっ……甘いわ!」

困惑した表情から、嘲笑いの表情へ豹変する。

「屯所の近くにアジトを構える攘夷浪士がおるか? 活動目録などと言う重要な書物を足元に置くものか! 何よりあの斬り合い!! 手抜きにも程がある!」

「嫌なガキだな。ちよつとは素直に喜ぶとかしろよ」

赤いリボンでラッピングされた小刀を乱雑に差し出す。

「コレ……」

「懐にでも入れとけ。不意打ちで一人くらいは切れるだろうよ」

『女子のお前が刀なぞ持ってよいと思っておるのか!』

十回目の誕生日に取り上げられたしないが、やっと帰ってきた感覚だった。フツと微笑む。

「まあ、こんな豪華なサプライズを用意してくれた事じゃ。何にも気づかなかった事にして喜んでおくよ」

一生忘れられない、幸せな誕生日。

「たまには休憩を挟んでみようか」（後書き）

遅ればせながらプロット完結しました。自分の作業の遅さに感服^pへ

師匠（友達）がずっと見てくれてたよ！完成したのを改めて見せました。

「どうでゲス師匠!!」

「うん、お前にしてはよく頑張ったよ。でも、この正義の聖杯？さ
ー……

人の心操れることにして土方さんと恋歌で戦わせたらよかったじゃん」

し、しまったあああああああああああああああああああああああ
ああああ!!

てか師匠、アンタずっと見てたんだからもっと早く言えしwwww

くブランクの空けすぎにはご注意くださいく(前書き)

ほんの二、三週間空けてただけで

「アレ？私どんな感じで書いてたっけ？」ってなります。

PC直ってからアニメ銀魂ガン見まくってます。

中でもミツバ篇見てるというんな意味で胸が痛いです。

そして「トシミツあ絶対結ばれるべき！」

関連動画にそういう発言があると物凄く後ろめたくなります。

くブランクの空けすぎにはご注意をく

見覚えのある港に船。薄汚い着物を着て帯刀した男達数名がまばらになってそこにいる。

そんな場所に、見覚えの無い運送トラックが一台止まっていた。

「ここね。こんなトコに台頭した奴がウヨウヨと……怪しい事この上ないわ」

双眼鏡に目を当て、吐き捨てるように美香は言った。後ろの荷台にいる山崎に視線をやる。

「ホラ、作戦A！」

「は、はいっ！」

山崎は言われるがままにトラックから降り、港を闊歩した。

しかし、男達はそんな山崎を目にも留めない。彼が真横に来ようと、通り過ぎようと変わらない。

「おお、ザキの存在感の無さが際立っている」

なんて言って、李麻も山崎に続く。流石にそれは気付かれてしまった。

「オイ小僧オ。こんなトコでなあにやってんだあ？」

「さっさと帰って寝んねしな！」

そういわれた少年は、目を伏してか細い声で言った。

「うん……だから、永遠に寝んねしに……」

「オiiiiiiii!! お、落ち着け早まるなアアア!!」

「そうだぞ!? お前が思ってるほど人生くらいもんじゃ……」

必死に説得する男達の背後に、ミントンラケットを振り上げた男がいる。

ガゴンと言う音がして、説得していた男の一人が倒れた。

「オイ、どうし……ごふっ!?!」

鳩尾に良い蹴りが入ったもう一人の男は地に伏した。

「あー、あー。突破口は開きました。作戦Bをお願いしますドーズ」

『了解』

トランシーバーから女の声が聞こえた。

一方、船の守りをしていた男数名は眠い目を擦りながら警備に当たっていた。

すると若い男女が港を闊歩し、イチヤついている（実際はそうではなくても彼らにはそう見えた）。

「もうすぐ朝日が拝めるわね」

「今8時なんですがねィ……」

此方にまで聞こえるくらい大きな声だった。

「チクチヨウ……カップル死ね」

「夜な夜なイチャコラしやがって……」

船から男女を見下ろしてギリギリと齒をかんでいる男達が、背後の二人の不審者に気が付くわけがなかった。

「全く、こんな手薄な見張りをおくなんて……鬼兵隊も終わりだね」

「ですね」

四人合流した後、そんなことを語った。

「アレ？ 何だろコレ……」

気絶している男のポケットから、長方形を取り出した。山崎はそれを広げる。

「コレは……!!」

「地図ですねィ。ってこたあ……こいつ等新人？」

「え？何で？」

「アホ。地図持つてるって事はこの船の構造を知らねえってことだ」

「あーなるほどー！」

などと言いながら、ひたすら『研究室』を目指す。翔太の父、木下 忠義は研究者。彼が薬を研究する場所といえそこしかない。

一番奥の部屋のドアを勢い良く開け、辺りを見渡した。薬品の匂いが鼻を突く。

対抗剤は何処か探す時間も確保せねばならない。誰かが出発前にそんなことを言っていた。

全員血眼になって薬を探した。しばらくしない内に、李麻はふとあるものに目を留めた。

まるで給食の牛乳パックを入れるような箱だった。よく見ると正面に文字の書かれたテープがある。

『対正義の聖杯』と書かれたテープがそこにあった。

「みんな！」

李麻の声に、三人とも手を止めて集まる。そしてその文字を確認した。

「よっしゃ！ 間に合った！！！」

山崎と李麻で手分けして箱を持つ。隊士全員は勿論、一般市民をも助けられる程の対抗剤を。

いざ出ようかとドアノブに手をかけたその時。機会の声が残酷にもこう言った。

致します』

『侵入者 侵入者 全てのドアをロック

いくらひねっても、ドアノブは動こうとはしなかった。

くブランクの空けすぎにはご注意ください（後書き）

「劇場版BLEACH地獄篇」PC不調中にCM見ました。
その中のカッコイイ悪役……アレ？ ななな……中井さん？？
中井さんが……悪役……だと？（生つばゴクリ）

ゝ黒幕が善人に濡れ衣着せるなんてよくあることゝ(前書き)

祝☆アニメ銀魂再開！(遅い……ですよね？)

声優さんとスタッフさんが代わってない事を切実に祈ります。

「黒幕が善人に濡れ衣着せるなんてよくあること」

『ロック致します』

残酷な機会アナウンスが聞えてから数秒、は誰も筋の一本も動かさなかった。

「え……？マジで？」

数秒後、ようやく李麻が口にした言葉。

「警備が手薄だったのもこういう事か。行きはよいよいなんざよく言ったもんで」

「言ってる場合じゃないですよ沖田さん！　どーすんですかコレ帰れないですよおお！？」

「オイコラ！！ ザキテメー！！ 何気に僕の存在忘れてんじやねーぞ！！」

脚力に特化した戦闘種族・兎月族。彼なら……誰もがそう思った。

「はああああああああああああああああああああああああああああ！！」

大きく助走をつけて凄まじい蹴りが入ったドア。ゴイン！ と鈍い音を立てた。

しかし折れたのはドアではなく李麻の心。何せ傷の一つもついていないのだから。

「痛ゝあああつああああ！！」

「み……御月隊長オオオオオオ！！」

「アンタがここに来る事も想定済みだったのね」

うおおおお……お、お、折れたああああ……などと悶えている李麻を他所に結果を述べる美香。

「して亜保道さん……」

「亜横道だつつつてんだろ。何コイツ須藤より腹立つ亜の字が合ってる分！」

「あー、それは失礼しやした阿呆道さん」

「訂正になってないからアアア！！ 何！？ この苗字が悪いの！？ 気に食わないの！？」

ギヤイギヤイと口論、悶える声、慌てふためく声が交錯している中、男の声が響く。

「まあまあ。皆さんお止め下さい」

「「「!?!」」」」

見間違えるはずは無い。土方の一件から指名手配をしていた男の顔……

「木下……忠義？」

「貴様つどのツラ提げて……」

「待って!!」

李麻を片手で制した美香は、忠義の前に立ちはだかる。まるで彼を守るように。

「なっ……どういう……」

「どうもこうも……アタシはね、忠義さんの指示でここに貴方達を連れて来たのよ。このワクチンを持って行ってもらうためにね」

その一言に、一同は固まった。同時に何とも言えない表情をしていた。

「理解出来ないって顔ね。まあ無理もないわ。分かりやすく説明すると……」

彼女は忠義の一連の動向を打ち明けた。

幕吏の下で研究家をしていた忠義はある日、数日ぶりに通った帰り道で鬼兵隊の者に脅された。

亜横道三姉弟という実験材料を組織に無断で己の用心棒に雇った事をネタに。

始めは近況報告の様なものをすれば良いだけだったが、要求は次第にエスカレートしていった。

金の横領、研究材料の一部を譲渡、怪我の特効薬の横流し……

そして今回、命令されたのは「正義の聖杯」の製作。勿論、敵の一派に浴びせると聞いての事だ。

仮に真実を告げられていても忠義に断ることなど出来なかったはずだが。

まず、一人息子を巻き込むような事をしたくはない。結構前夜、家に帰って自分の枕に書置きをしておいた。

年の割りに賢明な息子が無事、屯所にたどり着いたのを美香達を通して知り、作業に映ったのだ。

完成後にニュースを見た瞬間、忠義はすぐに「正義の聖杯」のせいでと確信し、急ぎ対抗剤を作らせた。鬼兵隊の者達に、という建前で。

それが完成し、今に至ると言うわけだ。

そこまで聞いて山崎の頭に電撃が走った。

「じゃあ……あんたの恩人って」

「そうよ」

李麻は回りの遅い頭で、今話された事をどうにか整理しているところだった。

彼女の言っていることは恐らく全て真実。忠義の目を見れば分かる。では、犯人は忠義ではない。なら、犯人は？ 忠義に「正義の聖杯」を作らせた鬼兵隊の人間とは？

何より……

「じゃあ、あのCDRは？」

それが一番の疑問であった。ところが忠義は怪訝そうな顔で聞き

かえしたのだ。

「CDR？」

「いや、知らないならいいんだけど……」

彼が根っからの善人であることは分かった。土方が……と言えばきつと彼は自分を責めるだろう。

「て事は何ですかイ？ この人意外に黒幕がいるって事か？」

「そう考えるのが妥当だと思います」

「やっぱ鬼兵隊だし……高杉？」

「奴じゃないわ。奴ならウィルスで人を弱らせるなんてまどろっこしいことはしない。

武器を使ったテロがない事から高杉は全くといっていいほど関与して無いわね」

「あの……」

黒幕の推理をしている最中、忠義が横槍を入れる。

「一度だけ、直々に幹部の人間が来た事がありまして……もしかしたらそいつが……」

「誰！？誰なの！？」

「それは……」

「それは？」

しばし続いた静寂、名前を言おうとするただ世の唇はかすかに震えている。

その名が出た瞬間、誰もが確信した。『こいつだ』と。

「黒幕が善人に濡れ衣着せるなんてよくあること」(後書き)

Q..PC使えない間、何をしてたの？

A..ワンピースの劇場版観てました。(TVでやってたの録画して5回ほど)

面白かったのもそうですけど、皆カッケェなーと思って観てました。

く50いったからって何かやると思うな!く(前書き)

次回作のプロットもオリキャラ登場シーンプロットも出来ましたハ

p[^]

でも第三部やろっかな。とか最近思っちゃうのよね。

「50 いったからって何かやると思うな！」

忠義が口にしたことで明確になった黒幕の存在。

黒幕とその者の計画を聞いて、全員が一瞬自分達が何をしに此処へ来たのかを忘れた。

「じゃあ……それって……」

「敵の攘夷浪士一派、真選組はおろか……江戸は消えるでしょう……」

「じゃあ早く此処から出て屯所に……！！」

山崎の言葉でハツとなった忠義はノートパソコンを広げシステムを起動させる。

どうやら開錠作業をしているらしい。

「今ロックを解除しました！　これで対抗剤を持って外へ……」

忠義の言葉をさえぎるように浪士達の吠える声が遠くから聞えた。

焦るあまり気付かなかったが、開錠した瞬間サイレンが鳴っていたらしい。

「忠義さんは用済みって事かい」

各々手分けして薬を持って部屋から出た。兆弾やら斬撃にきをつけながら。

どうにか出てきた頃には、あれだけしつこかった追っ手もういない。気味が悪いほどに静まり返っていた。

何かある気がしてならないが、五人はさっさと用意した車に乗りエンジンをふかせた。

「ふー……逃げ切っ……!?!」

ふと荷台から後ろを見た李麻が、そう言いかけて止めた。

「どーしたんでイ御月……!!」

沖田が荷台越しに見たときには、何十という数の戦車がこちらに向かっていた。

「ザキ……このまま行ける？」

運転席にいる山崎を見る事無く話しかけた。

「でも…相手は戦車ですよ!?!勝てるわけが……」

「僕だって勝とうなんて思っ
てない。でも屯所に着くまでの時間稼
ぎにはなるでしょ」

そう言いながら、二台のドアを開ける彼の背中は妙に頼もしく感
じた。

「でも約束するよ。形はどうあれ、生きて屯所の土を踏むってね」

「いや……」

「安心してよ美香さん、皆も。だって……武士は果たせない約束は
しないんですよ？」

そうはにかんだ李麻の隣に、美香が立つ。続くように沖田も立つ。

「違う。貴女みたいな小僧一人が行ったところで時間稼ぎにもなら
ないわよ。数は多い方がいい」

「土方の野郎の元気な顔見るくらいなら時間稼ぎに回った方がマシ

だからな」

「違うないね。……まあそういう訳だから。薬は任せたよ！」

そう言った瞬間、三人同時にトラックから飛び降りた。三つの影が見る見る小さくなっている。

山崎は、すぐにでもUターンして三人を拾いに行きたかった。いや、実際ハンドルを捻ろうとしていたのだ。

？
』

『武士は果たせない約束はしないんでしょ

李麻の一言がふと頭に流れ出て、その手を止める。断ち切るようにアクセルを思い切り踏んだ。

その時、ターミナルから武州へ行く列車の途中道……いつかの動乱が起きた辺りだろうか。

列車の煙でもない、戦火の煙が上がっているのを見たのは。

その戦火は屯所にいる近藤に見えないはずが無かった。ただ、火元が見えないだけで。

勿論、ずっと俯いて自分の傍らに刀を置いている恋歌にも。

「局長！ テロです！ どこの一派かは不明ですが……以前動乱があったのと同じ列車が襲撃されたとの報告が入っています！！」

「何だど！？ 健在の隊士は総員、現場に向かってくれ……指揮は……」

「私に生かせて下さい。局長」

辺りはにわかになじめいた。

李麻達が行ってから、一言も話さなかった恋歌が低い声でそう言ったから。

「恋歌……でもお前は」

「行かせて下さい。……お願いですから」

そう言っ、鞆を握っていた右手は小刻みに震えていた。これは怒りで震えているのだ。

想い人を傷付けた人間がそこにいると分かって、じっとしてられる人間などいない。それは分かる。

だが、今の彼女を行かせたくはなかった。

剣に迷いがあるとは言わないが、行かせると二度と彼女の声を聞くことがなくなる気がしたのだ。

しかし、他に指揮が勤まりそうな人間がいるはずもない。苦い顔

で言った。

「……ちゃんと、帰って来いよ」

「ありがとうございます」

そう優しく微笑んだ恋歌はそのまま背を向け、パトカーへと乗り込んだ。

ゝ50いったからって何かやると思うな!ゝ(後書き)

次回からクライマックスです。ふああゝノッて来た!ノッて来たZ
OY!

く恋に関する恨みは食べ物の恨み以上に怖いく（前書き）

あの場所に重大を超えるパトカーが屯所の門をくぐって出た。

赤い点々が見る見る遠くなっていく。ウィンカーが光って順番に右折していった。

あれから何分経っただろうか。遠くからタイヤが地面を削る音がある。

その音に紛れて、かすかに声が聞こえた。タイヤの音が近づく度に声もはつきり聞こえてくる。

…オー！ ……長オー！！ 局長オー！！

振り返ればハンドルを握った山崎が車窓から顔を出して叫んでいた。

ゝ恋に関する恨みは食べ物物の恨み以上に怖いゝ

爆撃により完全に路線を踏み外した列車が横たえている。それを、攘夷浪士一派がさも景気が良さそうに眺めていた。

「いい眺めだねエ。横を見れば壊れた列車、街を見れば光がほとんどない。空は煤けてる」

男は黒ぶち眼鏡の位置を直してから、お気に入りの番組を見ているかのような表情で語っていたが、ふとあるものを目にして、「おや」と目を細めた。

赤い点々とした、光。そうか、まだ片付けなければならない者達、いや者が残っていた。

「……目障りだね」

「いかがしますか？」

部下の言葉に意味のないうねり声を上げ、乾いた声で言い放った。

「撃って……あ、ただし当てないでね。あくまで挑発程度に」

現場に着いてみれば、敵は既に自分の陣を構えていた。どうやら

此方が来る事を予想していたようだ。

いや、予想していたと言うより待っていた、と言った方がいいの
だろうが。

「どうやら元より一騎討ちを望んでいたらしいな」

睨むような形相で観ていると、上空から何か降ってきた。

それはどんどんこちらに向かって落ちて、最前線のパトカーの一
歩手前で爆発した。

砂嵐でしばし前が見えない。

「野郎……本気でやりあう気か！」

「ここで良いか……どうやら向こうは乗り物を使う気はないらしい。
此方も降りて戦うぞ」

トランシーバーの磁気と共に聞こえた恋歌の声。皆、そろそろと降りて柄に手をかけた。

「特にこう戦え、などと言う事は言わん。自分が一番戦いやすい先方で戦え。……死ぬなよ」

おう！　いつも以上にたくましい鼓舞の声。

そのまま鞘から刀身を出し、切っ先を敵陣に向けてただの四文字の言葉を言い放つ。

「突撃ィ！！」

「おう！！」

ここが再び戦場と化すのに時間など要らなかった。

彼等がこれしきの浪士にやられるはずがない。恋歌は信じて敵陣……黒幕へと走り出した。

案の定、何人もの浪士が壁となり行く手を阻む。

「売国奴が！！　これより先は通さんぞ！！」

一人の浪士が切っ先を彼女に向けるが、彼女は全身を止めはしない。彼等の柄を握る力は強まる。

「退け……」

「敵に退けと言われて誰が退くものか！」

「命が惜しくば退けと言っている……」

「だから誰が退くかと……」

言いかけて、喉に痛みを感じる。触れてみれば手の平が真っ赤に染まっていた。

バカな！？ 四方八方、同士の肉体が転がっているではないか。

背後を見ればメートル単位の間合いを空けていた女は通り過ぎてまた走り出している。

「待……」

言いかけるも、大量の鮮血が溢れ出し意識が遠のいた。

隊士達がかなりの人員を引き付けていてくれているらしい。敵陣の前まで着くのに時間はかからなかった。

気を引き締めて、一步踏み出した時、背後から拍手が鳴り響いた。振り返り切っ先を突きつける。

「いやあー！ 流石。こんな早く俺に会いに来てくれるとは思わなかったよ」

「やはり、一連の事件は貴様のおかげか……梨本圭吾！！」

眉目秀麗な男に黒ぶち眼鏡、白刃を帯刀。

「あら、何だ。知ってたの？ ちょっと驚いてほしかったんだけどねえ」

「あのCDRの声の主を知っておる者がいてな」

「あらそう……息子の、翔太君。だっけ？」

今より数時間前、翔太をなだめていた時だった。最近買った、子供向けDVDと例のCDRを間違えて再生してしまった時だ。

『真選組の皆さん……私が……正義の聖杯、を作った者です。名を……木下忠義』

この一言で間違っていることに気付いた恋歌は慌てて停止ボタンを押そうとした時だった。

「この声パパの声じゃない。パパのお友達の人声だ」

「え？」

最近、あまり会話をしなかった恋歌と話せた嬉しさか、翔太は声の主について心当たりを話し始めた。

「僕のお家に一回だけキレイなお兄さんが来てね、『お兄さん誰?』
って聞いたら『パパのお友達だよ』って。声もパパに似てたんだあ」

「そのお友達は……何してる人だって言ってた? どんな外見だった?」

詰問口調を避けるようにしつつ、翔太に立て続けに聞く。

「えー……と、メガネをかけてたんだその人。パパが仕事部屋で『じょーい』って言ってるの聞いたよ」

「それで分かったの。はーん、嫌だねー最近のガキは。物覚えいいのばっかでさ」

「でも一つだけ疑問が残る。翔太の簪の正義の聖杯……一体どうやって仕組んだ。そんな事が出来るのなら翔太を攫う事も出来たであろう」

彼にとって何かまずいことを付かれたのか、梨本は具合が悪そうに頭を書く。

「アレがまず計算外だったんだよ。まさか俺が人質として攫いにいく前に君等に預けられるなんて。でもね、簪置いてある事に気付いて思い出したんだ。あの子が簪をお守り代わりにしてたって事」

君、一回取りに戻ったんじゃない？　そう言われて李麻からの報告を思い出した。

「で、もう一つの計算外事項はあの正義の聖杯を飲むのが君じゃなくて土方だった事。多分、あいつ薄々感づいてたんじゃない？」

「何、に……」

「あのメッセージ通りに行けば誰かが、業況からして君が犠牲になるって。それを未然に防ぐために自ら犠牲になった。まあ勘がいい奴ほど邪魔だから俺としては結果オーライ……」

ぶつかる金属音が梨本の言葉を遮った。

「怒ってんの？ 一番借りを作りたくない人間に借りが出来たって？」

「黙れ……」

怒りによって震える恋歌の刀身を受け止めながら彼は続ける。

「それとも。なんだかんだで好きな男あんな風にされて腹が立った？ 復讐？？」

「黙れと言ってるのが……聞こえんのかアアア!!」

ガギイン!! 力負けした梨本の白刃は、しばし思うように震えなかった。

その隙をつかれて着物をざっくり斬られた。衝撃を受けた梨本の右腕は電撃が走るように動かない。

彼女に今まで力押しで負けた事などなかった。他に彼女に力で負けた。と言っていた浪士はいない。

ただ見えないほどの速さ……神速を見切れなかったが為に浪士達は皆倒れていったのだ。

でももし……それが彼女の本当の実力でなかったとすれば……

もし……自分の挑発が元で、彼女が封印していた力を解いてしまったのだとすれば……

最早俺の手に負えないよ。

モン
だ。

バ
ケ

ゝ恋に関する恨みは食べ物物の恨み以上に怖いゝ（後書き）

くお医者さん以外の人から貰った薬は即刻捨てなさい！く（前書き）

ある読者様に「50部をアニメで観てみたい」と嬉しい一言を頂きましたあ！く（≡△≡）ノ

もしアニメ化するとして（絶対ないけど）二人の声優さんを考えてみました。

結論は後書きにて！

「お医者さん以外の人から貰った薬は即刻捨てなさい！」

「パパ！！」

「翔太！！」

お互いの無事を確かめ合うように、ガッシリ抱擁している木下親子。

山崎が連れてきたのは対抗剤だけではなく、翔太が、そして近頃真選組が探していた男だった。

親子の再会に微笑んだのも束の間、感染者達に対抗剤の配布へと残った未感染者は忙しかった。

しかし、対抗剤を飲んだ隊士達は今まで寝込んでいたのが嘘の様に回復してゆく。すぐさま戦線復帰が出来るほど。

一番最後に飲んだ土方も例に漏れる事なく復活した。

「トシ！　もう大丈夫か？」

「ああ……現状はどうなってんだ」

頼む。教えてくれ。彼の目がそう訴えていた。

ゆっくりしている。と言っただけ野暮だと悟った近藤は少し考えて、現状を伝える。

「山崎の無事は確保した。ザキの話じゃ李麻と総悟は的の足止めをしているそうだ」

「そんで？　テロの指揮は誰が。無事だった隊長格でもいたか？」

見たところ、沖田を除く隊長格の顔がほとんど見えることから怪訝そうに訊く。

「いや、恋歌に行かせた。大層殺気立った様子でな。俺には止めようがなかった」

それを聞いた土方は少し目を見開き、あいつに……？と小さく呟いた。

「すまない。止めようとは思ったんだ。でも……」

近藤が言い終わらないうちに、タンスを開ける音。土方が隊服に着替えようとしているのだ。

「何やって……」

「俺もそこに行く。サボリだと思われたくないからな。それにそうなったあいつを戦場に置くのは危険だ」

近藤は何かを思い出したような顔をした。後ろを見ると全員が出

動出来る面構えをしている。

「チックショー！ 離せー！！」

縄で手首足首を縛られ、担がれている李麻が叫んだ。李麻と共に足止めに入った二人もそうだ。

「何が一時間もてばいいでしょ、よ！ 三十分ももたなかったじゃ

ない!!」

「所詮御月だからなア……」

その一言で李麻の中の何かがぷつぷつと切れたらしい。血相を変えて出来る限りで沖田に向き直った。

「うるせえ! あんた等がしゃしゃり出てくるからだろ! 大体所詮御月って何!? 御月の存在全否定かこの上司殺しが!!」

「何ソレ! アタシ等が悪いみたいじゃない!!」

「人聞きの悪い事言うんじゃない。全部未遂でイ」

「てことは殺意満々じゃねえーか!!」

それまで何も言わなかった浪士たちだったが、突然大声で言い争いを止めにかかろうと息を大きく吸う。

「「うるせえぞ!! テメー等今の状況分かってんのか!!」」

「「テメエ等がうるせえんだよ!! 黙って上の言われた通りにしてろボケェ!!」」

涙目になった浪士達を墨に、現在地……つまり敵陣の向こうからある光景が見えた。

「あれ? アレふくちよー?」

李麻達が見たのは、何時になく真剣に勝負をしている恋歌の姿。

「いや、もっと面白い奴がいるわよ……」

「やっぱり梨本の野郎が黒幕か」

「まさかとは思ったけど……あの梨本と互角にやり合うなんて……」

一時は彼の下で活動していた美香には信じられない光景だった。

いつの日か、難なく幕吏を20人、一人で始末する事が可能な男が……小娘に。

「そーお？ ふくちょーが本気出したらコイツ位とは対等以上に切り結べるでしょ」

「じゃあ……このままいけば」

「いや、逆。僕も病氣の名前は知らないけどね、僕らみたいな仕事してる奴に稀にかかる奴がいる。ある出来事で糸が切れて銃や刀への警戒心が薄れてくんだ。相手がアレじゃ長期戦も必須でしょ」

外野でそんな事が言われている事も知らないで、梨本は完全に気後れしていた。

おかしい。俺の方が斬ってる、俺の方が押してる。なのに……何故コイツは尚斬りかかって来る！？

そんな事を考えているうちに、完全に押されていた。切り傷だらけの女一人に歯が立たないのだ。

おかしい。どう考えてもおかしい。恋歌の刀を食い止めている間頭の中でそれが繰り返された。

確かにコイツは戦闘中に無駄口を叩くようなタイプではない。しかし自分の挑発に耳を貸さなかった事は無かった。

「黙れ」「ほざけ」などの短い返答は何度か帰ってきた。今回はそれが一度も無い。

須藤の立場から、この状況で余裕が無いなんて言う人間がいるのだろうか。もしかして……

力押しされて、大の字に倒れてしまった。その時右手に砂を閉じ込め、恋歌の目に向けて投げる。

「!?!?!?!?!」

目に砂が入って、急に視界がぼやけたと思えば、右肩に電撃のよ
うな激痛が走る。

恋歌の右肩にグツサリと刺さっていたのだ。

引き抜いた瞬間、水飛沫のような血が溢れた。

「お医者さん以外の人から貰った薬は即刻捨てなさい！」（後書き）

李麻.. 大谷さん（ONE PEACEのチョッパーの中の人）

想像してみたけど我ながら良いチョイスだと思ってます！

恋歌.. 坂本さん（荒川UBのニノ・黒執事のシエルの中の人）

シエル声が一番しっくり来ます。

ONE PEACEのナミさんも考えたけど師匠（友人）から
「ワンピースだらけやないか！」と突っ込まれたので。

まあ私個人の意見なんで。

他にもこの人は？と思ったブラザーの声を密かにお待ちしております。

「カードゲームに騙まし討ちは必至」(前書き)

You Tubeで鋼の錬金術師FAのおまけ見てましたーww
マイルズ少佐登場でテンション上がったのもつかの間、

「バーカ！バーカ！う〇〇たれー！お前の母ちゃん出ーべーそー！
お尻ペンペン！あーばーよー！ー！ー！」

中井さんボイスでんな事言われたら大爆笑するしかない。
マイルズ少佐も元々クールな方なのでビックリしましたwwww

「カードゲームに騙まし討ちは必至」

出血した右肩をかばいながら、梨本を見る目は、これまで彼が見てきた須藤恋歌の目だった。

「ほーお。その様子を見る限りだとさっきまでは無我夢中だったと。自我を失った途端にアレって事は、アンタ普段、自分の力制御してるってわけ。人殺しが怖いんだよ。それでよくもまあ……」

梨本の言葉が言い終わらないうちに煙幕が視界に広がる。原因は言うに及ぶ。

煙幕が晴れた時に、恋歌の姿はなかった。フツツと嘲笑い、自分の陣に合図をやった。

陣を出て、五、六歩も出れば、崖から足を踏み外してしまう。人質達が陣から姿を出した。

「ナニコレ……もしかしてバンジー？　なら命綱がほしーんだけど」

崖へと連れられた李麻はふとそんな事を口にした。

「ンなわけねーだろ！！　何でこの状況でお前等遊ばせなきゃならねえんだよ！！」

すかさず浪士が訂正にかかる。

「あつ何だバンジーか。すいやせーん。だったらもつと高くしても
らえやせんかね？」

「イヤだからバンジーじゃねえから！！」

「じゃあ私は、高いトコ苦手なんでパス……」

「バンジーじゃねえつつつてんだろが！！　お前等、仲間の対応次第でこっから落っこちるの！！　落ちたら落ち続けるから！！　ビョ
ヨーンってならないから！！」

やいやい言っている奴等は置いておき、梨本は愉快そうな口調で張り上げた。

「須藤さあん！ どうせどっかの物陰に隠れてるんだろうから一方的に言うよー？ 要求は簡単。俺は君に出てきて欲しいだけなんだ。聞けないってなら一人ずつ落とすから別にいいよ」

使い捨てか、乗り手がやられたかは知らないが、戦車の陰に隠れていた恋歌の耳には一語一句残さず聞こえていた。

人質達への心配は無い。あいつ等ならいくらでもどうとも出来るだろう。

しかし、出て来なければ血の後を辿って来られたら勝てる自信など、無い。

ザクッ。ザッ、ザッ、ザッ……

足音がこちらに向けて近づいてくる……まだ……死ぬ訳にはいかない……

死……死……死……

そんな事を考えている間に、梨もとの姿がすぐ頭上に見えた。

一旦剣を鞘に沈め、上着を掴んで彼の顔面目掛けて投げつける。

なんだその程度の騙まし討ちか。上着はあっけなく両断された。
また恋歌の姿が無い。

「全く……逃げるのが好きな子……!？」

脾腹が痛い。触ってみると、手の平にはベツトリと血が付いていた。刃先の感触も。

背後では栗色の長髪が風邪に揺られていた。首を後ろに向けてみれば、柄は左手にしっかりと握られていた。

「ど……どう……」

「貴様は言ったな。人殺しが怖いのだと。その通りじゃ……今でも人を斬るのは怖い。でも……」

殺しを恐れんのはただの獣。一般人でも侍でも真選組でも浪士でも……そこに差は無い。

覚えておけ」

殺しを恐れん奴に帯刀なんぞする資格はない。

刀を抜くと同時に、ドツと血が流れた。そのまま梨本はうつ伏せに倒れた。

「参ったね。まさか……左利きだったとは……」

「剣を振るうのは右でも左でも出来る事だからな」

「両利きかよ……」

何時ものように逃げんのか。

俺、君と違って頭良いからね。自分の潮時くらい分かるよ。今回は俺の独断なんだ。失敗したし確実に殺される。さっさとトドメさして進みな。

そんなやり取りをしている時、パトカーのサイレンがノイズのよう
に響く。

サイレンに紛れて『真選組のお通りだよー!』という山崎の声が
聞こえる。

どうやら無事、対抗剤は届いたらしい。自分達がパトカーを降り
た地点で同じく降り、斬り込みにかかった。

「感染者……ッ皆治ったのか……こりゃ……ダメ……だ……早く殺
しな? ムサイ浪士に……殺さ……れるッ……より……アンタにッ、
殺された方が……」

次の瞬間、恋歌は左腕一本で梨本を担ごうとしていた。

「アレ……日本語通じてる……?」

「貴様ツ……喋れる元気があるなら立て!! 乙女の細腕一本で大の男が持ち上げられると思うておるのか!! ふぬぬっくく!!」

あ、いけた。なんて言いながら思い体を引きずって自分の陣へと行く。

「ねえ……聞してる?」

「ああ。だが何故貴様に指図されにやらん。貴様ごときに名誉の戦死など過分すぎる! 生け捕って拷問にかけてくれるわ」

意識が曖昧の中、彼はフツとほくそえむ……いや、微笑んでいた。

「君、なんだかんだ言ってお人好しなんだね……」

「人より他人の命にうるさいだけじゃ」

さっきまで殺そうとしていたじゃないか。

そなたもな。

「戦場で敵の世話になるなんぞ……随分、思考が浅はかになっちゃまったじゃねえか……梨本」

その声を聴いた瞬間、梨本は自分の表情が氷のように凍てついたと言う。

最期の力を振り絞り、恋歌の脾腹を押した。案の定二、三メートル飛ぶ。

タッチの差で、梨本の胸に一本の刃が突き刺さった。

「な……梨本!？」

新手を無視して彼の元に駆け寄る。

「へへっ……俺も……ヤキが回ったっ……かな……敵を庇うなんて

さ……」

「梨本！！　しっかりしろ！！」

人の心配してる場合かよ。今のアンタにあのバケモンは倒せねえ……逃げろ……

そう言ったつもりが、虫のような吐息になっただけだった。

頭ア！
自分が言うのも何なんですが……アンタ、
ホントに侍ですか。

侍の風上にも置けねえ野郎だな

！！

敵味方関係なく、彼に出会った人間はそうこぼした。

ねえ、須藤さん。

あるべきなのか分かんないけど

俺には「侍」ってやつがどう

最期までなりきれなかったのか、それともギリギリなりきれ
たのかは分かんないけど

今の俺、ちょっとカッコ良かったでしょ。あ

はは……

「梨本オ!!」

その声は、何度繰り返しても、どれだけ大きな声で叫んでも、もう彼には届かなかった。

「優しいねえ……手前を殺そうとした奴の死をそこまで悲しめるか……」

「独断とはいえ、自分の為に動いた部下をそのように切り捨てられる貴様が鬼であるだけ。のう……」

「カードゲームに騙まし討ちは必至」(後書き)

第一部、一回登場した今回のラスボスさん。

あんなにgdgdにしたんだ……リベンジするしかあるめエよ」

「▽」 yī~~~~

「仲良くないクラスメイトにバッタリ会ったら気まずいよね」(前書き)

戦の真っ只中。あれから何時間も経ったと言うのに、一進一退の攻防が続く。

両者、弾数も減ってきている。

トランクに積んだ球をとろうと隊士がパトカーまで退いてきた。

トランクは、開けたら閉める。それが暗黙の了解だった。しかし、一つだけ開いている。

隊士が不審に思った時には既に、五歳の少年が戦場を駆けていた。

く仲良くないクラスメイトにバッタリ会ったら気まずいよねく

包帯で片方包まれた目。

女物の着物を、着流しで着て、鰐のない刀を腰に差している。

何より以前嗅いだ、危険な匂い。

既に事切れた梨本を横目で見ながら経ち、今度はその男に切っ先を向けた。

「優しいねエ……手前を殺そうとした奴の心配するなんざ……」

「独断とはいえ自分の為と動いた部下を斬り捨てられる貴様が鬼であるだけ。のう……」

鬼兵隊総督殿」

不気味に唇を吊り上げて、からかった口調で言う。

「名前で呼んじゃくれねえのか？」

「生憎、人の名を覚えるのは得意でなくてな」

先手必勝！ 自然につきまってくる負の気持ちを振り払うように高杉に斬りかかる。

斬りかかられた高杉はと言うと、鞘から剣を抜き、彼女の斬撃を受け止める。片手で振るわれた剣など、何も恐れる必要は無い。一気に力を込めた。

両腕と片腕。そうでなくても男と女。どちらが負けるかは言うま

でもない。

いとも容易く剣を弾かれた恋歌は次に来る敵の斬撃を辛うじてかわして後退していった。

バケモノだ。五体満足であってなくても、彼女の手にはとても負い切れない。

その頃囚われていた三人は、敵陣のテントに戻されていた。原因は、高杉の到来だ。

「バカな……何故高杉が!!」

「はあ？ お前等のボスだろ？」

「バカね貴方。今回のテロは梨本の独断だからでしょ」

「あ。そっか！」

「おい！ 一旦退くぞ！」

と、浪士が思い立った時にはもう遅い。李麻達の周りにいた浪士は胸に一太刀浴びて肉塊となったのだ。

程なくして今度は、三人の手枷足枷が解けた。

「ホンマ……家おらんと思ったら何しとんねん！ 姉者！！」

「……待たせてすまない」

その声に、美香は、少し目を潤ませた。

「一！^{はじめ} 伊吹^{いぶき}！！ 来てくれたの！？」

え、誰？ そんな顔をしている沖田と李麻に三人は向き直って言った。

「あたしの弟達よ！！ もう大丈夫なの？」

「この通り！ 忠義さんが対抗剤持って来てくれてん。それと、お礼やったら俺らにだけやなく……」

姉者探しとった俺らと一緒にここまで来てくれた……鬼の副長さんにも感謝するんやな」

一が親指で指した先には、タバコを葎かした土方がいた。

「土方さん!! てっきりくたばったかと思ったよ!!」

「ギリギリで対抗剤が来たからな」

「俺もてっきりくたばったもんだと思ってやした……チツ」

「『チツ』って何だ『チツ』って!! お前どんだけ俺に死んでほしいんだよ!!」

またややこしい口論が繰り広げられそうな空気。李麻が口を開けた。

「シな事言ってる場合じゃないでしょ！？ 僕達現状読めないんだけど！！」

「対抗剤飲んで復活した連中が二時間ほど前に来てな。一気に息を吹き返してる。が、敵も数が増えてきた。気が抜けねえ状態だ」

「じゃあ、こういうのはどうでしょう」

沖田の拳手に全員が反応する。

「ここは敵陣真っ只中。逆に言うなら司令塔クラスの浪士を検挙するには絶好の機会でさア」

「なるほど！ 沖田さん頭良い！！」

「それが一番良さそうね。一、伊吹！」

「おう！」 「ああ！」

鶴の一声で敵陣の奥へと進む沖田達。土方も続いて行こうとしたが李麻が留める。

「ねえ、土方さん」

「何だ」

「土方さんがここに来た目的って？ ホントに僕達を助ける事なの？ もっと別にあるんじゃないの？」

ふざけていない。李麻の目、顔、口調……真剣そのものだった。

「ねえよ。他意なんか」

そう言った土方の目は、伏せられていた。

「ふくちよーがアンタに心底惚れてるって事、知らないなんて言わ

せないよ。アンタは知ってて何時も通り……」

「知ったら今まで通りの態度を取っちゃいけないのか」

彼にとって突かれなくない事だったらしい。表情が陰しくなっていく。声色も暗い。

『私が……この須藤恋歌が惚れた男は……仲間や大将見捨てて逃げるような卑怯者ではないっ!!』

あの時のパトカーで、近藤を助けに行こうとしないトッシーの中にいる自分に向けた恋歌の言葉。

やっとこさ主導権を取り返した時、一番最初に聞いた言葉。

その時知ったのだ。彼女が自分に対してこれほど強い気持ちを抱いていたのを。

今までそれを言わなかった、そういった素振りを見せてこなかった彼女の気持ちもボンヤリと。

それでも自分がとった選択肢は、今までどおりに接する事だった。

似たような体験をした自分にはそれとなく分かる。

愛しい人を前に、何度名前を呼びそうになったか。何度本当の気持ちと言ってしまいそうになったか。

それでも相手の幸せや周りの目を気にして、自分に自ら辛く苦しい思いを強いてきた気持ちも。

次第に気付いたのだ。彼女に対して……――

「今ね……」

李麻の言葉で、ふと現実に戻った土方。耳を働かせて話の続きを聞いた。

「ふくちよー、高杉と戦ってる。って言ってもあの人深手負ってるから勝負にもなってない。動乱の時爆発した橋の方に逃げて行った」

そう言った李麻はさっさと敵陣の向こうへと走っていった。全くこれだから子供は嫌いだ。

橋の方に方向を変えた時、小さな影が、同じ様に橋に向かっているのを見た。あれは……

「翔太……!？」

考えるより先に、土方もまた橋の方向へ歩を進めた。

く仲良くないクラスメイトにバッタリ会ったら気まずいよねく（後書き）

高杉さんを登場させるまでの経緯

? なしも（梨本）との戦いがあまりにもアツサリしすぎた。ヤバイコレ。

? コレ、新たな敵を用意しなくちゃやばくね？

? あ、なしも一応鬼兵隊なんだし鬼兵隊の誰かにしよう！

? 万斎さんか、高杉さんか……

? 万斎さん、考えたら二部で出てきたし。高杉さんにしーよおっと。

というノリでした。ファンの皆様、マジすんません！
もっとマシな恋愛描写出来ないのかな私。

「子供の健気さは人間国宝」（前書き）

友達に新選組が好きなら「薄桜鬼」知らなきゃ。ツていわれました。

チラッと見たんですけどキャラの名前覚えるのタルかったので（コラ！）それ以上見ませんでした。

でも、それじゃあ、あまりにも失礼じゃまいかと奮い立ち、アニメ全部見ました！

……お母ちゃん。新選組の屯所でイケメンが屯ってるトコやってんね。

「子供の健気さは人間国宝」

逃げてでも逃げてでも、追って来る、敵将。後ろから来る斬撃を交わすのは今や至難の業だった。

などと考えていたら、目の前に崖が広がり、これ以上前へ進めなくなっている。

どう切り抜けるか……前方は崖、後方には敵。騙まし討ち……こいつに通用するのか。

あらゆる策を考えている最中、首に何者かの手が当たった。

力士の張り手のような勢いで鉄筋に押し当てられて、呼吸がままならない。

高杉の顔が横目に入る。この手の正体は言うまでもなからう。

「かっ……」

意識が遠のくなか、首がめりめりと音を立てて縮んでいくような感覚がする。

あまりの苦しさに左手から刀が滑り落ちた。

「お前には二、三確認してえ事がある。順番に答えてもらおうか」

その声が聞こえたと同時に、首にかかっていた圧力が弱くなっていく。ひとまず呼吸を整えた。

「聞きたい……事というのはこうか？　ゲホッ……梨本から貴様等の情報を聞いたか。こちらに正義の聖杯の対抗剤は残っているか。忠義殿は何処か……であろう？」

喘ぎ喘ぎで言い連ねたのを聞いた高杉は、ほう……を感嘆の声をあげて口を動かす。

「いいねえ。頭の回る女は嫌いじゃねえ」

「それはどうも。……で、その答えを端的に言わせて貰う。……私は何も……知らん……ッ」

再び首にかかる圧力が上がる。まさか急に来るとは思っていなかった。

酸素が……さんそ……サンソ……

「悪いな。俺ア気の強い女ってのが苦手なんだよ」

空気を漂うような口調からは考えられないような強さで絞められる首。

更に上下左右と揺すられて、酸素が体から出てゆく。

薄っすら目を開けた時、信じられない人物が視界に入った。

がしい！ か弱い力なりに精一杯高杉の右足にしがみ付く翔太の姿。

「恋ちゃんから手を離せえ！！ それ以上いじめるなら僕が許さないぞお！！」

翔太……。首を絞める高杉の手に、思い切り爪を立てる。少し圧力が緩んだ。

「翔太ァ！！ 逃げ……」

それが言い終わる前に、翔太が飛んでいた。いや、高杉に蹴飛ばされていた。

蹴飛ばした張本人は、恋歌の首から手を外して一步一步、なぶる様な足取りで翔太の方へ歩み寄る。

助けないと……前進しようと踏み込んだが糸で繋がれたように動けない。

よく見れば髪が鉄筋に絡まって糸のようにピンと張っている。奴が上下左右に揺らした目的を今更ながら知った。

少し考え込んだが、恋歌は覚悟を決めた表情で懷に手を突っ込んだ。

「貴っ様あああああああああああああああああああー！」

少年に向けて、刀を振り上げたその時、右手の甲に血の滴る感覚を覚えた。

見れば、小刀が刺さっている。そして刃先には、細い栗色の糸のようなものも一緒についていた。

ザツという砂利を踏む音がしたかと思えば、恋歌が少年の盾となるような形で立っている。

以前と何が違うかという腰までであった栗色の髪が、肩にかかるか否かくらいの短さになっていた。

「随分と丈夫な奴だな。手前の命よりそのガキの方が大事か」

「うるさい」

互いに睨み合ってから、甲高い金属音が聞こえる。気持ちに乗っても劣勢は覆せない。何といっても片手では……

片腕……。肩から真っ赤に染まっている右手に目をやった。

ギイン……。これで何度、剣を弾かれただろう。次の瞬間、白い細腕一本でしか支えられていなかった柄に赤く染まった腕が一本加わった。

「!?!」

痛みで疼く右肩をよそに、全身全霊で振り抜いた刀は、相手の得物を叩き折った。

彼の剣の刀身を十とすると、残っているのは三。勝利への道筋が見えてきた。

「須藤さん!! 局長の言伝いけんで加勢かせいしろと……」

向こうから来た隊士の一人。奴の目が光ったのを恋歌は見逃さなかった。

「たっ……たかす……わっ!？」

ドスっという剣が肉に刺さる音をした。戦場では飽きるほど聞く音。

間に入った恋歌の左脇腹から、血がボタボタを垂れ落ちる。

「つくづくお人好しな女……」

いいかけて止めたのは、合わさった恋歌の目がまだ死んでなかったからだ。

この状況で一体どこにそんな力があるのか。と言いたくなるような突きが彼の左のこめかみをかすめる。

なるほど。肉を切らせて骨を断つ、か。（断てていないわけだけれども）

恋歌の脇腹から刀を抜き、唇を吊り上げて言う。

「いい戦術者だな……気に入ったよ。俺もお前も今日は分が悪イなあ。またの機会にやりあおうや」

くるりと背を向け、そのまま手を振る。その瞬間恋歌の身体がずるずると落ちた。

「須藤さん!!……どうして……」

「そうだった……加勢にッ、来てくれた……んだったかッ……翔太……
……翔太を……安全な場所に……」

「ご自分の心配をなさって下さい!!」

自分を支えてくれている隊士の手が震えている。本気で心配してくれているのがよく伝わった。

「早く……行って……くれ……頼……むッ、から……そなたにしか
ッ出来ぬ……ことだから……」

隊士は、ゆっくり恋歌を横たえ、翔太を抱えて走り出した。

良かった。これで翔太はきっと……大丈夫。無事に父親と暮らせる。

大丈夫。大丈夫。これでもう心残りはない……。

け……

ああ、そういえば心残りがあつたんだっ

視界が霞む。今、寒いのか熱いのか……よく分からない。ただ喉が少し渴く。地面の温度さえ感じない。

どうか、神様……お願いします。

させろとは申しません。

この状況で永らえ

だけでもいい。

ただ、あと一時間、三十分……いや、刹那の時

もう少しだけ、眠らないのをお許し頂けませんか。そして……

「あの……仏頂面を……最期に見せてはもらえませんか……」

中に、
声にならない声を出して、横たえてみると、霞む視界の
人間の足が見えた。

「子供の健気さは人間国宝」（後書き）

あ、ヤベ……どうしよう。私の作品の高杉さん悪杉じゃん。
女子供に暴力とか悪杉じゃん！超悪いじゃん！

え？そーまでして高杉さん悪者にしたいのかってかえ？

え！？ちよっ、違う……違いますよ！？私も高杉さん大好きですよ！！

だからその手に持っている凶器は下ろしてくれたまい。

ゝ人間窮地に陥った時の行動がすごいゝ（前書き）

今回、いよいよ最終回でございます。そこで……

アテンションプリーイイイイイイツツズ！！

？ハタから見たら「はよ119番しなさいな」と突っ込みたくなる
お話です

？土方さんちやう。デレ方さんや。

？恋歌何様ーww

これらに、「ヤベ。キメエ」と思った方。すっ飛ばして「後書き」
読みましょう。

そしてこれを読んだ方へ

私への中傷は構いませんが、恋歌に対する中傷・誹謗は一切許しま
せん
ご了承ください

「人間窮地に陥った時の行動がすごい」

土方が端の近くに着いた時には、戦っている恋歌と高杉どころか人間の気配などまるで感じさせなかった。

ただ、右肩と左脇腹におびただしい量の血を流した隊士が転がっている。

横髪が邪魔で誰なのかは分からない。ただ髪は短いので恋歌では……

そういう結論に終止符を打とうとした時、鉄筋に絡まった何かが風に揺れているのが見える。

確認しようと駆け寄れば、鉄筋に絡まっていたのは茶色い糸の束。感触から髪であると分かった。

そして、そこに転がっていた隊士の髪の色と同じだということも
……

そこに転がっているのが恋歌だと気付くのにしばし時間を要した。

いや、おそらく一瞬の内に理解したのだろうが、信じたくないという己の心との葛藤の時間を要したのだろう。

「恋歌!!」

鉄筋に向かった時とは、倍以上の速さで駆け寄り、安否を確認する。

あの時と同じだ。がつくりうな垂れて、反応しない。以前溺れた恋歌を陸に出した時と同じ。

ただ、あの時とは違う事が二つ。

一つは剣による怪我で出血が多すぎる事。白い首には赤黒い痣が人の手のそれだ。

もう一つは……まだかすかに息がある事。薄っすら開かれた目は自分をちゃんと見ていた。

恋歌は必死に口を動かしている。何か言いたいらしい。彼女の口に耳を当てる。

「無事か……よかつ……」

無視のような細かい声で……自分の心配をしろ！！
頭を抱えた
手が震えていた。

「……もうすぐ救護班が来るから、ちゃんと目エ開けて待ってろ」

恋歌は何か言いたげに、土方の上着を掴んだ。小さな手に込められた力は、あまりにも弱々しい。

「……いい……から……ッ、自分の……体だかつ……自分で……分か……る……からッ……」

「副長命令だ……頼むから待っていてくれ」

満足だよ。その言葉が聞けただけで……上着を掴む手が力なく滑り落ちた。

真っ黒な闇。進めば進むほど黒は深さを増して行く。

何者かに導かれるかのように、ただやみくもに恋歌は歩いていた。

ようやく真正面に、綺麗な小川が見えた時、凜とした女の
声が聞こえたのだ。

『貴女にはまだ、戻ってやらなければならない事
があるでしょう?』

「誰!？」

四方八方振り向いても誰もいない。でもどこかで聞いたような、安堵するような声。

『ここへ来るにはまだ早い。私の代わりにあの人達……あの人をお願ひします』

その女性の声で、真っ暗な闇が、見る見る白い光に染まっていく。

「あの人って……それに、貴女は……貴女はもしや……——」

『貴女じゃなきゃ出来ない事なのよ』

ぱちくりと目を開けてみれば、白い光……と言うより、ムサイ面
子が真っ先に視界に入った。

「恋ちゃん!!」

「ふくちょー!!」

「全く、心配かけさせやがってバカヤロオ……」

カレンダーを見てみれば、テロが起きた三日先の日付が記されて
いた。

「翔太、李麻、局長……その人は？」

一番端にいた、中年の男を指差す。

「木下 忠義です。私は貴方がたに何と……何とお詫びと感謝をしていいか……」

肩を震わせる忠義に、一同は笑い合って、彼に声をかけた。

「私どもはすべきことをしたに過ぎません。詫びも感謝も必要ありません。貴方と翔太君が笑ってさえいれば」

「しかし……私は、副長さんに……私があんなものを開発さえしなければ……」

「何の話だ？ 俺ア全身筋肉痛で休んでただけだ」

それまで車窓を見ていた翔太が、あ！ と声を上げて忠義の手を引く。

「パッ！！ お迎えが来たよ！！！」

「む、そうか……」

「お迎え？」

沖田の質問に、忠義は幸せそうな表情を浮かべた。

「一連の事件の後、妻から連絡が来ましてね。よし、行くか翔太！」

「うん！ バイバイ！！ 恋ちゃん！ 皆！……おじさん！！！」

そう言っパタパタと病室を後にした。

「待てコラクソガキ！！ 誰がおじさんだコラッ……」

「副長オオオ！！ 落ち着いてください！ 子供相手に剣はダメで

すううう……!!」

抜刀して翔太の後を追う土方を、山崎が止める。

「まーまーまー……僕らも帰ろうよ。始末書が山のように残ってんだよー」

「ああ、そうだったな。トシ、残っというてやれ」

「「え……?。」」

近藤の一言に同時にそう言った土方と恋歌。それを見た山崎は近藤に顔を向けた。

「ダメですよ局長。この二人が残ったらケンカ三昧で近所迷惑です。ここは俺に……」

「ザキ、空気を読め。頼むから空気を読んでくれ」

山崎の肩をしっかりと掴んだ李麻は、病室のドアへと歩を進める。

「じゃあな、恋歌。お大事に！」

「明日ふくちょーの分の始末書持って来るかんねー」

「ちょっと……御月隊長……空気って何ですか空気って……」

「（……特に無いんでパス）」

近藤、李麻、山崎、沖田。順番に病室から出て行った。ぴしやりとドアが閉まる。

病院は個室であるが故に、長い沈黙が続く。腹の怪我が疼きだすのを感じた。

腹筋を使わないように起き上がって、俯いた。

世界中……宇宙中の人間に訊きたい。こんな時どうすればいいのか……

話題……この際何でもいい。この沈黙を破るための話題……

などと考えている時だった。脳天に隕石が落ちてきたような痛みに襲われた。

この沈黙をどうかしようと考えている間に土方の鉄拳が降りたらしい。

「なっ……にすんじゃ貴様……!! 怪我人だぞ!! もうちょっと優しく出来んのか!!」

「救護班来るまで待っとけつつたろ！！ あっさり氣ィ失いやが
ってよ！！ あんま怒鳴ると腹に響くぞバーカ！！」

「無理矢理優しさ垣間見せんじゃねーよバーカバーカ！！ 全く、
これだから田舎モンは……レディーの扱い方一つロクに知らんのか
と……ひゃっ!？」

いきなり左腕を掴まれたかと思うとそのまま引っ張られて、土方
の胸にトンと収まっていた。

酔っているのか。と考えたが、酒の匂いなど一切しない。タバコ
の匂いが鼻をくすぐるだけだ。

今、あれだけ恋焦がれていた男の胸の中にいるという現実が頭の
中で文字のようにはっきり浮かぶ。

次第に耳まで桜色に染まり、震えだすのが分かった。

後で振り返ってみても、何故彼女にあんな大胆な事が出来たのかはよく分からない。

ただ、抱き締めた恋歌の身体はどこにでもいる少女と大した差はなかった。

こうして包み込んでしまえば、彼女を覆い隠せてしまう。

その華奢な背中と小さい頭を、自分の身体に押し付けた。ガタガタ震えている。

不器用なのは、自分でも分かっている。だから、この娘に憂いの言葉など言ってやれない。

その代わり両手に、メッセージを託した。

心配かけさせやがって。

もう痛くないか？

怖かったか？

助けてやれなくて悪い。

生きていてくれてありがとう。

口にはとても出せない事を全部、全部。耳元で、恋歌のか細い声が聞こえた。

「……やっぱり、嫌いじゃお前なんか」

拗ねた子供のような口調に、ふっと笑って言い返してやった。

「奇遇だな、俺もだ」

「ふーくちよー。土方さーん。始末書パトカーに積んでたから届けに……」

病室に入るや否や、おおかた予想通りの光景が真っ先に視界に入る。

しばし固まったが、音を立てぬよう、そっとドアを閉めた。

「御月隊長？」

李麻の行動を不審に思った山崎が、彼の名前を呼ぶ。

「やっぱ明日でいーやつ！ あいつ等なんかほっというてお昼食べに行こー」

「え！？ でもソレ今すぐ須藤さんに要るものなんじゃ……」

愛しい人の体温より、心地良いものがあるはずもなし

F i n .

く人間窮地に陥った時の行動がすごいく（後書き）

第二部『銀魂く集合！真選組！！』いかがでしたでしょうか？

またまた、最後の最後で不快な思いをさせた方もいるかと思います。
申し訳ございませんでした。

え？原始人みたいな描写してんじゃねえって？

バッキヤロー！！恋愛つったらチューくくハグだろが！！

別にちすシーン恥かしかった訳じゃねえからな！！

その気になりや書けたかな！！ナメンナよ！！、（ハダ＃）ノ
プンスカ

最後にこれだけは言うておく。

また子ちゃん誕生日おめでとう！

〈後書きと次回作予告〉

この度は『銀魂』集合！ 真選組！！』を最後までご覧頂き、ありがとうございます。

前作『銀魂』出動！真選組！！』と合わせて1年を超える（私にしては）長期連載でした。

飽き性な私がここまでやってこれたのは間違いなく以下の方々のお陰です。

*S p e c i a l T h a n k s *

更新のたびに感想を下さった玖月様

前作から引き続き、感想を下さった玉兎様（最近会わないので寂しいです。お元気ですか？）

私が友人に意見する勇気を与える感想を下さった琉御蒔様

可愛らしい感想を下さったpokonattuu様（何時も感想を読んで和ませて頂いてます）

ギャグ・シリアス両方好きと感想を下さった胡蝶楓様

こんな作品をお気に入り登録して下さった11人ものユーザー様方

こんな作品に評価を入れて下さったユーザー様方

こんな作品を、一度でもアクセスして下さった8,777人ものユーザー様方

この小説を最後まで書かせて下さった当サイトの管理人様方

up前にプロット。作品を読んでいただいているリア友様方

貴重なアイディアとそのキャラとして生まれてくださったネット友達と御月李麻様

私の頭の中に浮かび上がってくれた須藤恋歌様

そして、今この後書きを読んで下さっている貴方様に、心よりお礼申し上げます。

＊オリキャラ＊

苦楽を共にしてきたオリキャラ達にメッセージをば。

T O・恋歌

いつもありがとう。李麻も含めて一年やってこれて楽しかったよ！

私の恋愛描写が未熟なばかりにいい思いをさせられなく

てごめんね。

T O・李麻

いつもありがとう。話に詰まって困ってる時、いつも助けられました。

今回も恋歌より出番が少なくてごめんね。

とまあ堅苦しい後書きはこの辺にして、皆さんも気になっている『次回予告』をば!!!

といってもブログを見てくださっている方はご存知なんですけどね。

……え？ どうせ第三部『銀魂！』突撃！真選組！！』的なモン始めるんだろ？ ってかい？？

H A H H A ！！早とちりはやめたまえブラザー！

えー、例にならって決定事項なんで文句は一切受け付けません！！

次回作は新作『銀魂く美しき蜘蛛の巣にかかりて』近日より連載開始。

第三部やれよ！空気読めよ。とか思ったそのアナタ。

空気は読むモンじゃねえーんだよ！！深呼吸する
モンなんだよバーカバーカ！！

今までが真選組sideだったので今回は万事屋sideで参ります。

オリキャラは女性、一人です。恋歌や李麻もちよいちよい出すのであしからず！

さてさて、もう時間ですね。それでは皆さん……

『銀魂く出動! 真選組!!』及び『銀魂く集合! 真選組!!』
を読んで下さって本当にありがとうございました!!

新作の方もよかったら読んでやって下さいっ

梨栖

またどこかでお会いしましょう! b y

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6438m/>

銀魂～集合！真選組！！～

2011年10月6日12時41分発行